

提督落ちたから自力で鎮守府作る。

空使い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦このアカウント登録数≧提督適正者数。
でも鎮守府の数は20くらい。

当然、提督になれるのは超優秀な極一部だけ。

提督になれなかった青年が、おっぱいの大きい艦娘といちゃこらすべく自力で鎮守府を作っちゃう系のお話。

勘違い要素もあるよ。

目次

提督落ちた、イケメン死ね！	1
着任、勿忘鎮守府！	15
小さな一歩	25
一から始める鎮守府運営	35
お水は大事	46
材料集め	56
君に決めた	66
初めての建造	78
ある提督の追懐	89
さらばツインテ	97
球磨ちゃんの憂鬱	107
自分の誕生秘話とか、聞かない方が良くに決まってる	118
発艦、零水偵	133
ライン	150
呼び声	160
漂着する意思	171
葛藤	180
初お風呂回が深海棲艦だった件	189
新しい艦が鎮守府に	202
妖精さん事変	216
捕虜と尋問	229

提督落ちた、イケメン死ね！

「やべえ、どこだココ」

一筋の光すら見当たらない曇天。

周囲には深い霧が立ち込め、波一つない黒い水面みなもに浮かぶ木造の小舟の中、俺は一人、途方に暮れていた。

「くそーお……なんか船の一隻でも通りがかってくれねえかなあ……」

羅針盤は壊れて役に立たず、かい權はうっかり流された。

頭の上で「よーそろー！ よーそろー！」と意気揚々に騒いでいた色白な妖精さんは、いつのまにか呑気に昼寝を決め込んでしまっただけ。まったく頼りにならない。

……ああ訂正、二人だった。

いや、一人と一匹か？

「くそお、こんなはずじゃなかったのに……！」

俺がこんな何もない海原でどん詰まりの状況にあるのには、海よりも……いや、川ぐらいよりは深い理由があるのだ。

忘れもしない、あれは良く晴れた夏の盛り。

東の茜空にうっすらと一番星が輝く、日暮れ頃の事だった――

@ @ @ @ @

その日、たまたま昼過ぎの学生バイトがシフトに穴を開けた。

昼間何の予定もなかった俺は、嫌々ながらも頼まれた代役を断れず、空も赤らむ十九時頃にシフトの夜番に備えていったん家に帰るコトになった。

その道すがらの事だ。

「くっそお、なにがバンドのミニライブだよ青春しやがってちく

しよお……」

只でさえ夜勤ばかり週に六日も入れているのに、十三時から六時間の昼勤追加。

いかな片田舎のコンビニバイトと言えど、疲れるもんは疲れるのだ。

特に夕方はキャピキャピと無駄に元気の良い若者が群れでやって来て陰キヤな自分にはなにかと堪える。

チラチラこっち見んなし。

バイト先のコンビニから一人暮らしのボロアパートまで、原付で十五分。

二十二時のシフトまで二時間程の仮眠がとれるはずだった。

しかしまた運の悪いことに、大学時代のそんなに仲の良くもない友人から三万円で譲り受けたポンコツスクーターが二ヶ月ぶり三度目の故障をしくさってからに、俺はちよつと涙目になりながら重い鉄屑を転がして夕暮れの土手をとぼとぼと歩いていた。

「これ絶対家ついたらすぐチャリでトンボ返りじゃん……ついてねえ……ん？」

川原の水際でキヤいキヤいと楽しそうにはしゃぐ小学生っぽい声。それになんとなく顔をやり——俺は目をしばたいた。

「それー」

「やったなー」

「きやー」

「きやー♪」

水をパチャパチャと掛け合つて、楽しそうに遊ぶ幼女達。

この時期の夕方に良く見る光景だ。

しかしなんとというか——

「ちつちやく……いや、ちつちやくすぎねえ？」

あまりにも小さい。

しかも、遠目の錯覚とも思えないくらい小さなそのナマモノたちは、どうみても二頭身。

フシギ生物だ。

ランニングしている小太りのオッサンが、川辺に目を向けて固まる俺を見てから、俺と同じ方をチラッと見たあと、怪訝そうな顔をして通り過ぎてゆく。

見えていない？

「まさか、アレ——」

「ねえあのオトコのひとずっとここっちみてるです」

「わたしのみりにメロメロなのね！」

「きゃー」

「きゃー♪」

「——妖精さんだ!!」

@@@@

ある日、歴史的に見ても比較的平和な世を謳歌していた世界に唐突にあらわれたナゾの『敵』。

国際会議が名付けたトコロの、『深海棲艦』。

現代兵器が何故か全く通じない『彼女』らに対し、同時に世界各地にあらわれたのは、かつての大戦の記憶をその身に宿した人類の『味方』、艦艇の化身『艦娘』。

『提督』とは、その艦娘の秘めた力を引き出し、唯一指揮・命令するコトができる特別な者達のコトだ。

世界を巻き込む未曾有の危機の中、世界の平和が水際で保たれ、俺が呑気にコンビニバイトなんかには勤しめているのは正に艦娘と、人類の英雄たる提督達のお陰なのだ。

そして、妖精さん。

妖精さんとは、物理法則の全く通用しないフシギテクノロジーで作られた艦娘の艤装・各種装備を制作、修理でき、また艦娘そのものをも建造するコトができるナゾ生物だ。

妖精ではなく妖精さん。

本人(?)達の自称だ。

さんをつけるよでこっぱちやろー。

提督適正者とはズバリ、この妖精さんを目視し、コミュニケーションを取ることが出来る才能を持った者のコトである。

「マジかよ……!」

俺はいてもたってもいられず、土手を転がるように走り降りた。

というか実際転んで草まみれになって川原に滑り落ちた。

口に入った雑草をペツペツと吐き出している俺の元に、ちよつと色白な妖精さん達がわらわらと群がってくる。

「まぬけだ、まぬけがいるです」

「こいつはぎやぐのせんすがある」

「おおもの?」

「あいきようのあるかおだぜ」

好き勝手なコトをキヤーキヤーわめく妖精さん達に、俺は夢中になって問いかけた。

「ペツ、ペツ! ……よ、妖精さん、君ら妖精さんですよね!」

ナゼか敬語だ。

当時の俺は必死だった。

「いかにも」

「たこにも」

「く、くらげにも?」

「え? えーとえーと……ふなむし?」

「妖精さんが見えるってコトは、俺は提督になれるってコトつすよねっ!」

「なれるなれる」

「きみはみどころがある」

「わたしのおむこさんでもいいよ」

「きやー♪」

「俺が……提督に……!」

俺の頭やら背中やらに乗っかってあちこちペタペタとさわり、キヤーキヤーと騒いでいる妖精さんも気にせず俺はポロポロと涙をこぼした。

「よっしやーーーーーっ!!!」

「きゃー♪」

提督。

俺が提督。

たとえどんな不細工であっても、美少女揃いの艦娘達から無条件に好意を寄せられ、アレやソレやナニからナニまでやりたい放題と噂のあの提督!

俺のクソみたいな人生にも、とうとう運が向いてきた。

こみ上げる歓喜に叫び声を上げた俺は、テンションの赴くままに真っ暗になるまで妖精さんと遊び倒し、通り掛かるご近所さんに通報され、顔見知りの駐在さんに将来を心底心配され、バイトに遅刻してチクチクと嫌みを言われた。

翌日、バイトを休んだ俺は、意気も揚々と海軍人事局地方支部に乗り込んだ。

舌噛みそう。

「あつ、あの! 俺つ、よ、妖精さんが見えましてっ! てってて、適性があるかもって……!」

「電話でのご予約はございますか?」

「へっ? あ、いや」

「でしたら、そちらのテーブルで適性検査の申請用紙の太枠の中にご記入頂いてから、こちらの窓口にご提出下さい。なにか写真付きの身分証明書などはお持ちですか?」

「あ、ハイ、め、免許証……」

「そちらも同時にご提出下さい」

「ハイ」

やや薄らハゲたロマンスグレーな窓口係のオッサンに優しく教えられて、書類を提出したあととも三十分程待たされる。

ようやく名前を呼ばれ、海軍っぽい軍帽を被ったオッサンにつれられて小会議室へ。

そこには役人っぽいメガネをかけた軍人さんが一人、椅子に座って待っていた。

軍帽さんが、静かに部屋のすみに立って背筋を伸ばす。

「では、簡単に適性の検査をします。机の上に妖精さんが居るのが見えますか?」

肩に気だるげな妖精さんに乗つけたメガネが、淡々とそう言って机を指差す。

「は、ハイ」

机の上では、白いセーラー服姿の妖精さんがフンスと胸を張っていた。

「では、目で追ってみて下さい」

わたしのうごきがみきれるか、と楽しそうに叫びながら机の上をてちてちと走り回る妖精さん。

……なんか気が抜ける。

「……はい、結構です。ちなみに何を言っていたかはわかりますか?」

「え、えっと、わたしのうごきが——」

「あ、はい、大丈夫です。適性ありですね、確認できました」

「じゃ、じゃあ……!」

「ではお手数ですが、この後提督適正者の登録用紙にご記入頂いて、身分証のコピーを取らせて頂きます」

「えっ? は、はい」

結局、この日は登録だけして家に帰宅した。

「おかえりー」

「ていとくなれたー?」

「ちっ、しけてやがるぜ」

「ぷりんはじょうびしとけとあれほど」

「冷蔵庫あさんのヤメて……いや、なんか提督適正者? とかなんとか、なんか紙だけ書いて帰って来た……また増えてない?」

「はろはろー」

「おじやましてるのよー」

「よっ、このいろいろおとこめー」

「あ、また部屋が狭く……クラーにつけばなしだしよお……」

俺の五畳一間の聖域は、わずか一晩の内に妖精さんのルツボと化し

ていた。

昨晚妖精さんと遊んでいるうちに、後から後からわらわらと新しい妖精さんが集まって、もうワケの分からないコトになっている。

庭とか屋根とか塀の上まで妖精さんだらけだ。

正直足の踏み場もない。

「なあ、妖精さん。俺ってホントに提督になれんの？」

「おうともさ」

「ちみほどのおところはなかなかおらんぞー？」

「べつにならなくてもよくない？」

「あたしがやしなっちゃうぜー♪」

「こらー」

「きゃー♪」

「ええい、暑苦しい！」

身体をよじ登ってくる妖精さんをぞんざいに払って、段ボール机の前に座り込む。

今日の海軍さん達の反応は、どうも自分が期待していたのとは違ったのだ。

もつとこう、英雄あらわる！　　みたいのを期待してたんだけどなあ。

いかにも慣れた様子の事務的な対応を思いだし、首をかしげながら冷蔵庫を開けた。

「あつ！　テメーら麦茶飲み干しやがったな!?　飲んだら新しく作つとけよもー！」

「きゃー♪」

@@@@

「どうでしたか、中尉殿？」

「ああ、ちゃんと見えているようだったがね、彼には妖精さんが一人もくっついていなかったよ。経歴も特筆すべきコトはないし、彼は予備役に入れる必要もないだろう」

私は、本日三人目の審査を終えてコーヒ―を傾けていた。

今日もいつも通り、一応の適性を持った若者の名簿登録をするだけにとどまった。

提督適正者。

妖精さんを見るコトができる特別な才能を持った人間は、実は意外にも多い。

開戦からの数年間、世界中にあらわれた提督適正者の数は、実に五百万人に及ぶ。

五百万人だ。

七十億分の五百万。

1／1,400という数字は、確かに珍しいと言えは珍しいが、稀有と言う程でもなかった。

不思議な事にその過半、実に三百万人は、日本人に適性を発現する。一億二千万分の三百万は、1／40。

クラスに一人は提督適正者、とくれば、適正者ならば掃いて捨てる程いるという上層部のくちさがない意見もむべなるかなと言った所か。

そもそも、世界中の戦局に対応するために必要な提督の数は、数百年に満たない。

当然、世界の平和が掛かっている以上、候補者は最大限吟味する事になる。

提督適性には、格の違いというものがあつた。

この格が高い程、指揮下の艦娘はより提督を信頼し、高い能力を発揮し、より高い錬度へと至る事ができる。

様々な技能や才覚、優れた人格、感性、愛国心が総合的に問われる艦隊指揮官の資質など、いったいどうやって測れば良いのか？

なんとも簡単なコトに、ずばり具体的には、適正者を慕う妖精さんの数でそれが判断できた。

海軍において、提督予備役として中尉を拝命する自分に付き従う妖精さんはおよそ十人。

およそというのは、妖精さんは気まぐれなため、ときどきフラツと

いなくなったり、新しくやって来たりするからだ。

それに対して、一線級の提督適正者が従える妖精さんの数は実に百に届く程だ。

妖精さんは無邪気で人懐っこく、基本命令やお願いをほとんど聞いてくれない。

したがって優れた提督適正者には、たとえ追い払っていても常にその一部の妖精さんが付きまとい続けているはずだった。

提督適正者予備役として、その身柄が各国海軍に保護されている人間の数は、世界中におよそ十万人。

彼らは、適正者の中でも、五人以上の妖精さんに慕われるという選ばれた才能を持つ人々の内、優れた人格と適性を示し、軍学校で無償の専門教育を受け、籍を軍において俸給を受けとることを選んだ者達だ。

その中から本当に選ばれた一握り。

三十人以上の妖精さんに慕われるずば抜けた適正者だけが、実際に艦娘と引き合わされ、より実践的な訓練に励み、能力向上に励む事となる。

そして、従える妖精さんの数が五十人を超えた時、晴れて提督候補として戦線に出る権利を得る。

二十。

それが、現在日本が抱える鎮守府と、『現任提督』の数だ。

提督候補者は、この二十人に選ばれるため、日々研鑽に励む事になる。

提督。

その予備の提督補佐官。

その予備の予備の候補官。

予備の予備の予備の予備候補官。

予備の予備の予備の、そのまた予備の提督予備役。

その予備の予備の予備の予備(ややこしい)になるために必要な、常に身の回りにいる妖精さんの数が、『三人』だった。

先程の彼はゼロ人。

残念ながら、彼は不資格だ。

適正者の内の大半、彼のようなおよそ見込みのない98%の適正者達は、念のためにその情報だけを各地のデータベースに登録されるに留まる。

当初ことさら目立った適性の無かった者も、数年後の検査で優れた資質向上が見込まれる事もあるにはあるが、かなりのレアケースだ。私は冷めきったコーヒーを飲み干すと、自分の過去を少し思い出した。

十五の頃、学校の一斉検査で自分の適性が判明した時、私は自分が英雄になれるのではないかと夢想した。

予備役として軍学校への進学を進められた時にその思いは更に加速し、そして入学した軍学校で『本物の英雄』を目の当たりにして、その夢をポツキリと折られたのだった。

今日検査した彼らも、初めて妖精さんを目にしたときには、かつての自分のように遠く遙かな栄光を思ったのだろうか……。

「ではそろそろ失礼するよ」

「はい。ありがとうございます」

詮の無いことだ。

こんな下らない感傷に浸るのは、きっと先程の彼がかつての自分に似ていたからだろう。

「……しかし不細工だったな。彼も」

@ @ @ @ @

結果だけを言うと、俺が提督になるコトはなかった。

何日たっても音沙汰がないので、嫌な予感をビシバシさせつつ再びナンタラ地方局に行つて聞いてみた所、俺は衝撃の事実を知ることになった。

いわく、提督適正者は世界には掃いて捨てる程いるとの事。

提督になれるのは、その中でも高学歴で金持ちでイケメンな人生の勝ち組野郎だけらしい(多分)。

自分みたいなへっぽごブ男はお呼びじゃないんだそうだ。
実にファックである。

「世界なんか滅びちまえ……」

俺が全身からマガマガしい呪いを周囲に放っていると、勝手に家に
住み着いた妖精さん達がわらわらと群がってくる。

「なんかげんきない？」

「くろいおーらがー」

「このへやてれびないです？」

「聞いてくれ妖精さん。俺、提督にはなれないらしいんだよ……なん
か俺に見える妖精さんの数の百倍くらいは集められないとダメなん
だってさ。あとテレビなんかねえよ」

「ふさいよう……だと!？」

「ごえんがなかったですね」

「おいのりされたですね」

「おちこぼれてやっただぜ」

「てれび……」

「……へこむからそういうのヤメて。だいたい今の百倍とかどんな豪
邸なら入るんだよ金持ちのボンボンどもめ……!」

既に部屋どころかマンシヨンの敷地内にも収まらず、そこらで好き
勝手に遊び回っている妖精さん達を眺める。

数える気も起きないが、ちよつと見ただけでも千人以下と言うこと
はあり得ない。

妖精さん十万人つて……ドームにでも住んでんのか？

提督さーん！ ドームですよ、ドーム！

アホか。

「ごこもてぜまになつたな」

「ごーしょーつくりたいごーしょー」

「けんぞうさせろー」

「まわさせろー」

「まわせー」

「しぎいよごせー」

「……ナニ言ってるんのさキミ達。テレビでも作ってくれんの？ ガラクタとか持ってきたら修理できる？」

背中をよじ登ってくる妖精さんをはたき落としながら、大して期待せずにそう問いかける。

大体コイツら勝手に群がって、人んちの食料と寝床を蹂躪しやがって、そのくせボインでダイナマイトな艦娘一人連れてきてくれんのか。

とんだゴクツブシであった。

家賃払えや。

「ふ……それくらいあさめしまえよ」

「もうあさめしたべたけどな」

「とにかくぼーきをよこせ、はなしはそれからだ」

「せきゆとこうざいとだんやくもよこすのだ」

「あとてれびはさいしんのごじゅういんちをひろってこい」

「たじゅうよやくでできるやつだぞ」

「ふあいあていーびーもつけろ」

「いいか？ 普通のフリーターの家に弾薬だの鋼材だのはねーの。大体ぼーきってなんだよ、ウチにあんのは酸化した去年の灯油くらいだよ。あとそのテレビっ子ども、そんな高級品ほいほい落ちててたまるか！ アマゾンだつて一般会員だよコノヤロー！」

………やっぱりに役にたたねえ。

「やくにたたねーおとこだぜ」

「でもすきな」

「きやーっ♪」

「そしたらちんじゅふつくろーちんじゅふ」

「それあるー♪」

「あるー♪」

「それやめてイラつとくる。……なんて？」

妖精さん——初めて川辺で会った妖精さんズの一人、肌が青く白くて、ツインテリボンが特徴的な子の言った言葉に、思わず聞き返す。

「だからあー……あなたがすきなノ／＼」

「きゃー、だいたーん♪」

「いやお前でなくて」

くねくねしながら照れるポニテ妖精さんを脇にどかす。

ええい、股の間に入ってくるな鬱陶しい！

「ていとくになれないならなつちまえばいーです」

「ほんとはよこすかとかくれがよかったけどしかたねーです」

「ないならつくつちやおー」

「あすからきみもじしようていとく」

「じぶんのことをていとくだとおもってるいっぱんひきにーと」

「かっごどうてい」

「お前とお前はメシ抜きだからな覚えとけよ……ナニナニ何だつて？

ちんじゆふ？ 鎮守府つてこと？ え、鎮守府つて作れんの!？」

なんだかスゴい事を聞いた気がする。

提督なれちやう？

ハーレム自作できちやう感じ!？」

にわかになぎってきた。

「おうぼうだー!」

「ようせいさんさべつはんたーい!」

「こっぺっぱんをようきゆうする!」

「ぷりんもようきゆうする!」

うるさい妖精さんの頭を掴んで窓の外に放り投げる。

きゃーっ♪ と楽しげな声が庭の方へ消えていった。

なぜか無駄にセルフドゥプラー付きで。

「できるともさ」

「そう、ようせいさんならね」

「マジっすか!?! 作ろう! すぐ作ろう! 早速作ろう!! いや、

作って下さいお願いしますっ!!」

二頭身のフシギ生物に土下座する情けない27オフリーターがそこ
こにいた。

うるせえ、プライドで乳が揉めるか!

「こんなこともあるのかと」

「すでにこうほちはしぼつてあるのさ」

「ふっふっふー、ようせいさんにまかせなさいい♪」

「ははーっ!!」

着任、勿忘鎮守府！

「なにが、まかせなさいい♪ ……だバカタレ！」

曇天の波間に頼りなく揺れる小舟の中で、俺は人生史上最大に軽率だった過去の自分にドロップキックでもかましたい気分だった。

出来ないけど。

あの後、バイト先に律儀に退職の旨を伝えた俺は、シフト調整のために最後の二週間みっちり働き、通販で買った登山用リュックにキャンプ用品や非常食を思い付くまま詰め込んで、日も登る前からチャリンコで二時間もかけて町外れの浜辺まで向かった。

そしてそこから、ツインテリボンの妖精さんが何処からか持ってきた木造の小舟でもって、無謀にも大海原に漕ぎ出したのがおおよそ丸1日前だ。

最初は抜けるような晴天のピーカン日和だったのが、あれよあれよと風向きが変わって、気付けば今にも落ちてきそうな真っ黒い雲で空が覆われている。

昼も夜も無いような真っ暗闇の中、どこへ向かって流されているとも知れずに一晩を明かし、完全に方向を見失った。

おまけに一寸先も見通せない濃い霧まで出てくる始末。

波一つない凧の大海原で独りぼっち……いや、二人ぼっちだ。

まるで俺の人生のようだぜ……チクショウ。

「大体おかしいと思ったんだよ……！」

船尾で呑気に鼻提灯を膨らます青白いグレムリンさんを睨む。

あれだけ沢山いた妖精のうち、ついて来たのは言い出しっぺのコイツだけ。

残りは鎮守府ができたらまとめて引っ越して来るらしく、全員アパートでお留守番だ。

お陰で家賃を向こう半年まとめて払うハメになった。

今思えば、きつとアイツらは俺の家を乗っ取るために邪魔な俺を始

末しようとして海原に放り込んだのだ。

出発時、横断幕や紙吹雪まで作って、千匹以上の妖精さん全員で盛大に送り出してくれたのもなんかわざとらしくった気がする。

今日日門出に火打ち石なんて鳴らすかよ。

あとあの黄色いハンカチとかサイリウムはなんだ色々混ぜてんぞ。

調子のもって海軍式の敬礼までしちまった自分を殴りたい。

バカか俺？

……あ、バカだったわ。

クソが。

「……こうなったら何としてでも生還してやる……泳いででも帰って、あの性悪妖精どもに目にモノ見せてやるからな……！」

俺が復讐に燃え、かのジャチボウギャクなるチビ助どもにいかように残虐な仕返し（カラシプリンをお見舞いするとか）をするか考えていると、視界の隅っこで、ツインテさんがパチリと目を開け、ムクリと起き上がるのが目に入った。

「あ、コイツ、コラ、こんの性悪ツインテ、さっさと俺を家に返しやがって下さいよコノヤロー！」

眠そうに口許のヨダレをぬぐう妖精さんに、微妙に下手に出た要求をする俺。

だ、だってちよつと怖いじゃん……ホラ、こんな海のと真ん中で二人つきりな訳だしさ、お家までは仲良しなフリした方が良くない？

「ふわー……まあまああわてなさんなていとくさん。そろそろらしんばんのじかんですぜ」

「はあ？ いや、方位磁針ならずいぶん前に壊れちゃったじゃん……」

あぐらの上に飛び込んで来て、胸元から見上げてくる妖精さんにため息を吐きつつ、ポケットから百均のコンパスを取り出す。

手の中の方位磁針は、まるで池に浮かぶ笹舟のようにフラフラと回っていてまるで役に立たない。

家で荷造りした時には問題なかったのに、この舟で海に出て、妖精さんに言われて最初に取り出した時にはもうこんな有り様だった。

これだから安物は……いや、航海用の二千円位のヤツ買うのをケチったのは俺だけどき……。

ナニが面白いのか、妖精さんは俺の手の中のコンパスを覗きこんでは、顔を上げてキョロキョロと霧の中を見渡す……といった行動を繰り返す。

「このへんだな」

「いや、ヘンなのはお前だよ」

「はりをまわせー」

「……はあ?」

ようやく、ツインテが羅針盤の針を回すようせがんでいると気付いた俺は、ウロンな目でシャカシャカとコンパスを振ってみせた。

お望み通りくるくると回りだす針を見て、妖精さんはタイヘンご満悦である。

俺は憂鬱だよ。

なにやっつてんだらう俺?

「らしんばん、まわれー♪」

「………なあ、そろそろ俺帰りたいんだけど、お前どっち行ったらいいか分からない?」

「……っ!」

ぴしっ! とコンパスを指差す妖精さん。

その瞬間、くるくるとアホらしく回っていた針がピタツと止まった。

「………えー、ナニその一発芸……」

妖精さんは時々ヘンなコトをする。

ドアの蝶番ちようつがいを直したり、勝手に壁紙を張り替えたり、どっからかラジオやトースターを持ってきたり、自転車にバケツの水を引っかけてり……。

いつの間にか増設された地下室や、折れたスポークがナゼかキレイに直っている自転車を見て、俺は深く考えるのを止めた。

なんか時々フワフワ浮いてたりするし、妖精さんはそういうもんなんだらう。

あとどうせ直すならスーパーカブ直せや。

なににせよ、羅針盤の針を止めるといふ超絶パワーに一体どれ程の意味があるというのか、お兄さんには見当もつきません帰りたい。

「あっち」

そんな俺の気持ちがこの色白ツインテにも伝わったのだろうか。

俺の膝の上から飛び降りた妖精さんは、舟の舳先に立って右前方辺りをドヤ顔で真っ直ぐに指差した。

コンパスの針と同じ方向だ。

「……？ そっちに行ったら良いのか？」

こくこくと二頭身の頭を振るフシギ生物。

どうやらやつとイタズラを止めて、俺を家に帰してくれる気になったようだ。

いや、方向が分かった所で、權もないのにどうやって進んだらいいのさ。

「かいりゆうにのれー、まにあわなくなってもしらんぞー」

「分かった分かった」

急かされるままに、舟のへりから恐々身を乗り出して、凧いだ黒い海面をぱちやぱちやと掻く。

小さな小舟はゆらゆらと波紋を立てながらゆっくりと回頭し、羅針盤の指し示す方向へ舳先を向けた。

「いけー」

「おおっ!? なんだあ!?!」

その瞬間、鏡のようだった海面にさざ波が立ち、俺達の乗った小舟をゆっくりと押し流し始めた。

コレも妖精さんパワーなのか？

スゲエ。

「おお、おおお……おお……こ、こつちで良いんだな？」

「しんぱいはいらねーぜ、わたしにまかせなさいい♪」

「その台詞すつこい不安なんだけど……」

任せた結果こんなコトになってるんじゃないか。

そんなコトを考えている内に、波は高さを増し、小舟は更に勢い良

く流されて行く。

真つ暗な霧の中、ゴロゴロという雷鳴を聞きながら疾走する木造舟。

控えめに言つてめちやくちや怖い。

舟の両舷にしがみついて、身体中に生ぬるい水しぶを浴びながら、「よーそろーっ♪」と楽しそうな妖精さんに叫ぶ。

「速あぁーっ！っ！！ スピード！ スピード落として！ マジで後生だからお願いしますうーっ！！」

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

そうやって、どれだけの時間が経っただろうか。

最高にグロッキーな俺が、塩辛い水しぶきを上げる舟の上で一睡もできずに何時間も揺られ、何周目かのうろ覚え般若心経を唱え終わつた頃、鬼畜ツインテが嬉しそうな声を上げた。

「おー、みえてきたぜ」

「うおえええ………くうーそくうぜえーしきい……え、ナニ？

着いたの？ 浄土着いちやった？」

俺が現世での行いを悔いながらゆっくりとずぶ濡れの頭を上げると、いくらか薄くなった霧の中に、ボンヤリと緑色の陸地のようなモノが浮かび上がってくるのが見えた。

「あ……ああつ！ 陸、陸だつ！ 良かった……！ 帰ってこれたんだ………！！」

俺は歓喜の涙を流した。

今なら何だつて許せる気分だ。

帰ったら妖精さん達全員にハグしてやってもいい。

感極まってツインテを抱き上げて頬擦りすると、きゃーきゃーと嬉しそうにはしゃいで頭をグリグリと押し付けて来た。

そのまましばらくして、フシギ海流に流される小舟はどんどん島影

に近づいて行き、次第に白い砂浜が視界に広がってくる。
波音の中に、寄せては返す浜辺の潮騒が混じる。

「せつげんするよー」

俺の股の間にすっぽり座り込んだ妖精さんがそう言った瞬間、軽い衝撃と共に、ザザザツ、と船底が浜辺の砂に乗り上げた。

俺が思わずつんのめると、コロコロと転がった妖精さんが舳先から、ぽーんっ、と投げ出されて、ぱちやつ、と波打ち際に着地した。びしっ、と両手を上げて静止する。

顔は見えないが多分ドヤ顔だ。

お前はいつつも楽しそうだな……。

「とうちやーく」

「ありがとう……ありがとう……帰ってこれた……!」

俺は地に足がついている感動にむせび泣きながら、妖精さんの先導に従って小舟を浜に引き上げた。

なんか海に出たのもコイツのせいだった気がするが、もうそんなのどうでもイイや。

コレからは艦娘ハーレムのコトなんか忘れて、身の丈に合った生活をしよう……!」

俺は自分の軽率な行いを恥しながら、小舟からリュックサックを持ち上げてキョロキョロと堤防を探した。

「……………あれ?」

しかし、見回せども、見渡せども、どこにも堤防が見当たらない。霧に覆われているせいで良くは見えないが、周囲には流木や海草の打ち上げられた砂浜と、見慣れない熱帯雨林のような景色が広がるばかりだ。

暗い林の奥から、ケーーツ! ケーーツ! つという、けたたましい鳥の鳴き声が聞こえる。

……………。

「……………、どうだ?」

ひよっとして……………ここ、自分の出発した浜辺じゃないカンジっすか

？ と、考えたくもない予想がむくむくと頭をもたげる。

と、足元でびしょびしょのズボンの裾が引つ張られるのを感じた。下に目をやると、ツインテ妖精さんが俺のズボンをクイクイと引いて俺を見上げている。

「こっちこっち」

そう言つて、トテトテと浜辺を走つて行く妖精さん。

……突っ立っていても仕方がないな。

なんだかそこはかたなく不安を覚えながら、自信満々の妖精さんに着いて行く。

「……………ちよつとマジで勘弁してくれよ……………帰つてこれたと思つたら無人島でしたとか、そういうのマジでやめてくれよ……………頼むぞ……………おお？」

妖精さんと一緒に、まっさらな砂浜に足跡を刻みつけ続けることしばし。

岬状になった浜を曲がると、不意に開けた視界に、待ちわびた文明の色が映る。

「あそこだー」

「お……………おお……………や、やった……………！」

灰色。

コンクリートの灰色。

懐かしきかな、文明の灰色！

砂浜が岩場に変わり、緩やかに上つて行く低い崖の上。

湾になった海岸を見下ろすように、コンクリートの建物がそびえ立っているのが見える。

「よかった……………！ 取り敢えず無人島じゃなくて良かった……………！」

最悪の予想が外れて、安心と喜びに膝を突きそうになったところで、向こう脛に軽い衝撃が走る。

「ぼさつとしない。さっさとちやくにんしろー」

「わわ、分かった分かったって……………ちよつとくらい浸らせてよ……………」

テンションの高い妖精さんに体当たりされながら、あわてて脚を前

に出す。

早くあの建物まで行って保護してもらわないと。

とにかく今は人間に会いたい。

二頭身じゃない生き物と言葉を交わしたい。

こんなに人恋しいのは初めてだぜ。

今ならコミュ障だって克服できそうだ。

そんな事を考えながら、ほとんど気合いだけで鬱蒼としげる密林に突っ込み、名前もよく分からん草木を掻き分けながらぬかるんだ斜面をえつちらおつちら上って行く。

……しかし無茶苦茶あつついなあ今日は……こんなに曇ってるのに……。

「まーまえーんぱーぱわーれーでーんべー♪」

「ヒュー……ハアアア……お前……ハア……自分で……ゼエ……歩けよ……」

妖精さんのクセにヒワイな歌歌いやがって……しかも米軍のдаро
それ……。

無駄にご機嫌なツインテを肩車したまま、実に三十分位かけて小高い傾斜を登りきる。

湿気と熱気で汗が吹き出て、全身ベトベトだ。

「カヒュー………つ、着いた……登りきった……!」

暗い林の木々の間に、曇り空から薄く光が射す。

べきべきと固い生木をへし折って、やつとの思いで密林から首を出した。

「これで……助かつ………たす………」

ゴロゴロゴロ……と、雷鳴が空気を読んだ音を響かせる。

崖の上にそびえ立っていたのは、鉄筋コンクリート製の巨大な建物

の形をした、廃墟だった。

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

「……………そんな気はしてたよ……………チクシヨウめ……………」

明らかに大昔に打ち捨てられたような巨大な廃墟を見上げて、今度こそ俺は膝を突いてしまった。

なんだよコレ……………まるつきり奇界遺産じゃん……………クソゲーかよ……………。

必死の思いでたどり着いた建物は、それはもうひどい有り様だった。

外壁は全て剥がれ落ち、窓ガラスは一欠片も残っておらず、レンガが一枚残らず滑り落ちた屋根は半分ほど崩れて傾いている。

壁の一部も倒壊して、潮風で腐って抜けたのであろう板張りの天井が覗く。

何処へ出しても恥ずかしくない廃墟だ。

「こいつぁーひでえや。たるんでやがるぜ」

「うるせえやい……………ん、妖精さん、どこ見て……………!?!」

先程から一転して、どこか不機嫌そうな妖精さんの呟きに力なく顔を向けると、色白妖精さんは俺ではなく廃墟の方を見て険しい目をしている。

一丁前にため息とか吐いてやがる。

怪訝に思い、妖精さんの視線を辿ると――

「――ありゃ、妖精さんか?」

なんと。

倒壊したコンクリの上に寝そべった、怪しい二頭身が目に入った。

ボロボロのセーラー服を胸元（多分あそこは胸だろ、きつと）まではだけさせ、ボリボリとお腹を搔きながら大あくびをしている。

……………凄まじいだらけっぶりだ。

ふと、ボロセーラーが、パチツ、と目を開ける。

ふわああああ……………という音が聞こえそうな伸びをして――

「……………あ、目が合った」

自分をじつと見つめる色男（当社比）に気付いたようだ。
眠そうだった目が、みるみる内に真ん丸になって行く。

「かけあーしー！」

不意に、隣のツインテが大声で叫んだ。

その瞬間、ぴょんっ、と数十センチ跳び上がった妖精さんが、慌てた様子でちてちと駆け寄ってくる。

そして、地面に膝を突いたまま呆然としていた俺の前に辿り着くと、砂や泥で汚れきった全身に生気をみなぎらせて、ピシッ！ っと敬礼をする。

「え……ナニ？ どういう……」

俺がそのキラキラした瞳に戸惑っていると、隣で偉そうにふんぞり返っていたツインテが短い腕で、びしっ、と返礼して言った。

「ひとはちさんはち！ てーとくがわすれなちんじゅふにちやくにんしました！」

はあ？

小さな一歩

ちんじゆふ？

ちやくにん？

それってもしかしてこの歴史遺産的建造物のコトか？

突然の事に俺が目を白黒させていると、目の前で見事な敬礼をしていたボロセーラーの妖精さんがプルプルと震えだした。

ん？　と思いい見下ろしてみると、目尻に涙の粒を浮かべたそいつが勢い良く飛び付いて来た。

「ていとくだー！！」

「ぐえっ!？」

妖精さんの軽い頭が、鋭い角度で鳩尾みぞおちに突き刺さる。

「やつとききたー!」

「ぐえ……や、ヤメテ……!　お腹グリグリすんのヤメテ!」

小さな悪魔による卑怯な不意討ちによって、込み上げてきた酸っぱいモノを必死に抑える俺の目に、更に信じられないモノが映る。

「なんだー?」

「またにくきうみねこのしゅうげきかー?」

「ていとくがきたらしい」

「な、なんだってー」

「あれ?」

「あれあれ」

一体あの廃墟のどこに隠れていたのか。

崩れた外壁の陰や、ぽっかり空いた窓、天井の穴やら草場の陰なんかから、何匹もの妖精さんが顔を出したのだ。

一……二……三……その数、六匹。

誰も彼も、皆一様に不健康な顔色とボサボサの髪をして、ほつれや破れの目立つ衣服を身に纏っている。

そんな浮浪者じみたちんまい妖精さん達は、俺の鳩尾で「ていと

くーうおー！」と、ゴリゴリと頭を擦り付けているボロセーラーに気付くと、わーっ！ と俺に向かって殺到した。

「うおー！ しんせんないとくだー！」

「つかまえろー」

「かこめー」

「はぐさせろー」

「はぐしろー」

「ちゅーしろー」

「うわっ!? な、なんだお前らっ!!? どっから湧いて出やがった!? わぷっ」

戸惑う俺に対してなんの斟酌しんしゃくもなく、薄汚れた妖精さんが次々と飛び付いてくる。

顔面に張り付いてちゅっちゅとキスの雨を降らす妖精さんをひっぺがし、なんとか状況を把握しようと思戦苦闘していると、隣で事態を静観していたツインテさんが三度みたたび大声を出した。

「ていとくのちやくにんであーる！ みなのものーひかよろー！」

すると、俺のTシャツに熱心に汚れを擦り付けていた妖精さん達がバツと飛び退き、ごちゃごちゃと走り回りながら、びしっ、と一列に整列した。

それをポケットと見ていると、いつの間にか俺の身体をよじ登っていたツインテが、耳元でこしょこしょと囁く。

「けいれいけいれい」

「あー……はいはい」

言われるままに、力なく手を挙げて顔の横へ。

すると、一列に並んだ妖精さん達が、ばあーっ、と顔を輝かせ、一斉に、ピシッ、と見事な敬礼を返してきた。

(うわあ、無邪気な笑顔だなあ……)

いい加減何がナンだか分からなくて、半ばなげやりにそんな事を思っている、突然妖精さん達が物理的に輝きだした。

「こっ、今度はなんだあ!?!」

文字通り身体中がキラキラと輝き出した妖精さん達は、次の瞬間、

パーツ、と光の粒を撒き散らした。

眩しさに思わず顔を背ける。

耳元に張り付いたツインテさんが、楽しげな声色で、ちやくちやくちやく♪ とデジタルなモンスターが進化でもしそうなBGMを奏でる。

光が収まったのをまぶたの裏で感じ、恐る恐る目を開いた。

「……………おお……………」

そこには、先程と寸分たがわず敬礼したまま、真新しいピカピカのセーラー服を身にまとった妖精さん達が並んでいた。

泥や砂で汚れていた身体は見違えるようにキレイになり、髪も艶やかに整っている。

そして、キラキラと輝く瞳で真っ直ぐに俺を見つめてくるのだ。

「くせつななじゅうねん」

「とうとうここにもていとくさんが」

「おお、これがていとくりよく……………」

「すげえかつこいいです」

「きつとえすえすれあだ、わたしはくわしいんだ」

「みなぎってきたぜ」

……………さつきより眩しい。

「……………もうなんかお前らの理不尽にも馴れてきたな……………なあツインテ。お前の言ってた鎮守府ってのは、この事だったのか？」

「そうだよ？」

いや、そんな、何でそんな事聞くの？ みたいな顔で見るなよ…………

見ろよ、壁とか屋根とか半分無いんだぞ？

まず雨風がしのげないんだぞ？

縄文人の家にだって屋根くらいはあったと思うよ？

「ていとくさんあんないするよー」

「ていとくさんついてきてー」

「ていとくさんはやくはやく」

俺が捨てられた犬のような目で見ていることに気づかないのか、鬼畜ツインテは俺の頭の上に腹這いになると、すすめー、とほつぺたを

てしてしと叩いて急かしてくる。

……どうやら俺に選択権は無いらしい。

提督なのに。

いや提督じゃないけど。

フリーターだけだ。

俺は肉体的にも精神的にもひどい疲労感を感じながら、ズルズルと足を引きずるように妖精さん達の後ろを付いて行った。

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

「ここがしよくどうです」

「へえ、スゲエな。砂場かと思った」

建物の一階部分は、ほとんど床板が残っていないなかった。

剥き出しの地面に吹き溜まった砂を蹴り飛ばしながら、デカイ机の残骸を掻き分けて進む。

「こっちはかいぎしつ」

「埒りそうもねえな」

「あつちがつうしんしつ」

「あの錆びた壁ナニ？」

「あれがものおき」

「モノなんかねーぞ」

「あそこがどつくのいりぐちです」

「バカには見えないカンジかな？」

……なんかどんどん悲しくなってきた。

会議室は剥がれた黒板が土に埋もれ、天板が腐って無くなった机の骨組みが錆びだらけで転がり、通信室の壁際にはガラクタ同然の赤茶けた無線機器がそびえ立ち、物置はモノの見事に空っぽでドックへの下り階段は落盤で埋まっていた。

人が住む住めないってレベルじゃねーぞ！

「ていとくさん、つぎはにかいです」

「……まあキミもめげないねしかし」

穴だらけの階段を恐る恐る登って行つて、二階部分の各部屋を覗いてみる。

作戦室、仮眠室、資料室、小会議室……どこを見ても空っぽだ。朽ち果てた本棚や椅子の残骸があるか無いか位の差しかない。

他にもいくつかの空っぽの部屋を回つて、とうとう廊下の奥の部屋に突き当たつた。

「ここがさかいごです」

「へえ……ここは扉があるんだな」

目の前には、重厚な木製の扉がどつしりと構えていた。

ニスも塗料も剥がれ、床の近くは腐つて変色までしているが、これまで見てきた何処とも違いキレイに磨き上げられ、しっかりと手入れが行き届いているのがよく分かる。

ホコリ一つついておらず、表面はうっすらツヤツヤしている。

見上げると、扉の上のプレートには、たどたどしい平仮名で『しれえしつ』と書いてあった。

「ここが……」

「ていとくさんのおへやです」

そう言われて、もう一度扉に目をやる。

内心のドキドキを押し殺しながら、両扉にそつと手を添えた。

……なんか緊張するな。

学生時代、校長室に入る前のあの感覚に近い。

……いや、緊張してどうする？

今は俺がその校長なワケじゃないか。

意を決して、グツと両腕に力を込める。

油もすっかりと注してあったのだろう。

複数回の補修の跡が見える蝶番ちやうつがいが、キィー……と僅かな音を立て

て、重い扉が観音開きに開く。

「おお……」

それは、幻想的な光景だった。

絨毯こそ見る陰もなく朽ち果てているが、床の穴には補修の跡が見られ、塵一つなく掃き清められている。

剥がれた壁の一面と天井は継ぎ接ぎだらけの板で塞がれて、この部屋だけは守ろうとした意志が見られた。

そして、部屋の奥。

そこには、扉と同じ堂々とした佇まいの、隅々まで磨きあげられた黒檀の机が鈍い光を放っていた。

「このひのためにじゅんびしたです」

どこか蔽かな気持ちを感じながら、ゆっくりと机に近づく。

ギイ……ギイ……と、床板が主人の帰還を喜ぶように静かな音を鳴らす。

机の前にたどり着き、一瞬ためらって、そっ……と天板に手を置く。

「……………スゲエな」

ひんやりとした手触りだ。

覗き込めば顔が写り込む程にツルツルしている。

机の向こうを見れば、背後の壁には額に入った『がしんしょーたん』の文字。

その下には、机と同じ黒檀の大きな椅子が鎮座している。

「ていとくさん、すわってー！」

「そこがていとくさんのせきですー！」

急かされるままに、机を回り込んで椅子の前へ。

高級そうな皮張りの背もたれには、破れを補修したのだろう、イルカや錨いかりの形のカラフルなパッチワークが縫い付けられていた。

振り返って、部屋を見渡す。

いつの間にか集まっていたようで、この廃墟に巣食っていた妖精さん達七匹が、横一列に並んでいた。

不意に、部屋に光が射す。

壁と天井の板の隙間から、日の光が漏れ出している。

あれだけ厚く空を覆い尽くしていた雨雲は、どこかへ吹き飛ばされてしまったようだ。

部屋中に黄昏の金色が満ちる。

夢のような景色の中、妖精さん達が、一斉に敬礼をして俺を見上げる。

頭の上で、ここまで俺を導いてくれたツインテさんもまた敬礼しているのを感じる。

「ここが……俺の鎮守府か……俺が提督……提督になるんだな……」

……思えば、下心だけでここまで来たんだっただなあ。

可愛い艦娘に囲まれ、イチヤイチャラブラブおっぱいハーレムを作るためだけに提督に成りたいと思っていた。

しかし、期待と信頼に満ちた妖精さん達の眼差しを前にして、俺の中のそんな邪な気持ちがみるみる内に溶けて無くなって行くのを感じる。

(そうか……提督達はみんな、こんな気持ちで戦っていたんだな……)

澄み渡った心の中から、提督になる、平和の為に戦うという熱い想いが混み上がってきた。

ボロボロで、みすぼらしい司令室。

目の前に艦娘の姿はなく、小さな妖精さんがいるばかり。

今の俺には、十分すぎる。

ここからだ。

ここから始まるんだ。

俺はキリツとした顔を作り、背筋を伸ばした。

そして、うろ覚えながら、妖精さん達の真似をして、気合いの入った敬礼を試みさせた。

妖精さん達の目が、一層キラキラと輝いているのを感じる。

「妖精さん達……ツインテさん、俺、頑張るよ！　頑張って立派な提督になる!!」

気づけば、そんな言葉が口を衝いていた。

「だから……えっと、俺、何にも知らないし、頼りないと思うけど……どうか宜しく頼むぞ！　妖精さん達！」

らしくない事を言っているのは分かる。

でも、こんな温かい気持ちになったのは初めてなんだ……今だけは

許されるハズだ。

俺は火照った顔を誤魔化すように、ゆっくりと腰を下ろす。

暗褐色の天板に手をつき、お尻を立派な椅子の、座面の上に乗せる。

「ふう……………何か不思議な気分だな……………なんか今なら何でもできちやいそうな気ぶ——」

そして、いざ俺の司令官席に体重を預けようとしたその時——

バキッ

「んえっ？」

ドターンツツツ!!

椅子の底が、抜けた。

「イっつっつっつ?!」

ガイ——————ンツ……………!!!

そして落ちてくる金だらい(特大)

「アゝいッツツ!!」

目の前に飛び散る星。

いつの間にか机の上に避難しているツインテ。

ぐわんぐわんぐわんわんわんわん……………と、金だらいが床でくるくる回り、やがて、くわああ……………ん……………、と間抜けな音と共に静かに止まった。

……………その瞬間、

「いえ————い♪」

「みごとです！ さすがいちりゆうのていとくさんです！」

「どつきりだいせいこうなのです」

「ななじゅうねんごしのいたずら……………かんむりよう」

「それでこそていとくさん」

「かつこいい……………ほっ」

「いっしょうついでいくです」

「さすがだぜ……れきせんようせいさんはかくがちがうな」

大歓声と共に、椅子の残骸の中で呆気に取られる俺に群がって、きやーきやーと会心のハイタッチを交わす妖精さんズ。

そしてしれっと混ざるツインテ。

ホクホク顔で身体を寄せ合い、今日一番の笑顔を見せている。

「……………」

俺は、立派な提督になる！

ドンツ（迫真のSE）

「……………」

「おいテメーら、一列に並べ」

黄昏の空を、八匹の妖精さんが高らかに舞った。

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

後の歴史書にはこう語られる。

『最も偉大な提督』『最後の英雄』『楽園の主』『舟達の父』ディアマイラヴァー

『ビッグ・オールド・ブル深海に捧ぐ鎮魂歌』『神童貞』『おっぱいマイスター』『ぺったんキラ』

e t c …… e t c ……

そういった数々の異名を持つ、一人の日本人。

世界の危機に颯爽と現れ、その大いなる正義と類い稀なる能力によって、人類史上唯一の『世界平和』を成し遂げた男。

その男の偉大なる一步が、こうして下らなくも温かな喧騒の中でひっそりと始まった事を知るモノは、少ない。

そんな彼だが、実はもう一つ、彼の事を端的に示すあだ名がある事をご存じだろうか？

数多の海軍関係者が、彼をこう呼んだらしい。

曰く。

『世界で一番、妖精さんに愛された男』

一から始める鎮守府運営

俺の渾身のお仕置きも、妖精さん達にしてみれば新しい遊びかナニかではないらしい。

ウキウキした面持ちで俺の前に行儀良く列を作る妖精さん達を、順番に窓から外に投げ捨てる事三周。

茜色だった空は紺色になり、灯りのない部屋はすっかり暗くなっている。

色々な疲れからぐったりと床にへたりこんだ俺を、妖精さんが不思議そうに引つ張り回す。

「ていとくさんどしたの?」

「ねぐれくとはいかなぞ」

「あそべー」

「……………もういい。もう疲れたの俺は。頼むから休ませて…………お布団持ってきて…………」

「おふとんですね」

「まっかせろー」

リュックから引つ張り出したペットボトルの水をグビグビと飲み干しながら、元気良く飛び出して行った妖精さん達を力なく見送る。

今日はもう色々ありすぎて疲れた。

ここが何処かも分からないし、こんな廃墟で艦娘どころか人っ子一人いないなんぞ、提督も何もあつたもんじゃないだろ。

……………諸々状況確認とか……………うん、もう明日でいいや……………。

俺、明日から頑張る……………。

このテレビもネットもアップル社もある現代で、何が悲しくて遭難なんぞせねばならんのか。

俺はバリバリのインドア派だぞ。

難易度高過ぎんだよ。

平成生まれ舐めんな。

俺がうつむいたまま不毛にクサしていると、先程外に出ていった妖精さん達が何かを抱えて戻ってきた。

「ようせいさんがちんじゅふにきかんしました！」

「おふとんです」

「べつどをつくれー」

「ほきゆうをよこせー♪」

「なんだその葉っぱは……」

いよいよ真っ暗になりつつある中で目を凝らして見れば、妖精さんが持つてきたのは勿論お布団などという高級品ではなく、青々とした大きな葉っぱの束であった。

なんかこう、バナナの葉っぱみたいなのヤツだ。

電池式のランタンを引つ張り出して点けてみると、妖精さん達はテキパキと葉っぱを重ねて並べ、あつという間に寢床のようなものをこしらえてしまった。

「……………こんな見たことあるわ。なんか世界の果てまでの的なんで……」

ここは世界の果てかよ。

ぺちゃんこの布団が懐かしいぜ……。

切ない気持ちになりながら、緑色のベッドの上に膝をついてみる。

……………まったく想像を超えてこないな。

そりゃ、床そのままよりは柔らかいし温かいのかも知らんが、所詮葉っぱは葉っぱ。

手をつけば手のひらには床の固さがモロに伝わってくるし、ガサガサするし、おまけに青臭い。

「……………これが今の俺の格か」

もぐりのフリーター提督は壁も天井も穴だらけの部屋で先住民ベッドwith二頭身のナマモノ。

財閥生まれで士官学校首席卒のイケメンエリート三高提督は、今頃天蓋つきのクソデカイベッドで団扇で扇がれながら、スーパァ可愛い艦娘とおっぱいテイスティングでもしているんだきつと。

「くっそー……………今に見てるよ……………」

俺だっていつかはおっぱいの大きい艦娘に囲まれてアレしてアレでアレだかな……！

汚れて泥だらけの運動靴を脱ぎ、葉っぱのベッドに横になって天井を見上げる。

板張りの隙間から、見た事もないような満天の星空が見えた。

……驚いた。

今にも落ちてきそうな星空、と言うのは、こういうのを言うんだらうか？

こんな空、プラネタリウムでしか見たこと無かったな……。

「……………この景色だけは勝ったな。雨、降らんでよかったわ……………」
って言うかマジでどこなんだここ。

壁の隙間から磯臭い潮風が部屋に吹き込んで、髪を揺らす。

妖精さんが、仰向けの俺の上に特別大きな葉っぱを何枚か置いてゆく。

掛け布団のつもりなのだろう。

……なんかこんな料理なかった？

ありがとな、と妖精さんの頭に手のひらを乗っけながら、ふと、この妖精さん達は今までどこでどうやって暮らしていたんだろう？
という疑問が頭によぎった。

「……………ふあ……………まあ、それも明日聞きやあいいか……………」

一度横になると、全身にヒドい倦怠感と、強烈な眠気が襲ってきた。
それに逆らわず、瞼を閉じて大きく息を吐き出す。

薄れてゆく意識の中で、妖精さん達が楽しそうに何事かを囁くのを聞いた気がした。

「な」

「」

「……ごは、」

改めて聞いてみると、何でも近くに飲み水用の井戸があるんだそう
だ。

さっさと見えよグレムリンどもめ。

俺は寝起きの重い身体を引きずるように動かしながら廃墟を出ると、妖精さん達の先導に従って、井戸を目指して林沿いに歩き始めた。崖の上から海を仰ぐと、朝日を反射して波がキラキラと輝いている。

昨日は薄暗く、霧が出ていた事もあつて気づかなかつたが、この丘の上には昨日一夜を明かした建物とは別に、幾つかの建造物が立ち並んでいるようだった。

朝露でキラキラした密林を横目に丘を下ってゆくと、本棟と連なるように、一つ、二つと、半壊した煉瓦の建物が並んでいた。

こちらは海側の壁が盛大に崩れ小高い山のようになっていて、屋根は完全に吹き飛ばされて雨ざらしになっている。

「ひでえモンだなまったく」

これ、俺の鎮守府なんだぜ？

草も生えな……あ、いっぱい生えてたわ、ウける。

井戸は忌々しい事に、元々あつた道を覆い隠すように生い茂る林の中の方にあるらしい。

煉瓦の廃墟の向かい側の林に踏み入る前に、丘を下った先の方も見渡しておく。

坂道を下りきった先には、多分、元々はグラウンドのような広場だったのであろう、錆びて倒れたフェンスの残骸に囲まれて、石や折れた木なんかが転がる、雑草伸び放題の空き地が見えた。

そして、海岸。

それを見て、やつとここが昔、港だったという事を確信できた。

俺が漂着した海岸と違い、船着き場のようなモノが造られている。所々崩れ、傾いて波を被っていたりするが……間違いない、コンクリート製の埠頭だ。

端っこの崩れた円筒みたいなのは、きつと灯台だったんだろう、多分。

少し高くなっている所には、崩れたカマボコ型の鉄骨組が見える。あれは倉庫と見た。

刑事ドラマで見たことあるもん。

港であの形なら倉庫だろ。

骨しかないけど。

そして港の正面には、同じくカマボコ型の屋根を3つくっ付けたような四角い建物。

屋根は何カ所も四角く剥がれ、外壁のトタンは塗装も剥げて錆びきり、折れ曲がって半分以上が剥がれている。

それでもこの廃墟だけは、ギリギリ建物の体裁を保っているようだった。

屋根の穴から中を覗くと、倒れたクレーンやコンテナらしきモノも見える。

「あれは……しようです」

俺がじつと見ているのに気づいたのだろう。

ここが定位置だと言わんばかりに俺の頭の上に陣取ったツイントがその建物を指差してそう言うと、セーラー妖精さん達がウキウキした声で続けた。

「あそこでかんむすをつくるのです」

「はやくまわしたいぜ」

「しぎいをとかすよろこび」

「ていとくはペンギんすき？」

「えっ!? 艦娘って作れんの!?!」

驚きのあまり、グリーンっ、と音を立てて首を回し、妖精さん達に向き直った。

頭の上から、ぬわー、という悲鳴が聞こえたがそれどころじゃない。

「そですよっ」

「しぎいでちよいです」

「ちよいちよい」

なんと……!-

艦娘については情報統制が厳しくて良くは知らなかったが、てつき

り空から降ってきたり、海から生まれてきたりするモンかと思っ
た。

まさかのカスタム方式とな。

これは衝撃の真実だった。

「作れる……って事は……！！！」

当然、あるんだろう。

あつて然るべきだろう……！！

おっ ぱい スライダー

「あそこで艦娘を……！ よし、顔洗ったらまずあそこね、あそこ！」
駄々下がり状態だった俺のテンションは、たった今人生最高高値を
記録していた。

オイオイオイオйкаスタム艦娘かよお！（歓喜）

夢が広がりんぐ。

やっちやう？

夢の100cm越え、イっちゃいますか？

右端までスライダー引つ張つちやいますかああああ！！？

「よいつらがまえをしておく……」

「みろよ、あのほとばしるていとくりよく」

「ひゅー♪」

「こいつあもしかしたらやるかもしれないねえぜ」

「でもなんかかんちがいしてそう」

「そんなところもすき」

「きやー♪」

@@@@

最高にウキウキ気分になった俺であったが、結局その直後には上
がったテンションを急降下させる事態に直面するのである。

密林に塞がれた道を実に十分も掛けて進み、やっこの思いで見つけ
たのは、古井戸の………遺跡？

当然、滑車も桶もあるハズがない。

石ころを投げ込んでみる。
ひゅわうわうわう………

………カラント………

「おもつつつクソ涸れてんじゃねーか！」

俺が悲痛な叫び声を上げると、妖精さん達はのんきにも、きゃー♪と楽しそうに逃げ回った。

どうすんだよ、またソツコーでつんだじゃねーか。

妖精さん達はどうか知らないが、人間は水が無かったら死んじやうんですよ？

君らの提督さん、着任して早々ミイラになっちゃいますよ？

俺が絶望にうなだれていると、頭の上のツインテが降りてきて、背中をポンポンと叩いてしたり顔で言った。

「だいじょうぶ？ おっぱいもむ？」

「……うるせえ。おっぱいなんかねえだろお前……」

俺がかわいそうな子を見る目でツインテの頭をグリグリやっていると、走り回っていた妖精さんの内の一匹が俺の目の前に来る。

昨日、一番最初に会った、グダグダセーラーの妖精さんだ。

「いどはかれてましたが、このおくにもいずみがあるです」

………どうやら、まだ希望はあるようだ。

この奥、の、この、の部分が、日の光も遮る薄暗い密林でなければなお良かったのだが。

「今度こそ大丈夫なんだろうなあお前？」

俺がウロンな声を出すと、コクコクと頭を縦に振って、キラキラした瞳で見上げてくる。

「そうかあ………ん？ なんだ、お前………ああ」

差し出された頭に手を乗せ、赤いお下げ髪をかいぐりかいぐりと撫でる。

ツインテの頭を撫でていたのが羨ましかったらしい。

気持ち良さそうに目をつぶっている。

「ぬけがけだー♪」

「おのれー」

「われわれにもなでぽをようきゆうする」

「うるさいぞ役立たずどもめ。ちゃんと泉にたどり着けたらいくらでも撫でてやるよ」

まったく、いつもこうして甘えてればかわいいものを、こいつらはイタズラをやめる事はできないんだろうか？

できないんだろうなあ……。

家に残してきた妖精さん達を思い返す。

こいつらと出会って半月ばかり、毎日が戦いであった。

一流の提督ってヤツらは俺の百倍以上の妖精さん達に取り憑かれるんだろ？

無理ゲー過ぎんじゃん。

その一点だけは尊敬するわ。

はあ……とため息を一つ。

腰を上げ、ジャングルを眺める。

「……………この奥かあ……………」

クアーーーーッ！ クアーーーーッ！ という鬼気迫る鳥の声。

キユイッ！ キキキキッ！ キヤッ！ キヤッ！ キヤッ！

というなんか獣っぽい鳴き声。

……やだなあ。

スゲエ虫とか蛇とかいそう。

何で俺は半袖なんかで来ちゃったんだ。

蜘蛛とかも嫌いだし……現代っ子なんだよ俺は。

俺は嫌がる心にムチ打って、頬を張って気合を入れる。

「よしっ……………行くぞ、妖精さんズ」

「いくぜいくぜー♪」

「しゅっぱーっ♪」

「ていとくさんをおまもりしろー」

「りんけいじんをくめー」

またもどこから取り出したのか、一瞬でヘルメットと迷彩服の姿に

変わった妖精さん達が、手に手に小さなナイフを持って押しくらまんじゅうのように俺を囲んだ。

「いや動けねえよ」

とにかく、飲み水と食料の算段さえつけば死ぬことはあるまい。

猛獣的なモノも怖いのが、一応妖精さん達が護衛してくれるみたいだし……いや不安しかねえな。

内心の恐怖をおし殺して、密林に向けて一步を踏み出す。

この後にはいよいよ艦娘作りが待ってるんだ、これくらいで怖じ気づいてられるかよ……！！

お水は大事

「マジで死ぬかと思った……！」

沢の水で洗ったTシャツを固く絞り、腕を通す。

まだ心臓がバクバクしている。

今生きているのが不思議で仕方ない。

いったい何だったんだ今の……？

「あいつはわれわれのらいばるなのです」

「いちじきゅーせんちゅう」

「つぎこそはせなかにのつてやるぜ」

「二度と会いたくねえ……」

@@@@

あの後、俺と妖精さん達は、日が昇るにつれてどんどん気温が高くなる密林の中を、汗だくになりながら掻き分けるように進んでいた。

意外にも妖精さん達は優秀で、トゲのある細枝や、触るとカブレるようなチクチクした蔓草を器用に切り払い、ヤバげな虫や蛇の類も見つけ次第、やー！ とか、そこだー！ と、小さなナイフで確実に仕留めてくれたのだ。

伊達にこんな無人島（まだ確かめてないけど、多分そうだろう）で何年も過ごしていないな。

惚れそう。

ただ、仕留めた獲物を自慢げに見せびらかさないで欲しいです。

猫かおのれらは。

聞けば、妖精さん達は時々このジャングルに分け入っては、鳥や鹿などの動物を仕留めてゴハンにしていたらしい。

やだ、めつちや男らしい……でも君達、確か食事無くて大丈夫なイキモノだよな？

以前気になって実家の妖精さん達に聞いたら、「しゅしよくはらう
です」「もつとあいをぷりーず♪」とか言ってたし、実際時々冷蔵庫
の中身とか買いい置きのお菓子を盗み食いする位で、食事らしい食事は
ほとんどしてなかったハズだ。

食わんでイイならわざわざ俺の家計を圧迫するような事しないで
欲しい。

つくづくヘンな生き物だ。

そんなこんなで優秀な狩人妖精さんに守られつつも、暑さと湿気で
サウナのようになっている密林の中をぎつと30分はさ迷い、全身が
汗と泥と擦り傷だらけになった所で、俺達はようやく水場にたどり着
いたのだった。

「つきました」

「ていとくさん、いずみですよいずみ」

「こんどこそのみほうだいです」

「よくついてこれたなしんまい」

「よくやった。うちにきてわたしをふあつくしていい」

「そんなことよりなでろー」

「ゼエ……ハア……や、やっと着いた……水だ……ホントに
あった……!」

道なき道を散々登ったり下ったりして、やっとの思いで密林の中に
開けた岩場と、そこを流れる小さな小沢を見つけた。

俺達の立てるガサガサという物音を聞いて、水場に群れていたイタ
チのような小動物達や小さな鳥なんか、バツ、と散り散りになつて
逃げて行く。

ほんの数メートルで地面に染み込んでいってしまうような小さな
川だが、確かに水だ。

岩場には青々とした苔がむし、細い流れがチヨロチヨロと涼やかな
音を立てている。

少し高くなった所はごく小さな泉のようになっていて、透明に澄ん
だ水底の砂が所々ポコポコと踊っている。

湧き水が吹き出しているようだ。

「よくやった……よくやったな妖精さん！ ほれ、こっちこい、撫でたる」

「おほー♪」

「なでぽなんかにわたしはまけうわー」

「ようせいさんをだめにするおてでー」

「もういつかい！ もういつかい！」

わらわらと群がる妖精さん達をおぎなりに撫でくり回し、泉の前に進む。

コラ、お前はさつき撫でたろうが。

ツインテ、オメーに至っては頭の上でずっと寝てたろ！

こんこんと湧き出る泉の水面に、そつと手を差し入れる。

「おっほ、冷たいー！」

かなり深い所から湧いているのか、こんな灼熱の密林の中なのに、ヒヤツと冷たい水に驚く。

早速……と両手で水をすくい、口許に近づけて――

「……………そういや、生水はなんたらっ……………て聞いた事あったな……………」

子供の頃など、田舎に遊びに行つては川の水をガブガブ飲んだり、浮かんてるクレソンを無駄にちぎって食つてみたりもしたが……………。

ここはジャングルだ。

クツソ忌々しいコトに、ジャングルだ。

地球のどことも知れないこんな無人島で、名前もわからんような細菌とか寄生虫に、デリケートなポンポンを痛くされるなんて事態は避けたい。

俺はおもむろに、俺の背中にしがみついて肩越しに泉を覗き込んでいたツインテの軽しい頭をむんずと鷲掴んだ。

そのまま、およよとか言ってるツインテを目の前に持つてくる。

「なんだとうとうわたしにこくはくするきになったか？」

俺に見つめられ、ウルウルした目でたわけたコトを抜かすツインテに、良しい笑顔で命令する。

「おいツインテさん。お前今日は全然働いてないよな？」

「いやされるでしょ？」

頭を掴まれたまま、頬に両手を当ててくねくねするアホ妖精。
うん、コイツに遠慮はイランな。

「提督命令だ。お前にこの泉の水質調査を命ずる。しつかり調べてこいよ?。」

そう言うと、ツインテはドヤ顔でビシッ、と敬礼を決めた。

頭鷲掴みにされてるクセに。

「おやすいごようさだいとーりよー♪」

「ニッポンに、プレジデントはく……、居ねえーよっ!!」

俺は軽く振りかぶってから、泉の真ん中にツインテ妖精を放り投げた。

「おー♪」「いーなー」と周りの妖精さん達がきやいきやい騒ぐ。

「あばよーとつつあーん♪」

ツインテはご機嫌な台詞を叫びながら、空中でくるくると回転しながら光を纏い、狙い通り泉のど真ん中に、ちやつぽーんっ、と着水した。

しばらくして浮かび上がってきたツインテは、さつき一瞬で衣替えしたのであろう紺色のスクール水着で、元気に背泳ぎを始めた。

胸の名札にはご丁寧に『ついで』と書いてある。

お前はそれでいいのかツインテ。

「おーい、どうだ。飲んでも大丈夫そうか?。」

「ゆがみねーぜ」

大丈夫なようだ。

大丈夫ってコトだよなそれ?

俺は安心して泉に手を突っ込もうとして、

「わくわく」

「どきどき」

「そわそわ」

「ええい、うっとうしいわあっ!!」

「きやーっ♪」

またも行儀良く並んで期待の眼差しを投げ掛けてくる妖精さん達を、まとめて水中に叩き込んだ。

ちゃぽぽぽーん♪ と立て続けに上がる小さな水柱。

妖精さんプールと化した泉で、スクール水着の姿でキャツキャと遊ぶ妖精さんズを無視して、ようやく念願の水を口に運ぶ。

「っ、…………っウマァーっ！っ！」

ヒンヤリと冷たくて、臭いも無し。

最高にクリアな湧き水だった。

夢中になって水をすくい、ガブガブと飲みまくる。

「ふおおお、染みるうー……………っ！」

そのまま顔を洗い、頭にまで水を被る。

服までビショビショになるが、それすら気持ちいい。

グシャグシャのTシャツを脱ぎ捨て、ズボンも脱いで、泉から流れ出す沢でガシャガシャと洗う。

昨日からずっと塩や砂でザラザラしていたのが、やっとスッキリした。

勢いでパンツにまで手を掛けた所で、妖精さん達の騒ぎ声がちよつと静かになっているコトに気づく。

顔を上げる。

「どきどき／＼／」

「とつぜんのすととりっぶ」

「ぬげー♪ ひゅーひゅー♪」

「わたしたちはきにせず」

「つづけてつづけて」

「……………なんか嫌だな。別に良いけどジロジロ見んなよ？」

こんな二頭身どもに見られた所でどうという訳でも無いが、なんかムカつくなコイツら…………。

俺は一思いに全裸になると、脱いだシャツをタオル代わりに全身をこすり洗っていった。

「うひょー」

「こいつあすげえや」

「たまんねえぜ」

「さすがていとくさんだ」

「まっつてよかったです」

「ふっふっふ、わたしのみつけたていとくはすごかろう♪」

うるさいな……ってか、俺の裸なんか見てナニが面白いんだろスケベ妖精どもめ。

キラキラした顔で歓声を上げ、ぷひゅー、ぴひよおーつ、とヘタクソな指笛を鳴らしている。

実家のヤツらといい、妖精さんってやっぱりよく分からん。

しかし次からはタオルを持ってこないと……。

空いてるペットボトルも持つてくるべきだったし、やっぱり寝起きは頭が回らん。

洗った服を、ぎゅううーつと絞り、再び着こんでゆく。

この暑さだ、どうせすぐに乾くだろう。

妖精さん達が口を尖らせてぶーぶーとブーイングを飛ばしているのをBGMに、湿った冷たいズボンに足を通しながら、これからの事を考える。

取り敢えず、飲み水の確保は出来た。

後は食料だが、この妖精さん達は実家のゴクツブシどもと違って優秀で狩りができる。

周りは海な訳だし、コイツらなら魚くらい簡単にとつてこれるだろうし、こんなにわさわさと木々が繁ってるんだから、どこかしらに食える果物的なモノくらいあるだろう。

毒味も妖精さんがいれば安心だ。

ここがどこで、本当に無人島なのか、家には帰れるのかとかも知っておきたい。

これも妖精さん達に訊いたり、確かめて貰えば良さそうだ。

コイツら普段歩いてるけど飛べるしな。

……。

……。

……あれ、なんか全部妖精さんだよりじやない？

今の俺、スツゴくヒモっぽくない……？

もうちよつと位、妖精さん達に優しくしてやった方が……いやいやイヤ、俺は提督！ 提督なんだから、俺の仕事は艦娘の指揮じゃんかな！
こういう雑事は下のモンの仕事なんだから、俺が取っちゃダメだよな！

つてか、そうだよ艦娘！

取り敢えず飢えて死ぬって事はなさそうだし、艦娘作らないと！
ナニが悲しくてこんな色気もへつたくれもない妖精さん達とキヤツキヤウフフしなきやならんのか。

理想のおっぱい艦娘ハーレムを作るためじゃないか。

危うく自分の目的を思い出した俺は、ズボンのベルトを締め、シャツを手を取って固く絞りながら妖精さん達に声を掛ける。

「おーいチビども、そろそろ帰るからまた俺の先に立って——」
そして、シャツをパンパンと広げながらふと顔を上げ——

金色の瞳と目が合った。

「——っ、い!!?」

バシヤバシヤっ！ と、妖精さん達が素早く水から上がり、俺を囲うように陣取る。

岩場の端。

泉を覆うように生い茂る密林の、そのすぐ出口。

深く繁る下生えと、密集する背の高い草の中。

暗い木々の隙間、胸の高さ辺りにぼうつと浮かび上がるように並んだ、二つの瞳。

グルルルルルルルルルル………

背筋が凍りつくような低いうなり声。

ゾワゾワゾワくくくッ、と、全身の毛が逆立つ。

まったく動けない。

背中に冷たい汗が流れ、今しがた潤したばかりの喉がカラカラに渴く。

ソイツは、しばらくの間、ジツ……………つと俺を睨んだあと、フツと顔を逸らし、音も立てずに姿を消した。

……………。

「っハアーツ！ ハアーツ！ ハアーツ……………！」

な、なんだったんだ今の!?

むつつつつつちやくちや怖かったぞ!!?

俺は、いつの間にか握りしめていた手のひらをゆっくりと開いた。

見れば、真っ白になって、痛々しい爪の跡がついている。

「むむむ、もうていとくにきづいたですね」

「かんのいいねこです」

「いつかつるしてやるのです」

ね、猫!?

あれ、猫なのか!!?

緊張を解き、気の抜けるような声で口々にしゃべる妖精さんに、思わず全身の力が抜けた。

そうして、話は冒頭に戻る。

@@@@@@

「もう二度とこんな森入らんとぞ……………」

その後、すっかり玉の縮み上がった俺は、へっぴり腰になりながらやっとの思いで鎮守府（廃墟）に帰って来た。

「あれ絶対クロヒヨウかなにかだつて…………あれがニヤーンって面かよ、食われるかと思つたぞ…………」

艦娘のかの字も無い内から、深海棲艦でもなんでも無い蔽ついネコに食い殺されるとか、洒落になんねえから！

「だいじょーぶ」

「あたしがついてるじゃない」

「つぎこそぺつとにしてやる」

「つかまえたらちんじゅふでかってもいいです?」

「ダメっ！ ゼエッツイタイにノウ！ お兄さん、許しませんからねっ！？」

あんなモンをイヌネコのノリで連れてこられたら、命がいくつあっても足りない。

俺がエサになる未来しか見えんわ、アホか！

司令室に戻って一息ついた俺は、リュックサックから取り出したカロリーメイトをモソモソさせながら、今も命がある事をどこかにいるであろうフリーターの神に感謝した。

「ていとくさん、つぎはなにするです？」

ほっぺたをあめ玉の形に膨らませたツインテが、俺の膝の上からモゴモゴした声で問いかけてくる。

「せっかくだからわたしはこのあかいあめをえらぶぜー」

「れもんあるれもん？」

「あまーい♪」

「やっぱりできるていとくはちがうぜー」

オメーら、食うもんだけはしっかり食いやがって……。

一人一個だぞ。

「次な、次……………そうだよー！」

バツと勢いよく立ち上がる。

ツインテが楽しそうに転がって行く。

「艦娘だ！ 作るぞ艦娘！ もう、すぐ行こう今行こう、ほれ、立った立った！」

俺の号令に、ほっぺたの片つぽを丸く膨らませた妖精さん達がぴよんと立ち上がる。

……………あ、テメー両方膨らんでるぞ返せ！

「やーん、かんせつきつす♪」

「ていとくさん、わたしのも！ わたしのもなめていーのよ？」

バキッ、とあめ玉を噛み潰しながら、こーしゃ……………こう、こーしやう？ コウシヨウに向かって足早に歩く。

とにかく艦娘だ、この鎮守府には艦娘が足りない！

ちやつちやと俺好みのおっぱいの大きい艦娘を作って、甘え倒さな

ければ！

記念すべき最初の艦娘。

スライダー、どれくらいにしようかな……。

F……いや、ここは自分に正直に、G、いや、Hかな？

うへへ。

俺はまだ見ぬ艦娘の姿を妄想しながら、妖精さん達と一緒にコウシヨウに向かった。

材料集め

妖精さんと連れ立って庁舎を出て、腹立たしいくらいの日照りの中、レンガの廃墟を横目に坂を下って歩く。

途中、やたらデカイ石がゴロゴロしていると思ったら、どうやらこの坂道には昔、階段があったようだ。

一番下に数段、崩れかけの段が残っていた。

何処を向いても廃墟ばかりで、うんざりする。

背の高い雑草を掻き分けながら埠頭へ向かい、額の汗をぬぐいながら背の高い建物を見上げる。

「フウ……………いちいち移動が大変なんだよ……………よし、コーシヨウだコーシヨウ！ 艦娘！ 作れるんだよなココで？」

身体を屈めて妖精さん達に念を押す。

「ここまで来てできませんとか、許されざるよ。」

「もちろんです」

「ぶろですから」

……………あれ、不安になってきた。

大丈夫だよなあ……………？

コーシヨウなる場所の入り口から、内部を覗き込む。

ガランとした建物だ。

倉庫のような薄暗い空間に、屋根の穴や剥がれた壁の隙間から光の柱が斜めに射し込んでいる。

重そうな鉄の扉は内側に倒れて、デカイ錆のカタマリみたいになっている。

ゴクリ、と唾を飲み込んで、妖精さん達と一緒に中に足を踏み入れる。

潮の臭いに混じって、鉄と、油と、何か腐った池のような臭いが鼻につく。

思わず顔をしかめる。

「うーん……なんかこう、工場って感じの臭いだな。海辺の」

っていうか、丸つきり海辺の工場そのままだったわ、バカか俺は。かわいい艦娘を作る場所、と聞いていたせいで、何故か勝手に女の子の部屋のような、甘い匂いでもする空間なんじゃないかと思っていた。

女の子の部屋入ったコト無いけど。

「ひさびさのコーしよーだー」

「うでがなるぜ」

「れっぷうつくろうれっぷう」

「ぺんぎん……」

頭の上のツインテ以外が、待ちきれないとばかりに飛び出してあちこち走り回る。

俺だって待ちきれないってのに、コイツらは……。

コウシヨウ内を見回してみる。

中に入ってみると、外から眺めるよりずっと大きく感じる。

体育館の半分くらいの広さで、三階建てくらいの高い天井から、割れた電球がぶらんと垂れ下がっている。

坂の上から覗いた時に見えた小さなクレーンは倒れて捻じ曲がったただの鉄屑と化し、壁際に一つだけ置かれたコンテナはこれまた錆びて穴だらけで、空っぽの中身をひしゃげて開きっぱなしになった口から覗かせている。

隅にはゴミのようなモノが小さな山を作り、割れた窓から吹き込んだ雨で真っ赤に錆びて、床に大きなシミを作っていた。

そして、真ん中辺り。

足音を少し反響させながら近付く。

部屋の中央には、床のコンクリを長方形にくりぬいたようなプールが、間を空けて二つ作られ、緑と赤の混ざったドロブのような色の液体で満たされていた。

ぷうりん……と、立ち上る、生臭さと金気臭さかなげの混じったような臭い。

頭の上から、ウキウキとした声が降ってくる。

「けんぞうようどつくです」

ぴよん、と飛び降りて、ててつとプールの脇まで駆け寄ったツインテが、満面の笑みで振り返る。

「ここでもかんとすをつくるのです」

いやムリだろ。

@@@@

やっぱりだよ。

妖精さんの『任せろ』は基本真に受けちゃダメだって、あれほど、あれほど痛い目を見たのに俺と来たら……！

膝から崩れ落ち、さめざめと涙を流す俺を心底不思議そうな目で見てくるツインテ。

「どうしたていとく。おなかない？」

「……お前、このエグいドブみたいなのは、これで正解なんか……？」
俺は四つん這いのまま顔を上げ、名状しがたい汚水のようなモノを指差した。

「……………」

俺と一緒にあって、しげしげとプールを覗き込むツインテ。

こぼつ、とガスが浮き上がり、辺りに鼻が曲がりそうな異臭を撒き散らす。

ぷい、と壁の方を向き、偉そうに腕を組む色白ツインテ妖精さん。

重々しく口を開く。

「……じゅうのじゅう、ばんぜんとはいいいがたい」

「百ねえよー」

なんだこの臭いは！

田舎の畑に置きっぱなしになった肥溜めの風呂桶みたいになってんぞ!?

「だいじょうぶ。いけるいける」

すすす……とプールから遠ざかりながら、ツインテが言う。

おい……分かってんのか？

艦娘。

俺の記念すべき艦娘第一号だぞ？

どんなに可愛くても、ドブみたいな臭いしてたら台無しだよおー！
「ようせいさんうそつかない」

自信満々に胸を叩くツインテ。

……うわあ、不安。

「……………まあイヤ。できるってんならやって貰おう。……ちなみに艦娘ってどうやって作るんだ？ できるまでどれくらいかかる？」
俺はできるだけおぞましい水溜まりに目を向けないようにしながら、ツインテに問いかける。

情報統制の厳しい艦娘関係の情報だが、人類の平和を守る大切な仲間として、その姿や名前なんかは多少、公開されていた。

かつての大戦で戦った艦艇の魂を持つ、艦娘という者達。

彼女らは、ネットやテレビのニュースや特集なんかを見る限り、人間とまったく変わらない姿をしている。

見た目の年齢は、下は女子小学生くらいから、上は妙齢のお姉さんまで幅広く、例外なく美人美少女だ。

艦娘達と毎日ちちくりあって、その上莫大な給料まで貰える。

そんな、提督という存在を初めて知った時、俺はソイツらが若くしてハゲるよう心底呪った。

とにかく、そんな人間みたいな生き物を作る訳だから、俺はてっきりSFちっくな透明な筒でもあるんじゃないかと思っていた。

その中にそれっぽい蛍光色の液体が満たされて、ソイツに妖精さん達が妖精さんパワー的なナニかを注入して、パソコンをカタカタ操作すると艦娘が誕生する、そんな想像だ。

しかし、目の前にあるのは四角い肥溜め。

……ちよつとここから女の子が出てくる絵が浮かんで来ないんだけど。

「ざいりょうがあればいっしゅん」

「もってきたー」

「このときのためにあつめておいたのさ」

「じゅんびおっけーです♪」

「しじをくれあいぼー」

ツインテが何でもないように答えると、いつの間に集まっていたのか、コウシヨウ中に散らばっていた妖精さん達がプールの回りに集まっていた。

それぞれ手にスパナやらバールやら金槌やらの工具を抱え、丸々と書かれた黄色いヘルメットを被っている。

またぞろ何処から取り出したか知らないが、人間用のサイズなのでやたらデカく見える。

それどうみたってお前ら自身より重くないか……？

まあ何時もの事か。

「……何だか良く分からんが、よし、やれー！」

俺の投げやりな指示に、妖精さん達が元気良く、おー♪ と工具を突き上げた。

七匹の妖精さんに、ツインテが指示を飛ばす。

「ごうざい、いれろー！」

すると、妖精さんズは一斉に飛び出すと、ガラクタの山に突入した。

「お、おおっ……スゲえな……」

そして、何だか良くわからない機械の残骸に工具を突き立て、テキパキと解体していった。

バキッ！ メキメキ……ッ！ ベコッ！ ギイコギイコ……！

カラン！

いったいどんな不思議パワーを使っているのか、大の大人が寄って集っても手こずりそうな鉄屑の山を、あつという間にバラバラにしてしまう。

「どんどんはこべー」

「なげこめー」

そうしてバラしたそばから頭の上に持ち上げてプールまで運び、ポイポイと水の中に放り込んでゆく。

「うわあ、ゴミを捨ててるようにしか見えん……」

そうやって錆の塊のような鉄屑をある程度入れた所でツインテか

らストップがかかる。

「ねんりようー！」

「あいさー」

「ねんだいもののねんりようだー」

すると、今度は隅っこに寄せてあったバケツを、チャプチャプと運んでくる。

覗いてみると、真っ黒でドロドロした謎の液体が満たされていた。

あの汚水の横にいてなお鼻に突き刺さるような、強烈なオイル臭がする。

「……………コレナニ？」

「ななじゆうねんまえのがそりんです」

「くるまからこつそりぬきとったです」

「だいじにとつとききました」

…………それはもう果たしてガソリンなのか？

一万回使った後の天ぷら油とかじゃないよな？

俺の心配をよそに、妖精さんたちは口元にハンカチを巻いて、腐ったガソリンを注ぎ込む。

いよいよプールの中が地獄めいてきた。

「ぼーきもいれろー！」

次の指示に、妖精さんが残ったガラクタの中から黒くて丸いモノを転がしてきた。

「今度はなんだ…………？ ぼーき？」

「ぼーきさいとです」

「ああ、ボーキサイト…………何だっけ、アルミ……………には見えねえなソレ」

妖精さんが転がしてきた黒い塊は、趣味の悪いパツクマンみたいなボールだった。

口らしき部分の乱杭歯っぽいデザインとか超ロック。

ちよつと欲しいかも。

「何だコレ。オモチャ？ コイツは錆びてないんだな」

良く見ればちよつと愛嬌がある。

てはおっぱいのため。いたしかたない犠牲だ……！」

天井の、一回り大きくなった穴を見上げて呟く。

艦娘一人生み出すだけでこれとは、いよいよドツボに嵌まってきた気がする。

もう絶対、失敗しちゃった♡ じゃ許されんぞ。

「なあツインテ。そろそろ出来そうか？」

「あとはだんやくです」

だんやく……まあ、弾薬だろう、たぶん。

………つて、そんなもん一体どこに――

「ここにあるぞー！」

俺が口を開こうとした瞬間、入り口のほうから妖精さんの声が響いた。

振り返ると、赤髪お下げの妖精さんが、ロープでナニかを引っ張っている。

なんかさつきから見かけないなと思っていたが、そんなもんを持ってきてたのか。

お下げが持ってきたのは、古びた木の箱だった。

鑑定番組で見たコトがある。

たしか長持とかいう衣装箱だこれ。

「あけてあけて」

お下げに急かさされて開いてみると、辺りにホコリっぽい匂いが広がる。

「おおー」

「どうとうこのときが」

「きってみてー」

「ケホツ……なんだ、コレ………おお」

中に入っていたのは、茶色いボロ布……ではなく、軍服だ。広げて初めて分かった。

煤けたボタンには、桜とイカリの意匠が見てとれるし、肩には肩章とかいうのがついている……階級は分からないけど。

脇には、軍帽やサーベル、剣帯や靴まで入っている。

「すごいな………これ、ずっととって置いたのか？」

そう問いかけると、島にいた妖精さんズが誇らしげに胸を張った。「そうか、これ、元々は白なんだ……何年ほつといたらこう………つと、ナニすんだお前ら!？」

俺が軍帽を手にとって眺めていると、妖精さんが二人がかりでジャケツトを持ち上げて、俺の肩に掛けた。

「おほー♪」

「ていとくかつ……いい！」

「おとこまえー！」

「すてき」

「だいて♪」

「きやー♪ きやー♪」

「そ、そうか……? つたく、お前らも調子のいい……♪」

やんややんやの大喝采に、内心満更でもない。

べ、べつにお前らみたい謎生物に誉められたって、嬉しくなんか
ないんだからねっ!?

提督なのに何時までもTシャツ姿じゃ、これから会う艦娘にカツコ
がつかないから仕方なく、そう仕方なくなのだ。

調子に乗って手に持った帽子を被ってみると、妖精さん達はいつそ
うキラキラし始めた。

「ん、ゴホンッ………まあ、俺は提督な訳だから、何もおかしくはな
いよな。後で一回洗濯してみるか……無駄だろうけど……お?」

中に入っていたコートを持ち上げると、長持の一番底に、赤く錆び
た小さな拳銃が一丁、静かに横たわっていた。

「おお……ピストルだ……初めて触ったわ」

持ち上げてみると、ひんやり冷たく、思っていた以上に軽い。

マンガとかドラマなんかでよく見るのとは、だいぶ形が違う。

「あ」

少しいじくり回すと、上のスライド部分が、パキッ、と外れてしまっ
た。

カラン、と壊れたスライドが、長持の中に落ちる。

「あーあ……あ、これ」

「だんやくです」

薬室に、一発の弾丸が。

傾けると、手のひらにコロソ、と落ちる。

青錆びた真鍮の実包だ。

とても用をなすとは思えない。

覗き込んでも、他には一発も入っていない。

「……………え、まさか弾丸って…………」

「それです」

「それだけです」

「いつきゆうにゆうこん」

マジかよ…………。

君に決めた

「ないよりましです」

ツインテはそう言うと、ぴよんつ、とジャンプして俺の手の上の銃弾をひよいと奪い、プールに投入する。

トポン……と、粘っこい音を立てて、青錆まみれの銃弾が奈落に沈んでゆく。

「……なあ。ホントにそんなんで大丈夫なのか？ 有り合わせでどうにかするしかないたって、限度ってモンがあるだろ……」

口元をハンカチで覆ったツインテが長い棒でかき混ぜる闇鍋を恐る恐る覗き込んで見ると、マーブル模様の水面で黒いたこ焼きがくるくる回り、ガラクタ同士が水中でこすれ合う、ガラン……ガラン……という鈍い音がくぐもって聞こえてくる。

……悪ふざけにしか見えねえ。

「だいじなのはこれから」

疑わしげな目で見てみると、ツインテがそう言って続ける。

「ここにいのちをふきこみます」

命を吹き込む……？

なんだそれ、と思っていると、これまたいつの間に汲んできたのか、澄んだ液体で満たされたバケツを頭の上に掲げた妖精さんが走ってきた。

「もってきたぞー！」

「しんせんないすいだー」

どうやら、海の水を汲んできたようだ。

チャプチャプと揺れるバケツから潮の香りがする。

今度は海水を放り込むのか？ と思っていると、プールをかき混ぜる手を止めたツインテが、てててつ、と俺の目の前に走ってきた。

身体をかがめた俺を見上げて、ピシッ、と敬礼して言う。

「こんかいはちよーせつやくれしびです」

「？ お、おう」

「できるのはくちく、がんばってけいじゅんです。なにつくるです？」
「どうやら、どんな娘がお望みかリクエストが欲しいらしい。」

そうは言っても、この惨状を見た後だとまともな女の子の形をして
いてくれたら何でもいい気がする。

無事に産まれてきてくれるんなら、万々歳だ。

むしろ半液体のモンスターとか出てくるんじゃないか本気で不安。

「……あんまり、いや超聞きたくないけど、失敗したらどうなの？」

「わたししっぱいしないので」

ふんす、と無い胸を張るツインテ。

うわあ、スゲエドヤ顔。

「お前、この前プリン作ろうとしてスポンジみたいな卵焼き作ってた
じゃん」

「……………」

てしっ！ てしっ！ てしっ！

はっはっは、コラコラ、向こう脛を蹴るんじゃない。

全然痛くないけど……あ、まて、その棒を近づけるなって！

しかし困った。

ツインテに釣られて、きやつきや♪ と意味も無くじやれついてく
る妖精さん達を適当にあしらいながら思い出す。

自力で鎮守府を作ろうと思いつてから、第二次大戦とか艦娘につ
いてなど、一応色々と独学で調べてはみたのだ。

……主にwikiで。

水を掛けた覚えもないのに日に日に増えまくる妖精さん達と、血を
血で洗う壮絶な格闘をしながら、睡眠時間を削ってまでの、涙ぐまし
い努力だった。

くちく、と言うのは駆逐艦、けいじゅんとやらが軽巡洋艦の事を
言っているのだろう。

大した容量のない脳ミソに必死に詰め込んだ知識によれば、駆逐艦
は魚雷を積んだ、ちっちゃい工作用のフネ……たしか魚雷艇だかを駆
逐するために作られた小さめの軍艦で、巡洋艦は遠洋航海ができて、

速くて強い軍艦、だったハズだ。

たしかそう、たぶん。

で、軽だから小っちゃい方の巡洋艦だ。

重巡洋艦とかいう、戦艦の代わりに作った大きい巡洋艦があつて、その艦娘が大層立派なモノをお持ちになつているコトはよくつく覚えてる。

艦娘を題材にした創作には強い検閲がかかり、イカガワしいイラストなんかはアップロードされてすぐに削除されるのだが、それはそれ、世界に名だたるHENTAI民族ニッポン、ある所にはある。

まだ一度も実物にお会いしたことがない高雄女史なる艦娘さんには、大変お世話になつた。

いつか会つてお礼を言いたいモノだ。

で、駆逐艦は小学生みたいな見た目だったから、きつとみんなおっぱいが小さい。

うん、駆逐艦は無しでいいだろう。

……いや、なんか艦隊では大が小を兼ねないとかなんとか書いてあつたから、いつかは作らなきゃならないんだらうけど、最初くらいはさ、ね？

「うーん……その二種類しかダメ？ 無理？」

「だーめ♪」

渾身の頭突きを受け止めつつ、ひよいっと顔の前に抱え上げたツインテに問いかけると、かわいらしくバツテンを作つた。

まあ、正直こんな廃材鍋で艦娘を作れるだけ御の字だ。

贅沢は言うまい。

「じゃあ、軽巡で頼むよ。おっぱいは大きめでよろしく」

駆逐艦と軽巡洋艦。

たしか軽巡洋艦の方が大型の軍艦だったハズだ。

軍に公開された艦娘の画像から察するに、大型の艦艇ほど、艦娘になつた時の見た目年齢や、おっぱいが大きい。

戦艦や空母なんかは、少ない情報ながら軒並みケシカランプロポーシヨンだつた。

「ここは少しでも大きめに作ってもらわないと……と、あれ？」

「まかせろー」

「ちよ、ちよ、ちよっと待って！ その、どうやんのかは分からないけど、今から艦娘をその、作る？ 建造するワケだよね？」

勇んでプールに向き直ったツインテを、慌てて呼び止める。

俺は今、大変な事実気づいてしまったかもしれない。

「うむ」

「その、今から建造するってコトはさ、ある程度形とか、大きさとか……その、調整、できるよね………？」

艦娘は妖精さんが作る。

そう聞いて、それならば当然、その辺の調整はできて然るべきと思っていた。

しかしだとしたらおかしくないか？

駆逐艦は小さく、戦艦は大きい。

実にしっくりくる。

しっくりし過ぎる。

提督は超スーパーエリートだ。

勝ち組の家系に産まれ、幼いうちから蝶よ花よ酒池肉林よと育てられ、何一つ不自由なく、望めば何でも手に入るような人生を送ってきたような上級神民だ。

そんないけないヤツらが、さあ何でも自分の思い通りになる艦娘を作りましょう、そうなった時。

果たしてそんな普通の子を作るか？

(無い！ 絶対無い！)

あり得ない。

イケメンエリートと金持ちは性癖が歪んでいると相場が決まっている。

ヤツらなら、嬉々としてロリ巨乳艦娘(わかりみ)や、長身絶壁艦娘(ありえん)を建造して侍らせたりするに違いない。

それどころか、デブ専やB専くらい居たって不思議では無いのだ。そんな性的倒錯エリートが何人もいるのに、出てくる艦娘映像はす

「え、留守とかあんの？」

と言うか、そん中に居んの!？」

「あー、じゃあイヤ、ちよつと浮かんだだけだし……誰なら作れそう？　もう、ちゃんと艦娘なら誰でもイヤんだけど……」

俺がそう言うのと、ツインテはうーんと少し唸った後、胸元から、ひよいつ、と白いチョークを取り出した。

「おかおおしえます」

どうやら、今建造できる娘の顔を描いて教えてくれるようだ。

懐かしのボロアパートにも散々落書きされたが、あの画力じゃせいぜい髪型くらいしか判断――

――待て、顔？

「ああ……ん？　ちよつと待て、お前、産まれてくる艦娘の姿がわかるのか!？」

「ぎくり」

分かりやすく、しまった、と言う顔をするツインテ妖精。

慌てて見回せば、口に手を当てて、しー！　しー！　とやっていた妖精さん達が、目を合わせられた瞬間、そっぽを向いてへたくソな口笛を吹き始めた。

「なんにもしらないですよ?」

「も、もくひするです」

「きようはよいてんきです」

「からてのけいこが」

「はたけのようすが」

「にかいでものおとが」

「ええと……ちゅーする?」

おのれこの妖精さんども……!」

「おいこらツインテ、お前それが分かるんなら最初から胸のおっきい娘教えてくれたらイヤじゃねーか!」

俺、ず~~~~~~~~つとそう言つてたじゃん!

「コイツら分かっててずっと黙ってたな!？」

「……………きよひけんをはつどうする」

きよ、拒否権、て…………!

「コイツら、まさかとは思うが、艦娘っぱいに嫉妬でもしてんのか!？」

「いいぞー」

「われわれはけんりよくにくっしない」

「おっぱいはてきだー♪」

「ていどくはもつとわれわれをかまうべき」

「ちいさくてもいいじゃない」

「むしろいいじゃない」

「うわきはゆるさんぞー」

開き直って威勢を取り戻した妖精さんズが、デモ隊みたいな格好をして抗議を始めた。

ツインテを守るように密集して、『てっていこうせん!』と書いたプラカードを振っている。

ええい、小癩なぺたんこ妖精さんどもめ…………!

「ていどくはたつたあたりがおにあいです」

俺が妖精デモ部隊とにらみ合って、ぐぬぬ…………とやっているところの際についてツインテが海水の入ったバケツを持ち上げた。

あ、コイツ勝手に建造しようとしてやがる!

「ストップ! ストップだ! いいか、提督命令だ、建造する艦娘は俺が選ぶ! 取り敢えずタツタとか言う娘は無し!」

絶対貧乳だろそいつ!

バケツを頭の上に掲げたツインテが、俺の命令にピタツと停止して、さっきの俺のように、ぐぬぬ…………という顔で俺を見上げてくる。

「おのれひきような」

「おうぼうだー」

「ようせいさんぎやくたいー」

「いじめはんたいー♪」

「でもていどくさんにいじめられるのはちよつとすきかも／＼／
「きゃー／＼／」

コイツらは、秘密については絶対に口を割らない。

その代わりにか、俺が本気でお願ひすると大抵の事は聞いてくれるのだ。

そこにつけ込むようでちよつとだけ心が痛むが、おっぱいに対する重大な背信行為だ、心を鬼にして掛からねばなるまい。

恨むなら、平らなる者として産まれた運命を恨むのだ……！

「……どうあつても、胸の大きな軽巡の名を吐く気は無いんだな？」

俺の念押しに、むん、と口をへの字に引き結んで答える妖精無乳さん達。

「……………教えてくれたら、一日中付きつきりで遊んであげよつかなあ……………？」

「……………つ、むぐつ!？」

あつさり口を開き掛けたお下げの口を、回りの妖精さんが素早く押さえる。

ちつ、買収はムリか……。

「じゃあ、ツインテ。さつき自分で言つた通り、今建造できる艦娘の顔を順番に描いて見せる。その中から俺が選ぶ。それなら文句ないな？」

計らずも、俺が大きく譲歩したコトに安心したのだろう。

見るからに、ほつ、と肩の力を抜いた妖精さんたちが、いいよーと機嫌よく返事をした。

(掛かったな、アホ妖精さんが!!)

「まずは……………」

床に膝をついて、白いチョークでカツカツと顔を描き始めた妖精さん達を見下ろし、俺はこつそりとほくそ笑んだ。

何を隠そう、自称おっぱいマイスターのこの俺。

名前と顔さえ分かれば、そいつがどの程度のおっぱいの持ち主かおおよその予想をつけられるのだ!

顔だけなら大丈夫だろうという、迂闊な判断を後悔するがいい……お前らには、建造できても絶対におっぱい揉ませてやらんからな!

俺がそんな事を考えている内に、一人目を描き終わったらしい。

てんりゅーです、という声に下を見ると、どこか目付きの悪い、眼帯ショートカットの顔（いくつか全く関係ないイルカやペンギン等の絵もあった）が描かれていた。

（ふむ……つり目……ショート……気が強い艦娘かな？ 天龍と言うカツコいい名前からして十中八九貧乳。眼帯とか姉御肌キャラなら、巨乳の線も捨てきれないが……？）

妖精さん達が描いた、思い思いの天龍似顔絵を見比べる。

（うん、なんか全体的に弱そうだ。つり目でヘタレならほぼ貧乳だろ。妖精さん達だって、開幕にいきなり巨乳軽巡をぶっ込んでくる勇気はあるまい）

「……パスだな。次」

すると、妖精さん達は目に見えてガツカリした表情をして、額を寄せ合い、作戦会議を始めた。

やはり、読み通り天龍なる艦娘は貧しき胸を持つ艦娘だったらしい。

フツ……所詮は妖精さん。

二頭身生物ごときの浅知恵で、俺を欺けると思うなよ？

「おつぎはいすずです」

次に描かれた顔は、つり目と大きなツインテールが特徴的な艦娘の顔だった。

「ほほう。なるほどなるほど、五十鈴、ね……」

二人続けてつり目。

明らかに俺を揺さぶりに来ている。

（が、甘い）

俺は笑いを堪えるのに必死だった。

（確かに、つり目のツンツンサバサバキャラとくれば、むしろギャップ萌えを狙った巨乳キャラこそ王道……！ 二人続けてつり目とくれば、素人ならばどちらか片方は巨乳だと判断してもおかしく無い……が！）

コイツら、大事な要素を見落としてやがる。

俯いて考え込む振りをした俺に、そわそわを隠せないでいる（というか、口でそわそわ……と言っている）妖精さん達を盗み見る。

（ツインテール！ コイツを組み合わせるとなると、話が別だ。つり目でツインテール、イコール貧乳！ まさにテンプレ、常識、お約束だ！ 日本に長く暮らしてマンガやアニメに親しんでいたら、ここで巨乳読みなんて方に一つもあり得んのだよ!! 間違ってたら木の下に埋めて貰っても構わないねっ！ 策に溺れたな妖精さんども！）

それからたっぷり悩む振りをして、「パス」と告げると、妖精さん達はもはや隠すこともなく、「やられたー」と崩れ落ちた。

ふふ、悔しかろう。

しかし今さらのルール変更は認められん、大人しく次の艦娘を描くのだな！

「くまです」

くま。

熊？ それとも、球磨か？

軍艦の名前の付け方から察するに、多分地名の方の球磨だろう。

白い線で描かれた似顔絵を見ると、やはりこれ以上、『つり目』という俺のステージで勝負するコトに分の悪さを感じたのだろう。

三連打のセオリーを破って、ジト目、あるいは、絵の感じから見るにタレ目の艦娘をチョイスしたようだ。

「球磨、か……」

じっ……と、似顔絵を見つめる。

ぱっつんヘアー、なのか？

そして長髪、エロゲみたいな長いもみ上げ、そしてやたら主張の激しいアホ毛。

（確かに少し、迷う所だな……）

幼さを感じさせるぱっつん前髪、ジト目にアホ毛とくれば、如何にもな貧乳ロリキャラを想像してしまう。

だが果たして本当にそうだろうか？

ヒントは俺を嵌めようとする妖精さんの、余計な一手にあった。

描かれた艦娘の口から、吹き出しで、くまー、というあんまりにも

あんまりな台詞が描かれているのだ。

(正直……危なかったぜ、妖精さん……!)

たった、一言。

恐らく名前になぞらえて、幼さを強調する冗談として、くまー、という、あり得ないくらいにかわいい台詞を描いたのだろう。描いてしまったのだろう。

(妖精さんの焦りに助けられたな……お陰で、可能性に気づけた。ぱつつんロングは、お嬢様キャラにも当てはまる特徴だ。そしてあざとい台詞から感じる、ふわふわ不思議ちゃんオーラ。球磨、という名前からも、大きなモノがイメージさせられる。典型的な、あらあらウフフ巨乳お嬢様キャラじゃないか!)

何でもない風を装い、そっぽを向いて口笛を吹いている妖精さんに、内心、舌を巻いた。

(なるほどな……危うく騙される所だった。前二人、天龍五十鈴は撒き餌だ。俺を油断させる罠だったんだ。簡単な引つ掛けを見破らせ、調子に乗った所で仕留める……! 普通、二回連続で貧乳とくれば、次は巨乳かも、そう思う。それが心理。当然の心の動き。僅かに働く疑念! だからこそ、普通ここに巨乳はあり得ない……貧乳を置いておくだけで、ノーリスクでミスを誘えるスイートポイント……! 巨乳で勝負する必要など、全く無いんだ……それゆえに、分かりやすいほどのロリの特徴を持ったキャラ! ……自分たちが単純だという侮りの植え付け……! だめ押しの一手法、不用意な、くまー、という台詞から不思議ちゃん線を見抜けなければ討ち取られていた……妖精さん、侮りがたし……!!)

だが、勝った。

俺は妖精さんの巧妙な罠を見破ったのだ。

軽巡洋艦、唯一の巨乳艦娘は、不思議ちゃん系お嬢様キャラの、ぱつつんロングでアホ毛がチャームिंगな球磨ちゃんです。ファイナルアンサーだ。

間違いない。

俺は、知らずに止めていた息を、ふうー………、と吐き出した。

妖精さん達も、自分達の敗北を悟ったのだろう。

互いに肩を叩き合い、慰めあっている。

「さすがにいとくさんです」

「きたいをうらぎらない」

「それでこそていとく」

「ほれなおしたぜ」

「けっこんしよ」

「させんぞー」

「まあ、色々あつたけど……決めたよ」

俺は軍帽を深く被り直し、キメ顔で言った。

「俺の鎮守府の、一番最初の艦娘。軽巡洋艦、球磨。……妖精さん達、球磨ちゃんを建造してくれないか？」

初めての建造

「よろこんでー♪」

俺の淀み無い命令に、色白ツインテがかわいらしい敬礼で応える。合わせて、妖精さんズもまた背筋を伸ばして、ちっちゃな指の先まで伸びた見事な敬礼をした。

誰の目にもやる気がみなぎっている。

俺の見せた鮮やかすぎる推理劇に、巨乳を憎む妖精さん達ですら、敬意を抱かざるを得なかったのだろう。

よせやい、テレるだろ。

「やるぞー」

「もえてきたぜー♪」

「つくるぞー」

「みててー♪」

ぴよんぴよん跳び跳ねて嬉しそうにアピールする妖精さん達に、見てるぞー、と手を振る。

ピカアーつと一瞬光り、あつという間に作業着と黄色いヘルメット姿になった妖精さん達が、戦隊ヒーローのようにビシツとポーズを決める。

コイツらの早着替えにも、もはや何とも思わなくなってきたなあ。

視線を上げ、妖精戦隊さんの後ろを見る。

産業廃棄物をミキサーにかけて煮詰めたような液体にプカプカ浮かぶ黒いボールを、棒でつつき回して沈めようと頑張る黄ヘルのツインテ。

胸の、『げんばかんとく』と書かれたワッペンを見ながら、命令した方がいいが、一体ここからどうやってかわい女の子なんかを建造するというのか、分からな過ぎて首をかしげる。

怖いような、気になるような……。

と、足元に一匹の妖精さんが、海水の満たされたバケツを持って駆

け寄って来た。

何だ？　と思つてしゃがんで見下ろすと、後頭部に慣れた感触と重みがある。

頭上から、しがみついたツインテの声が降ってくる。

「なまえよぶです」

そう言つて、俺の頬を後ろからしてしてしと叩く。

「名前？　なんの？」

差し出されたバケツに手を添え、後ろを振り返ろうとする。

「きてほしいかんむすです。きこえるよーに」

「あ、ああ……えつと、球磨？」

「こえがちいさい」

ギョツ、と、ツインテがしがみつくと手足に力を込める。

分かつた分かつたつて……なんか照れ臭いなあ……。

「く、球磨！　球磨あ！　聞こえるか？　球磨っ！」

こんなんでイイのか？　と思ひながら、半ばヤケクソになつて叫ぶと、突然、後頭部と手の中のバケツがじんわりと熱を持ち始めた。

驚いて両手に力が入ると同時に、揺れる水面が、こころなし……いや、見間違えでなく、キラキラと不思議な青い光を湛^{たた}え始める。

「お、おおおっ？　おおおおおお……！」

何だかよく分からんが、これでイイのか!?

い、イイですよね!?

なんかシャレンなんないくらい熱くなつて来たんですけどおっ!!?

俺がそこそこの異常事態に軽くビビっていると、俺の頭から飛び降りたツインテが、俺の手からひよいつ、とバケツを取り上げ、ててつ、とプールに向かつて走る。

そして、

「そおい♪」

プールの縁^{へり}から、蒼白く発光した海水(?)をバケツごと豪快に中へ放り込んだ。

ええーっ!?

予想はしてたけど、えええーっ!?

あんまりにも躊躇いの無い荒っぽさに、内心、バケツごとかよ!?と驚いていると、間髪を容れずに、今度はプールそのものが蒼白く発光し始めた。

「う……………わ……………」

思わず、見とれた。

黒い水面にオーロラのようにたなびく、蒼い光。

まるで、水底から天に向かって光が射し込んでいるような、幻想的な光景。

……………綺麗だ。

何故か、異常なハズのその光から、目が離せない。

離しちやいけない。

そんな気がした。

声が聴こえるのだ。

酷く切なく、震える声。

助けを求める声。

しかし、それも一瞬だった。

取り憑かれたように、立ち上る細い光に手を伸ばし掛けた俺は、

「はーいさがってー」

「あぶないよー♪」

「さがったさがったー」

「そーいうのきんしー♪」

「ゆだんもすきもない」

「ええっ!? ちよちよ、ちよつと何だよ!?!」

妖精さん達によつて後ろを向かされ、ズイズイト海プール底から引き離される。

え、ホントに待って!?

よくは分かんないケド、いまメツチャ大事な場面じゃ無かつたつすか!?

俺が戸惑いにたたらを踏んだ瞬間だった。

ゴウツツツツツ
!!!!!!

くらくらと目を回す俺の目の前で、更に状況が動く。

妖精さん達が赤熱するプールの横の床に這いつくばって、何かゴソゴソすると、ガゴツ、という音と共に、コンクリート板が長方形に剥がされ、脇に退かされる。

そしてそこから、ガコン、と鋼鉄のレバーが引き出された。

「七匹の妖精さん達が全員で錆びたレバーに取り付き、「せーのっ♪」の掛け声で、ガシャンッ！ と重そうなレバーを倒した。

同時にコウショウの地面の奥から響いてくる、ゴリゴリゴリゴリ……という、太い鎖の擦れ合うような鈍い音。

何事かと思えば、蒸気の立ち上るプールの脇で、ピー♪ ピー♪ と笛を吹きながら紅白の旗を振るツインテ妖精さんの姿が。

あつけに取られる俺の目の前で、中の液体がすっかり蒸発した長方形のプールの底が、ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……と重々しい音を立ててゆっくりとせり上がって来た。

ピピィー………ピッ！

という、ご機嫌な笛の音と同時に、ゴウン……と底の上昇が停止する。

(は、反応が追いつかない……！)

次々に起こる不思議現象に、スペックの低い脳ミソが拒否反応でも起こしているようだ。

ここ、ただの汚いプールかと思ったら、建造ドックっての、本当だったんだな……と、現実逃避のようにそう思った。

シューシューと煙を出すプールの底には、黒鉄の台座が作られ、その上に、蒼白く発光するボールの様なモノが載って、瞬くように弱々しく明滅している。

「かこめー♪」

「いそげー」

「しあげだー」

「うでがなるぜ」

それぞれの手に金槌やスパナなんかを持った妖精さん達が、待ち構えていたかのようにその塊に突撃した。

カーンツ♪ カーンツ♪

という小気味良い音を響かせて、ゆらゆらと光を揺らす塊が、みるみる内に形を変えて行く。

そして、

「できたー♪」

「やっぱりこうそくけんぞうはらくちんだぜ」

「ほめてー♪」

「いいできばえ」

ものの一分も経たない内に、光る塊はその形を整えられていた。

「……………これは……………」

船…………軍艦だ。

明滅が止まり、ただ静かに蒼白い光を湛える、軍艦…………のミニチュア。

台座の上に、人が一人横たわったくらい長さの軍艦の、白一色の精巧な模型が浮かんでいた。

「コレが……………艦娘？ 球磨なのか……………」

うわ言のように呟く。

気づけば周囲には、どこか静謐な、厳かな空気が満ちていた。

妖精さん達は、如何にも一仕事終えたぜ、みたいな顔で、ヘルメットを脱いで動物柄のタオルで額を拭っている。

「ていとくさん。さいごのしあげです」

ツインテに促され、慌てて発光する軍艦の前に進み出る。

なにがなんだか分からないでいる俺の頭によじ登って、ツインテが言う。

「このこがくまです」

言われて、建造(?)された軍艦のミニチュアを眺める。

細長く、カッコいい船だ。

マストが二本、前に見晴らしの良さそうな艦橋、後ろには一基のクレーン。

真ん中に、先の膨らんだ煙突が三つ。

一つ、二つ…………砲塔が全部で七つ、前に二、両舷に一、後ろに三。

後部砲塔の間には、水上機を載せたカタパルトが一基。

魚雷の発射管は、四基八門。

艦首に菊花、艦尾に旭日旗。

間近で見ると、大きさと重武装とが相まって中々に迫力がある。

コレで『軽』巡洋艦なのか……軍艦ってスゲエ。

………じゃなくて、

「これ、艦娘……」

これ、艦娘じゃ無くない……？

ただの良くできた模型……？

普通でない事は分かる（ふわふわ浮いてるし、光ってるし……）の
だが、どう見ても人形ひとがたじゃない。

戸惑う俺に、頭の上から、ツインテが言った。

「さわって、なまえをよぶです」

訳も分からず、そつと手を伸ばす。

ゴクリと唾を飲み込む。

ぴとつ……と、艦首に手を触れた。

ひんやりとした感触に驚きながら、恐る恐る、名前を呼んでみた。

「……球磨」

……。

……。

………？

別に何も起きな——

パアアアアツ、と、『球磨』が光を放つ。

「うわっ!？」

思わず腕で目を庇った。

妖精さん達が、興奮したようにぴよんぴよん跳ねている。

腕の隙間から、眩い光を放つ球磨がぐにやぐにやと変形するのを見た。

丸くなり、頭が、腕が、足が生えて行く。

軍艦そのままだった球磨が、蒼白い光の中で徐々に人の形に変わっ

て行く。

「……………」

「あ」

「あ」

「あ」

そこに、黒い光が混ざる。

髪の毛の長い、小柄な女の子の形に成りつつあった球磨の内側から、灰冥ほのぐらい光が漏れだし、身体にまとわりついて行く。

薄く広がるように身体を這う光が、衣服のように変形して行くのをただ呆けたように眺める。

やがて光が止むと、目の前、ドツクの上には、真つ白まじろい長い髪と蒼あざ白い肌の、中学生くらいの女の子が、ふわり、と浮かんでていた。

なだらかな肢体を包む真つ黒いセーラー服に、同色のショートパンツ。

襟もとのタイまで真つ黒だ。

足の艤装——艦娘の装備をそう言うらしい——は、連装魚雷発射管まで真つ黒、背囊はいのう型の艤装もまた、マスト、艦橋、カタパルト、煙突、単装砲に至るまでこれまた黒一色で、内側から溢れ出すように蒼い光が零れている。

その、ツインテ妖精さんに良く似た、真つ黒まじろづくめの白い少女は、よく見るとうわ言のように口を動かしていた。

「……………ない……………めない……………だ、…ずめない……………」

「……………」

何か、うなされているようだ。

建造された白い艦娘が、ゆっくりとドツクの上に降りてくる。

と、台座の上に足を着いた瞬間、フラツ、とグラついた。

「あつ、ぶなつ——」

「しず…めない……、…マは……まだ、沈めない……………っ！」

しかし、白い艦娘は、大きく足を開き、ガリッ！ と床の破片を飛ばしながら、腕をだらんと垂らして踏ん張った。

スツ…………と、まぶた瞼を開く。

蒼白い光。

「球磨は……………球磨は、まだ……………こんなトコロで……………っ！」

蒼い目が、真っ直ぐに俺を貫く。

強く、燃えるような壮絶な意志のこもった、瞳。

ピヨコンっ、と、少女の頭から白く長いアホ毛が跳ねた。

ツインテ以外の妖精さん達は、遠く柱の陰からこちらの様子を窺っている。

「ていとくさん……………」

「ふぁいと♪」

「おいしいことをした」

「わすれないです」

アイツら、いつの間に……………!?

素早く背後に手を伸ばし、取り外した単装砲を真っ直ぐに俺に向け、両手でがっちり構える、白い艦娘……………球磨？

「え、ちよっ……………」

「沈めないんだクマ……………っ!!!」

かわいらしくも迫力ある声で吠えた球磨(?)が、固まって動けない俺の脳天目掛けて、引き金を引いた。

(えっ、ウソっ、死っ……………!!)

ガチンッ!

しかし、砲口から砲弾が飛び出す事は無かった。

弾切れ……………というか、装填されていなかったようだ。

凍りつく俺の目の前で、俺を仕留め損なった球磨(?)は、顔をしかめ、ぶらん、と腕を下ろした。

ガチャンッ、と、取り落とした単装砲が床に転がる。

フツ、と、球磨(?)の瞳に燃えていた蒼い炎が消え、力無く瞼が落ちる。

そして、糸が切れたように体勢を崩すと、フラッ……………と身体が傾いて行く。

ゲシツ、と、ツインテに後頭部を蹴られる。

「アタっ……ととっ！」

思わず前につんのめり、倒れ込んできた球磨（？）を抱き締めるように受け止めた。

身体に感じる冷たさと、柔らかい感触と、小さな重み。

「さるべ……けんぞうはせいこうです」

「ちよ、ちよつと、えつと……球磨？ 球磨さんですか……!?!」

初めて感じる、女の子の頼りない感触と香りにドギマギしていると、胸元から、すう……という、静かな寝息が聞こえて来る。

恐々と見下ろして見ると、球磨、であろう、穏やかな顔で眠る女の子の蒼白い顔に赤みが差し、真っ白だった髪の方から、明るいブラウンに染まってゆく。

それだけでなく、真っ黒だったセーラー服は白く、タイは赤く、艷装は鋼鉄の灰色に色が変わり、球磨の身体がだんだんと温かくなって行く。

アホ毛の先までが茶色く染まった時には、すっかり血色の良くなった小柄な女の子が、アホ毛を揺らしながらスースーと気持ち良さそうに俺の身体に寄りかかっていた。

えつと……ど、どうしよう……?」

「よかったね」

「いちじはどうなることかと」

「しんじてたぜ」

「さすがていとくさん」

「あこがれちやうな」

「ちゅっちゅっ♪」

妖精さん達がわらわらと戻ってきた。

混乱の極みにあった俺に、頭の上からツインテ妖精さんの声が降ってくる。

「とりあえず、べつどにもってきましよう」

そう言って、鎮守府庁舎の廃墟の方を指差した。

「お、おう……」

いっばい いっばいの俺は、おっかなびつくり、建造ほやほやの球磨を抱えて、賑やかな妖精さん達に囲まれながらコウシヨウの出口に向かって歩いた。

ある提督の追懐

コンコンコン、と、重い櫛かじの扉を叩く、はつきりとしたノックの音。
「お入り下さい」

秘書が開いた扉から、濃紺の第一種軍装に引き締まった身を包んだ
壮年の男が入室し、執務机の脇に立つ私に向かって、お手本のような
敬礼をして見せた。

「閣下」

「うん、話は聞いているよ……掛けたまえ」

返礼し、見るからに固い表情をした男に、楽にするようソファを勧
める。

デスクからオフライン端末と厚い封筒を持ち上げ、自身も対面のソ
ファに腰を沈めながら、男の顔色を伺う。

几帳面なこの男らしくもない事に、肩章はやや曲がり、袖口にも縫よ
れが見える。

随分と憔悴しているようだ。

秘書の入れるコーヒーの香りを吸い込みながら、今日は長くなる、
そう思った。

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

大本営。

深海棲艦と呼称する未知の敵性存在による、世界規模の制海権及
び、一部制空権の喪失と、大洋の島々及び一部沿岸部への侵略行動。

これに対抗するため、艦娘、妖精さん、提督適正者の登場と対話、議
会での200時間に及ぶ議論と世界的世論の変化を受けて、防衛省か
ら独立する事となった海軍省。

ここは東京都某所、海軍省庁舎内に施設された、今世界防衛大戦の
大本営、その長官たる遠山元帥の執務室。

敵補給線の分断と、北マリアナ海域の奪還及びそれに伴う防衛線の押し上げ。

今回の作戦は、本土の鹿屋^{かのや}、岩川基地と、最前線のパラオ、トラツク泊地の四鎮守府が連携した重要な作戦だった。

数ヶ月に及ぶ危険な共同哨戒作戦^{しやうかい}の末、敵補給基地が北マリアナ諸島に存在する事を突き止めたパラオ・トラツク両鎮守府提督は、史実になぞらえてサイパン島、テニアン島の補給基地を攻撃、それを足掛かりに北マリアナ諸島の深海棲艦基地を撃滅する事に依って、太平洋に於ける深海棲艦の攻撃拠点を奪い、弧を描くように大きく伸びた防衛線で囲い込んだ太平洋の西半分を奪還する一大作戦を立案、実行した。

深海棲艦は、過去に囚われている。

それは、ここ何年かの戦いを通じて確認された、確かな事実だ。彼女らはかつての凄惨な戦いの記憶に基づいて、歴史上の悲劇をなぞられる様に侵略を続けている。

従って、大本営は嘗て^{かつ}の大戦の記録に基づいた対策を立てる事に依って、対深海棲艦の戦いを非常に効果的に推移させてきた。

今回の作戦もまた、史実におけるサイパン島、テニアン島の戦いに学び、勝利した米軍の作戦に、今大本営が投入できる全戦力の補強を加えた作戦と相成っていた。

則ち^{すなわ}、本土の鹿屋、岩川両鎮守府の大戦力に依って北マリアナ諸島の北部に圧力を掛け、戦力を薄く引き延ばし、それをパラオ泊地戦力が分断、補給路、指令系統に打撃と混乱を与えた所で、最前線の芳崎大將率いるトラツク泊地戦力に依ってサイパン島南西部に攻撃、制圧する計画であった。

果たして、作戦はほぼ予想通りの推移を見せた。

まず、入念な準備の後、最年少にして唯一の女性提督でもある鹿屋の柏木中將^{かしわぎ}と、後方出身の古参提督である岩川の田井中大將^{たいなか}両提督指揮下の機動戦力に依って、フィリピン海沖の深海勢力に大攻勢を掛ける。

類い稀なる提督適正の発現によって、異例づくめの三十四才の若さで

全てが読まれ、そして利用されていた事は明白であった。

フィリピン沖で戦端が開かれた時点で、北太平洋に点在する深海戦力が北マリアナ諸島のサイパン、テニアン以外の各島に進軍、潜伏。マリアナ戦力が殆ど全ての物資を持ってフィリピン沖に向かうのを見送り、喜び勇んで空白のサイパンを攻撃、上陸するトラック攻撃部隊を静かに包囲。

油断したサイパン島戦力に包囲攻撃を仕掛けると同時に、トラック東の深海棲艦基地から十分な戦力を投入、手薄のトラック泊地に飽和攻撃を実行したのだった。

『我々の手の内が読まれている』

最低限の防衛戦力としてトラックに残っていた艦娘達の必死の抗戦と、トラック泊地を放棄する事を即断した甲斐もあって、芳崎大將達は最小の犠牲でラバウルに撤退する事が出来たのだった。

最小の犠牲。

この戦いで、防衛に当たった五十鈴、島風が大破。

全力で後退する泊地人員と艦娘達を、殿に立って必死に守り、弾薬が尽きてなお敵陣を縦横無尽に走り回り、身体を盾にして雨の様な砲撃を受け続け、最後には其々敵主力艦に決死の体当たりを敢行、敵を巻き添えにしての凄絶な轟沈を遂げた。

トラックのムードメーカーであった両艦娘の轟沈を受けて暗く沈む鎮守府に届いたのは、サイパン島攻撃に投入したトラック最高戦力である第一艦隊の、パラオへの壊走さながらの全員生還の知らせ。

……そしてその撤退を助ける為に捨て身の覚悟で戦った第二艦隊の壊滅と、天龍、球磨、川内、夕立の轟沈報告であった。

それと時を同じくして、北マリアナ諸島深海勢力の戦力分断に従事していたパラオの南郷中将もまた、それまで弱々しい抵抗しか見せず、に敗走していた敵補給戦力の突然の反転大攻勢に、少なくない犠牲を出した。

何せフィリピン沖海戦への補給部隊だと思っていた物が、実際は北マリアナ諸島の戦闘資源をほぼ全て保持していたのだ。

機動力に特化した強襲部隊では、犠牲を最小限にして逃げ帰るのが

やっとの事であった。

こうして、四鎮守府の全戦力を投入した一大作戦は、少くない資源の損失、トラック泊地及びその保有戦力の大半の喪失と戦線の後退、前線基地であるパラオ戦力の損耗という、悪夢の様な結果を残して終了したのだった。

「……………この敗戦は、偏ひとえに私の思考停止が招いた物です」

「我々の思考停止だ、芳崎提督。誰も、深海棲艦らの変化を予想出来なかった。作戦も、正式な決議を通った物だ。君一人が責任を感じる物では無いよ」

「……………」

むつつりと黙り込んでやや俯いた芳崎君は、何時もより幾分か小さく、老け込んで見えた。

「……………私は」

絞り出す様に、芳崎君が震える声で呟いた。

目線の先には、テーブルの上の封筒、その口から覗く艦娘の登録証があった。

球磨型軽巡洋艦・球磨。

その眠たげな顔写真の下には、彼女の所属、戦歴、趣味、嗜好に至るまでが事細やかに記されていた。

その末尾。

『サイパン島の戦いに於て、友軍艦隊を守護し徹底抗戦。敵魚雷攻撃数十を以て大破、轟沈す。』

「私は……………自分が、情けない」

そう言った芳崎君に、私から掛けられる言葉は何も無かった。

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

深海棲艦は、歴史から学び始めている。

先の作戦の失敗を受けて、それは最早疑い様のない事実だった。

彼女らは、先の悲惨な戦争をなぞらえるだけでは飽きたらず、そうならなかった歴史にまで、片っ端から戦争を吹っ掛けてきているのだ。

『深海棲艦は、惨たらしい泥沼の戦争をこそ、望んでいるのかも知れない』

私が元帥の執務室を退室する直前、遠山元帥はそう仰られた。
それが真実であるならば――

(……なんと救いの無い事だ)

私はシガレットケースから葉巻を一本取り出し、吸い口を切って火を点けたまま、暫く口に咥える気が起きないでいた。

それは最早、戦争の為の戦争だ。

決して終わることの無い恐怖と痛みと憎しみ、そして悲しみの連鎖。

ただ無為にお互いの血を流し続けた先に、一体何が待っていると言
うのか？

(深海棲艦を根絶やしにするしか、この戦いの終わりは、無いんだろう
か？ 何処から来たかも分からない、彼女らの絶滅でしか……)

灰皿に置いた葉巻の、燻る紫煙を眺めながら、嘗て一度だけ相対し
た『敵』の言葉を思い出す。

『ドコマデモ……沈ンデ行ケ………冷タク……深イ………
水底マデ………！』

深海棲艦には、人語を解する者がいる。

大本営会議の出席者しか知らない、最大級の極秘事項だ。

(このままでは遠からず、世界は水底に沈んでしまうのかも知れない。
冷たく深い、憎しみの水底へと………)

漸く、葉巻を口元に運び、バニラの香りのする煙を軽く吹かす。

これが艦娘達にも補佐官達にも不評で、鎮守府では肩身の狭い思
いをしていた。

「………駄目だな。矢張り私に詩人の才能等無い様だ」

彼女らを失って、些か神経質に成り過ぎていると自覚する。

………そう言えば、球磨君は特に葉巻が嫌いだった。

司令室で一度でも吹かした日には、決して部屋に近付かなかったも
のだ。

(私だけの責任では無い、か……)

天龍、球磨、五十鈴、川内、夕立、島風。

彼女らとは……いや、鎮守府にいた、全ての艦娘達ともか。

酷く年の離れた上官と部下、として、一定の敬意と信頼は得られていたと思う。

しかし、本当の意味で深く信頼し合っていたかと言えば……お互いに、何処か一步踏み込めない、遠慮や余所余所しさの様な物があつた様に思える。

いや、確かにそうだったろう。

(もし……もしも、もっと彼女達の事を深く理解しようとしていれば、違つた結果もあつたのだろうか?)
詮の無い事だ。

それは重々承知している。

しかし――

言葉を喋る、人形の深海棲艦。

あの、憎しみと悲しみに満ちた目と、震える声を思い出しながら、どうしようも無く、考えてしまうのだ。

深海棲艦が世界中で猛威をふるい始めてから数年。

未だ、民間の被害、ゼロ。

彼女らは、通商を破壊しても、決して一般市民を傷付けない。

船を沈め、飛行機を落としても、武力を持たない者は必ず命を助け、陸に戻す。

世間が、世界的な戦争の中で、表面上は至って平和に過ごさせている理由だ。

心の中で、彼女らに問い掛ける。

君達は一体、何の為に産まれて来たのか、と。

さらばツインテ

沈んでゆく。

沈んでゆく。

沈んでゆく――

身体感覚が、無い。

あんなに沢山の砲撃と、爆撃と、機銃と、魚雷を受けたのだ。ひよっとしたらもう、身体が無いのかもしれない。

ただ、寒い。

ありもしない身体が、凍りつくように冷えてゆく。

(第一艦隊のみんなは、ちゃんと……逃げられたクマ……?)

分からない。

自分は、一番最初に沈んでしまったから。

でもお陰で、大事な仲間が沈むのを、見ないで済んだ。

………。

光が遠のいてゆく。

もう、海面の砲火は見えない。

音も、聞こえない。

長門と伊勢は、ちゃんと撤退出来ただろうか。

蒼龍と赤城は、あの包囲を突破できただろうか。

沈みかけの那珂を曳航した神通は、

満身創痍の天龍は、

戦艦に突っ込んだ川内は、

曙は、吹雪は、夕立は――

みんな、上手に逃げられただろうか……?

(あと……ちよつとだけ……もう、一隻だけ……でも……
やっつけたかったクマ……)

沈んでゆく。

(……多摩……北上……)

冥^{くら}く、冷たい、海の底まで。

(……大井……木曾……)

沈んでゆく。

(……お姉、ちゃんは……)

沈んでゆく。

(……まだ……)

沈んでゆく——

(……沈みたく、ないクマ……!)

沈んで——

シズ——

「おしちゃんを助けて」

「ぜったいいたいよわたしみてたもん」

「そうなの？」

「みてなかったからもういつかい」

「もういつかいー♪」

「するかあ！ つくう……………お、おい、球磨……………球磨ちゃん？ だよ

ね？ どう、気分は……………？」

「……………最悪クマ」

そう言っつて、頭の辺りでケガの様子を確かめている妖精さんを鬱陶しそうに払いのけて、ゆつくりと上体を起こす球磨。

頭をさすりながら、眠そうな目で、周囲の妖精さんを見て、掛けられたバナナの葉っぱいモノをウロンな目でつまみ上げ、最後に俺の古びた軍服に目を留めた。

一瞬の静寂。

次の瞬間、文字通りハツとしたように目を見開いた球磨ちゃんが、すごい勢いで俺に掴み掛かった。

「近いッ!？」

「どっ、どうなったクマッ!? 第一艦隊は……………、天龍達は!? みんな無事クマッ!？」

「え!?! な、なに!?! どういう事?！」

本当に、建造されて早々どうしたんだコイツ!?

あれか? 軍艦だった時の記憶ってヤツか?

後、クマッて語尾、それマジなんか!?

なおも興奮した様子の子の球磨が、キョロキョロと周囲に視線を走らせる。

「ここは……………トラック……………じゃない、パラオ? どこの鎮守府クマ!？」

「お、おう……………ここは……………あー……………」

チラッ、と妖精さん達を見る。

「わ♪」

「すー」

「れ!」

「なー♪」

「コホン……わすれな鎮守府だ。あー、ようこそ球磨ちゃん？ 俺が提督の——」

「ワスレナ鎮守府クマ……？ 聞いた事ないクマ。どこの鎮守府クマ？」

俺が知りたい。

「きたまりあなです」

「うえのほー」

「はずれのところです」

「えっ!? 初耳っ！ 俺それ初めて聞いたんだけど!？」

「きかれた？」

「いってなかったです？」

「どこでもいいのあなたがいれば」

「きゃー♪」

おのれコヤツら……そしてどこだよ北マリアナ諸島。

太平洋の西の方だったか？

もう、語感からして明らかに日本じゃねえ。

このツインテ、一体俺をどこに連れてきたのだ。

「クマッ!? 北マリアナクマ!? そんなハズないクマ！ 北マリアナ

に鎮守府は………し、深海棲艦の基地クマッ!？」

なんだか落ち着きのない艦娘だなあ。

そのぴよんぴよん跳ねてるアホ毛はどんな仕組みなんだ？

語尾といい、マンガみてーなヤツが来ちやつたな……胸、ちっちゃ

いし……。

まんまと妖精さんどもに嵌められた。

何が不思議ちゃん系お嬢様キャラ巨乳だよ……クマーってなんだ

よ……。

……美少女だけど。

美少女だけど！

……おっぱいって、ちっちゃくても柔らかいんだな……い、いや、俺

は貧乳なんかになびかんど!？」

その程度の誘惑に俺の信仰は揺らがないんだからねっ!？」

「あー……その、落ち着いて——」

「これが落ち着いてられるかクマーっ！」

うおっ、っ！ と頭を抱えてブンブンと髪を振り回す球磨ちゃん。
ん。

これ大丈夫？ やっぱり材料が良くなかったんじゃない？

あ、髪、イイ匂い……。

「てい」

「クマッ、ッ!？」

ピコンっ！ と、ツインテ妖精さんが、異物混入でご乱心状態の球磨ちゃんに笑っちゃうくらいデカイピコピコハンマーをお見舞いした。

「おちつけ」

「クマッ、クマッ!？ や、やめるクマーっ！」

ピコッ♪ ピコッ♪ と割と遠慮のないピコピコハンマーが球磨を襲う。

そのこれ見よがしな『16とん』の文字はなんだ。

豚っぽいイラスト(ぶっつて描いてあるから多分そう)からして、豚十六匹分かな？

連続するマヌケな音に、球磨が慌てて妖精さんを遠退けようと腕を振ると、ツインテは身軽にそれをかわして素早く俺の陰に隠れた。

「ひしよがかってに」

「余りにも無理がある！ その、ごめんな、球磨ちゃん、妖精さんのした事だから……」

「それはやった方が言うセリフじゃないクマ……お前誰クマ？ 補佐官クマ？ 状況を知りたいクマ……ここの提督はどこクマ？」

あと軍服はちゃんと洗った方がいいクマ、と、顔をしかめて言う球磨ちゃん。

さつき袖を通したばかりなんだぜコレ。

俺だって洗いたい。

それはそれとして。

「うむ……俺がその提督だ」

「? ……冗談はよすクマ。球磨は早く仲間に合流——」

「ほんとです」

「このひとがていとくさんです」

「すごいぞー」

「かつこいいぞー♪」

「やらんぞー」

「クマツ!？」

「ええい、止めんか鬱陶しい! ……あの、信じらんないかも知れないけど、本当に俺が提督なんだ。ゴメンな、なんかその、妖精さん達が滅茶苦茶やったせいで混乱しちゃってるかも知れないけど……」

産業廃棄物とかたこ焼きとかバーナーとか。

あれがどうしたらこんなイイ匂いの美少女になるんだ。

おっぱい小さいけど。

俺がきやいきやい纏わりついてくる妖精さん達をぞんざいに払い落としながらそう言うのと、球磨ちゃんはなぜか動揺した様子で、絞り出すように言った。

「い、いや……妖精さんはそんなウソつかないクマ……信じられないくらいなつかれてるし……じゃ、じゃあおま………あなたが本当にココの提督クマ?」

チラツ、と俺の肩の辺りを見て、しかも大将クマツ!?! と驚いている球磨ちゃん。

いや、妖精さんはそれくらいの冗談なら言うぞ?!

まあ信用してくれるんならイイけどさ……あとこの服の持ち主、そんなに偉かったんだ。

「そうなのだ」

「えらいのだ」

「すごいのだ」

「ずがたかいぞー♪」

なぜか凄くエラそうにふんぞり返っている妖精さん達を脇に転がして、球磨ちゃんに向き直って言う。

「だからそう言ってるじゃん。俺がその提督。あー、その、何も無いト

コだけど、ヨロシクね、く、球磨ちゃん？」

改めて自己紹介する。

緊張で若干噛んだが、一応笑顔は出来てるハズだ。

伊達にコンビニバイトで鍛えていないぞ。

近所の女子高生達にも『ニヤ夫』というアダ名で親しまれていたのだ。

チクシヨウ。

「よ、妖精さんにすごいコトしてるクマ……球磨型軽巡洋艦、1番艦の球磨だクマ。よろしくクマ……こんな若い提督、初めてクマ」

お、おお……嫌そうな顔もせず、ちゃんと挨拶を返してくれた。

これが噂の提督補正か……すごい艦娘、提督最高じゃん。

俺は当初の想像通りの好感触にテンションを上げながら、続けて言う。

「い、いやー、実は俺、初めての建造でさあ……正直不安だったんだけど、ちゃんと成功したみたいで良かったよ！　く、球磨ちゃんだったけ？　カロリーメイト食う？」

本当に、あの暗黒プールからこんなかわいい子が出てくるなんて、いまだにちよつと信じられんわ。

おっぱいは小さいケド。

しかし、俺がそう言って軽くキョドリながらリュックをあさっていると、球磨ちゃんが驚いたような大声を上げた。

「け、建造……？　ちよ、ちよつと待つクマ！　今、建造って言ったクマ!？」

え、引つ掛かるトコそこ？

なんか妙に焦った様子の子の球磨ちゃんに、改めて言う。

「そりゃ、そうだけど……今さっき、下のプール……ゴホッ、ちよつとだけ古い……ゲホッ、び、う、いんて〜じ感溢れる自慢の建造ドックで、厳選した素材によって建造された、我がわすれな鎮守府初めての艦娘。それがキミなのだ」

う、うん、嘘は言っていない嘘は。

余計なディテールをハブいただけだ。

しかし、球磨ちゃんは俺の台詞の違和感でも感じ取ったのか、突然ワナワナと震え始めた。

「け、建造……建……造……」

お、おいどうするんだ妖精さん！

お前らがちよつとお茶目なアレンジ建造したせいで球磨ちゃんが怒ってるぞ!!

「そんなハズないクマ……球磨が建造されたのは三年前、呉の鎮守府クマ……そのあと、配置転換でトラックに送られて……それで、それで……」

……おや？

なんか様子がおかしい。

建造されたのが三年前？

うん十年前の、大日本帝国時代じゃ無くて？

妖精さん達を見る。

プイツ、と顔を逸らして口笛モドキを吹き始めるツインテ。

コイツ……！

気づけば、震える球磨ちゃんの視点の合わない目が、蒼い光をチラつかせ始めた。

ふわっ……と広がる髪の毛、毛先が白い。

「球磨、は……」

俺を見る球磨。

「……沈んだ、クマ」

ブラウンだった瞳が、真っ蒼になっている。

髪は半程^{なか}まで真っ白だ。

あ、これ良く分かんないケドスツゴい怒ってるらっしやる？
って言うか……！

「おい……ツインテ」

「ぎくり」

一応、怒られるという事は分かったらしい。

見苦しくも逃走を図ったツインテの軽うぐい頭を鷲掴みにし、ギリギリと持ち上げる。

何がきくりだ、擬音を口に出すな。

「お前……どういう事だ？ ツインテお前たしか、建造って言ったよな？」

「いったかな？」

「ああ言った。完全に言った」

顔の前に持ち上げて至近距離から問い詰めると、分かりやすく目線を泳がせて他の妖精さん達に助けを求めるアホツインテ。

馬鹿だなあ、お前のオトモダチは薄情な事にとつくに逃げ出してるよ？

はるか後方で柱の陰にひとかたまりになった妖精さん達が、何事かを口走っている。

「おまえのしはむだにしない……！」

「さらばついで」

「きみがいけないのだ」

「ひとりだけあだなもらってずるい」

「わたしもおこられたいぞー」

「ぞー♪」

仲間の裏切りに衝撃を受けたような顔で「がーん」と言っているツインテを、更に顔に近づける。

「なあ、説明………してくれるよな？」

……おい、顔赤らめんな。

球磨ちゃんの変鬱

最近ちよつと調子に乗った言動の目立つツインテの口から語られたのは、中々に衝撃の事実だった。

「さ、サルベージ？」

「そ、そんなっ！ そんなの聞いた事ないクマ！」
なんと。

先程の怪しいコトこの上ない建造は、普通の新規建造では無くて、サルベージ、と言うものだったらしい。

なんでも、一度沈んだ艦ふねの魂が、海の底で淀よどんで、深海棲艦になっ
てしまう前に引き上げ、新しい身体を与える建造方法らしい。

「ぼでいをけんぞうしたのはうそじゃないです」

頭を俺に驚掴みにされたまま、まだ苦しい言い逃れを試みるツイン
テ。

お前俺がちよつと感心してたら……いっつもそうだなお前！

ちよつとくらい最後まで感心させてくれよ！

「じゃあ……それじゃあ、球磨は本当に、一度は沈んだクマね……確か
に、覚えてるクマ。と言うか——」

いつの間にか白っぽくなった髪が元の色に戻っている球磨ちゃん
が、何かに気づいたように、バツ、と絶賛吊り下げられ中のツインテ
を指差した。

「そっ、その妖精さん、なんか見覚えがあるクマっ！ 海の底から、な、
なんだか温あったかい手に引き上げられるような感覚のとき、その子みたい
な白っぽい妖精さん達に下から押し上げられたような気がするク
マっ！ なんか深海棲艦みたいな見た目してたから、良く覚えてるク
マーっ！」

ワナワナと震えながら、長くいアホ毛を荒ぶらせる球磨ちゃん。

「……………との証言があるわけだけど。お前、まだなんか黙ってるコ
トがあるんじゃないか？」

そう言つて、じいー……つと睨んでみると、ツインテはしらばつくれるような顔で目を反らす。

その オメガ ω みたいな口やめい。

……そう言えば。

「……なあ、ツインテ。お前、建造するとき他にも候補を上げてたな。あの子達もひよつとして……」

そう言つて、チラツと球磨ちゃんを見る。

建造直後の取り乱し方といい、球磨ちゃんのコレまでの言動といい、なんかスゲエ嫌あな予感がする。

具体的に言う……この球磨つて艦娘、最近どつかの戦いで仲間と一緒に沈んだとか、そういう……？

球磨ちゃんは、真剣な顔でツインテ妖精を見つめていた。

「……………詳しく聞かせるクマ」

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

セーラー妖精さんが持ってきてくれた海水入りのバケツに片手を突っ込んで、ツインテ妖精さんが一人ずつ名前を上げてゆく。

新しい名前が告げられる度に、球磨ちゃんの顔色は目に見えて悪くなつていった。

「いすず……………しまかぜ」

「そんなに、たくさん……………何が……………いったい何があつたクマ……………五十鈴も島風も、トラツクにいたはずクマ……………っ！」

ツインテ妖精が、これでぜんぶです、と言つたとたん、崩れるようにうつむいた球磨ちゃん。

髪も肌もすっかり白くなつてしまい、セーラー服は真っ黒だ。

白球磨ちゃん……………とか言う空気じゃないつてコトくらい、コミュ障の俺でも分かる。

しばらくはそつとしいた方がイイかな？ イイよね？

俺はそつと立ち上がり、絶対邪魔するであろう妖精さん達をまとめ抱え、「お、俺、ちよつとお茶入れてくるわ……………」とうなだれる球磨

ちゃんに背を向け――

「待つクマ」

「ふげっ!」

ズボンの裾を両手で掴まれ、地面に激突した。

妖精さん達は素早く腕の中から飛び降りて無事だ。

お前ら……。

「な……なんスカ、球磨さん……?」

「色々……聞きだい事はあるクマ……でも、一番最初いちばんに……提督

督にお、お願いがあるクマ……!」

うわあ、顔ぐっちゃぐちゃ……涙と鼻水でエライコトに……。

俺はたじたじになりながら、仕方なくリュックからポケットティッシュ

シュを取り出し、泣きべそ球磨ちゃんに渡してやる。

なんかちよつと湿ってるけどその様子なら関係ないだろ。

球磨ちゃんは、「あゝりがどクマ……」と言って、一袋使いきる勢いで鼻をかみ、涙を拭ってゆく。

あー……あー……ティッシュもあんまり持ってきてないから……

あー……。

見れば、ひとしきり涙を流して多少は落ち着いたようだ。

目元も鼻もまだ赤く、潤んではいるが、服の色や顔色は戻った。

髪はシュンとしたアホ毛までまだ白い……なんかお湯につけると

色が変わるオモチャみたいだな艦娘って。

フシギ。

「グスツ………みつともない所を見せたクマ……」

「ああ……いや、うん、ゴメンねなんか……」

「………? なんて提督が謝るクマ?」

いや、目の前で突然美少女にガン泣きさされてみるよ、超困る。

俺がそんなイケメン的経験値積める人生送ってそうに見えるか?

見えねえよな?

うるせえ!

「へたれ」

「ちきん」

「ちきん」

「どーてー♪」

俺が最後の一匹を思い切り外に放り投げていると、目元をゴシゴシと拭った球磨ちゃんが真剣な表情で見上げてきた。

自然と背筋が伸びる。

「む、ムシのいい話なのは分かっているクマ……でも、もし……もし沈んだ仲間も、球磨みたいに助けられるなら……提督さん、お願いだクマ！ 何でもするクマ！ 資材も、絶対いつか返すクマ！ だから……だからどうか、他の子達もサルベージして欲しいクマっ!!」

叫ぶように、そう言い切った。

蒼い炎の燃える瞳には、悲壮なまでの覚悟が見てとれる。

……………それだけに。

「お願いクマっ!! お願いくっ……マ………どうしたクマ？ な、なんかスゴい汗クマよ……？」

「……言いくいんだけど……」

「……っ！ わ、分かっているクマ！ 建造に掛かる莫大な資材も、手間も、時間も、費用も……でもっ……！」

「あ、ああ、うん。いや、俺もね？ そうしてあげたいのは山々なんだけど……その、し、資材が……」

冷や汗をだらだら流しながら、しどろもどろに事情を説明しようとする俺に、球磨ちゃんが掴みかからんばかりに迫ってくる。

「く、球磨が集めるクマ！ 球磨の所の提督も……他の鎮守府も、絶対に説得するクマ！ 危険な遠征だっていくらでもこなして見せるクマっ!! 補給さえして貰えれば、今直ぐにだって……っ！」

アカン。

ギブ。

無理、俺にはムリ、言えない。

こ、こんな必死に仲間のために頑張ろうとしてる美少女に、そんな残酷な事実を突きつけるなんて……!!

チラツ、と、妖精さんズを見る。

「いいはなしだなー」

「なけるです」

「つづきがきになる」

「えいがかけていい」

なんかミニサイズのミカン箱に腰かけて、シマシマの紙コップからポリポリとお菓子を食べつつ目元をハンカチで拭っていた。

完全に見の構えだ。

つ、使えん……と言うか、勝手に柿ピー出したなコイツら……！
いつの間にか頭の定位置に収まっているツインテのほっぺをつつ
いてみる。

ぷひゅー♪ と空気を吹き出す。

うん、お前には期待してなかったよ。

腹を決める。

「……球磨ちゃん？」

「！ は、はいクマツ！」

「無いです」

はつきりとそう言う。

「な、無い……？ だ、だから、そこをなんと——」

「ホントに何にも無いんです」

気分は、『無』だ。

コンビニの夜勤で、半袖なのにイカした長袖模様が見える、明らかに不機嫌なイカついドライバーさんに、「貴方のおっしやるタバコの銘柄、最近取り扱いをやめました♡」、と告げる時がごとき、完全なる無我の境地。

俺の、およそ感情というものの見られないコンビニスマイルに、球磨ちゃんも何か違和感を感じたらしい。

興奮で赤らんだ顔に、やや戸惑いの色が混じる。

「な、何も……クマ……？」

「本当に何にも無いんです」

重ねて、淡々と告げる。

「球磨ちゃんの建造に、なけなしの資材を全部使っちゃいました。もう、燃料の一滴すら残ってないです」

一秒。

二秒。

俺の言葉を理解するのに時間がかかっているらしい。

興奮で赤く紅潮していた顔は次第に白くなり、次にだんだん青くなって、最後にまた赤くなった。

せっかく戻ってきた髪はまたも真っ白である。

あ、なんかワナワナ震え始めた。

「……………ク」

「く?」

俺は次に何が起こるかを大体察しつつ、コテツ、と首をかしげた。妖精さんズが一齐に耳をふさぐ。

「クマ~~~~~ツツツ!!」

ガランとしたワスレナ鎮守府に、艦娘の超かわいい悲鳴が響き渡った。

@@@@@@

「自称って、どういうことクマっ!!」

「ハイ。スミマセン」

俺は司令室の冷たい床に正座させられていた。

妖精さんズも連帯責任だ。

横一列に行儀良く並んで、短い足で一緒に正座させている。

あの後、それはもう凄い勢いで掴みかかってきた球磨ちゃんの圧力に負けて、俺はこの鎮守府（笑）で自称提督を始めるに至った経緯いきざつを洗いざらい吐かされていた。

だって球磨ちゃん、ちから力ツエーんだもの。

やっぱコイツ球磨じゃなくて熊だよ白熊だ。

艦娘怖い。

「い、いくら平和のために居ても立ってもいられなかったとは言え……艦娘の護衛も付けずに一人で海に出て、漂流して、漂着した無人島で勝手に鎮守府開発って……!!」

「おお……改めて他人の口から聞くと、凄まじいな。」

「そんな考え無しのバカが本当に実在するのだろうか？」

「はい、私です。」

「さすがにハーレム云々については言っていない。」

「俺の溢れる正義感の暴走という事にしておいた。」

「すつとこツインテは妖精さんハーレムを作るためとかややこしいウソを口走りやがっていたので、物理的に口をふさいである。」

「まあ、ミカン箱の上でワナワナと震えながら湯気を吹いている球磨ちゃんを見るに、あんまり意味はなさそうだけどな！」

「やつ、やるコトが無茶苦茶過ぎるクマっ!!」

「おっしやる通りでゴザイマス」

「ビシッ! と突きつけられた指（とアホ毛）に、俺はイタズラがバレた小学生のごとき従順さで素直に頭を垂れる。」

「ほらっ、妖精さん達も頭を下げなさい！」

「ちっ、はんせいしてまーす」

「いっしょうやりませーん」

「あ、きいてなかった」

「なんもかんもせいじがわるい」

「せきにんのいったんはくまにある」

「あゝあゝっ!？」

「こっ、コラッ!? す、すみません、ウチの子が失礼な事を……ちや、ちやんと言っつて聞かせますから……!!」

「反省ごっこに飽きたのか、今度は非行に走る若者みたいな反抗を始めた妖精さん達を、慌てて後ろに隠す。」

「サン格拉斯なんか出して、今時そんな『けんかじょうとう』ハチマキ流行んねーよ……あ、コラッ、妖精さんがそんな下品なハンドサインしちゃダメっ！」

「お前が一番問題クマ、この提督モドキ」

「はあうっ!? ぐ、ゴメンナサっ!」

さりげなくすべての罪を妖精さん達に着せようとした俺に、球磨ちゃんの鼻水ティツシユが、ベチャツ、と直撃する。

スナツプが効いた良い投擲だ。

きちやない……。

「はあ……球磨に謝る事じゃないクマ。その無茶のお陰でこうして助かった訳だし……でも、一步間違えば提督——モドキも死んでたクマ。どんな義憤に駆られたのかわらんクマが、未来ある若いミソラで勇気と蛮勇を履き違えちゃダメだクマ。球磨達はお前達みたいな人間の未来のために命懸けで戦ってるんだクマ。そこんところもって考えて欲しいクマ」

「……ぐう」

「……………なんだクマその返事」

「ぐうの音も出ない、なんて……」

「しつかり出てるクマ! このスットコ提督!」

ペシッ! と、今度は胸元に使い終わったポケットティツシユを投げつけられる。

若いミソラって……どう見たって中学生位の女の子にマジ説教されてしまった。

全く反論の余地が見当たらない。

こりや、ハーレムの為に提督目指しましたなんて言える雰囲気じゃねーな……。

「……名前」

「へっ?」

ボソツ、と呟いた球磨ちゃんに、思わず聞き返す。

「だから、お前の名前クマ。提督だかなんだか分からないままじゃ呼びにくいクマ」

ああ、そういうコトか。

そういえば確かに自己紹介がまだだったと今さらのように気づく。

「あ、ああ……えつと、工藤、俊一っす……よ、よろしく?」

なんか微妙にキョドった自己紹介になってしまった。
し、仕方ないじゃん、説教中だし、地味な名前だし……。

ほら、球磨ちゃんもあまりの面白みの無さに固まって……なんで固まってるんだこの子？

「……………工藤……………俊……………クマ……………？」

「あの……………俺の名前が何か……………？」

「……………お前、自分の御先祖様の事とか、何か知ってるクマ!？」

「おわっ!？」

球磨ちゃんに突然顔を近づけられ、思わずのけ反る。

なんだこの剣幕!？」

「ちゅーする? ちゅーする?」

「させんぞー」

「ていとくのかちびるをまもれー」

「わたしがふさぐー♪」

「きやー♪」

「やめろっ、顔に張り付くなって……………いつ、いや、何も……………ウチはそういうの全然頓着してなくて……………」

きやいきやい騒ぐ妖精さんを引き剥がしながら、両親や爺さん婆さんの事を思い出して答える。

思い返せば、うちの家族はそういった昔話は全然しなかったっけなあ……………。

「ぐ、軍人さんとか居なかったクマ? ひいお爺ちゃんとかに、海軍の……………」

「いや、そらそれくらい世代のじいさんなら大体軍人だろうよ……………海軍かどうかは分からないけど」

「そ、それもそうクマ……………」

スルスルと身を引く球磨ちゃん。

「いったい、俺の名前の何に食いついたというのか。」

あれかね? 艦の頃の記憶ってヤツか?」

工藤なんてありふれた名前だ、誰か同じ名前の軍人さんでも乗せてたんだらうか?」

「偶然……でも……沈んだ球磨を……どこことなく、雰囲気も……クマア……」

なんだかぶつぶつと呟きながら考え込む球磨ちゃん。
頭のアホ毛もせわしなくぐるぐる回っている。

不思議だ……。

「……やっぱり名前で呼ぶのは無しクマ」

暫くして、球磨ちゃんはそう言って顔を上げた。

「あ、そうなの？」

なんだ、せっかく美少女に名前で呼んでもらえるチャンスだったのに……。

「……まあ、球磨を建造——サルベージしてくれたのは確かだクマ。多少エセっぽくても提督は提督クマ」

エセって……。

エセだけでも！

「は、はあ……」

「とにかく、球磨の艦装を確認したいクマ。建造した時、少し位は給油されてるはずクマ……。工廠はどこクマ？」

なんだかスツキリしないが、球磨ちゃんの中では何か折り合いがついたらしい。

空気を切り替えるようにそう言ってグウウ〜と伸びをしている。

……伸びすると、こう、胸のなだらかな起伏がよく分かるな。

ゆったりしたセーラーだったから分かりづらかったが、もしや意外

と——？

「……クマ？ なにか視線が——」

「ハイ、コウシヨウはあっちです」

「？ 案内して欲しいクマ」

「ハイ」

俺はグリンつと音がするくらいに素早く目線を反らし、しびれる脚に鞭打ってノロノロと立ち上がると、ミカン箱からピヨン、と飛び降りた球磨ちゃんを先導して、コウシヨウへ向かった。

妖精さんズ、今はちよつと脚にペチペチすんのヤメロ。

俺に効く。

「改めて、一つだけ……………」

「ん？」

後ろから、ボソツと呟く声に、振り返らずに返事をする。

「…………球磨を、助けてくれて……………あの海の底から掬い上げてくれて…………ホントに感謝してるクマ」

……………そういうの、困る。

マジメな雰囲気、苦手なんだよな。

振り返らなくて良かった。

自分の誕生秘話とか、聞かない方が良いに決まってる

さて、艦装の点検、という事で早速コウシヨウへ向かった俺たちであつたが、

「……………クマあ……………」

「だ、大丈夫だから！　ここは（比較的）マトモだから！」

なぜか虚ろな目でコウシヨウを見上げる球磨ちゃんを必死にフォローする俺の姿があつた。

「えいえい♪」

「うぐけー♪」

頭に乗つかつた妖精さんにアホ毛を引っ張られても無反応だ。

そうとうキてるなこれは…………。

いやあ、なんでだろうね？

ちよおくくつとだけ庁舎が穴だらけだったり、宿舍が倒壊してたり、埠頭が崩れて倉庫が風化しちゃってただけで、ごくごく普通の鎮守府だったのにねーハハハ。

…………うんまあ、そりやそうだよな。

俺も最初見た時の疲労感つたらなかつたもん。

以下は回想だ。

まず司令室を出た所から球磨ちゃんの試練が始まった。

@@@@

司令室の重い扉をよっこいせと開いて、妖精さん達をくっ付けたままズンズン先に行こうとした所で、球磨ちゃんが後についてきていない事に気が付いた。

「……………？　あれ、どうしたの？」

肩の上の妖精さんを払い落として振り返る。

「……………ここは鎮守府じゃなかったクマ？」

どこか呆然とした顔で、半開きになった扉の間に立った球磨ちゃんが確かめるように言う。

「え?」

「え? じゃないクマっ! どっ、どういう事クマ! ホントに深海棲艦の襲撃でも受けたクマっ!」

球磨ちゃんがバタバタとせわしなく振り回す指先に目をやる。
もれなく割れた窓、

崩れた壁、

倒壊した床、

吹きだまつた砂……。

……あー……、

「……………歴史を感じるよね?」

「最早遺跡の域クマっ!!」

あ、俺の最初の感想と同じだ。

そういや眠った状態で司令室まで運び込んだから、この鎮守府跡の状況を見るのは今が初めてなのか。

一応さつき事情を説明した時に、無人島の廃墟を鎮守府として復興させようとしてるんです、とは言ったけど、そうか、『廃墟』のレベルをあの司令室基準で考えてたのか。

「……………うん、じゃあ、こつちだから……あ、階段、所々崩れてるから落つこちないでね?」

まあ、説明するより見てもらった方が早いかな。

球磨ちゃんの反応も面白いし。

俺はコンマ数秒でそう決意し、スタスタと先へ進んだ。

「ま、待つクマっ……………それが鎮守府の庁舎の中で使うセリフクマか…………?」

庁舎二階の廊下から、大海原が百八十度の大パノラマで眺められる事に戦慄していた球磨ちゃんが、慌てて後をついてくる。

「はい、出口はコッチデスヨ」

「……………床が無いクマ。壁もないクマ。ドアも窓もないクマ」

さつきから球磨ちゃんが小声でブツブツ呟いてるのがなんか

シユールだ。

床が無くて壁が無くてドアも窓も無いならそれはもう建物なんだろうか？

改めて聞くとひでえもんだぜ。

「……あ、天井も無かったクマ……」

「ほ、ほらほらっ！ コウシヨウはあっちだから、さっさと行こーさっさとー」

その後、

「……………提督、このレンガの山は何クマ？」

「そーいや何なんだろうなこれ……妖精さん？」

「しゅくしやです」

「さんかいだて」

「かぜとおしのよいちんじゅふ」

「……球磨、どうやらここがお前らの寝床らしいぞ」

「野生のクマだつてもうちよつとマシな寝床に住んでるクマ！」

坂を下り、

「……………草むらクマ」

「それになんか岩やらガラクタやらもゴロゴロ転がってるな」

「ここはぐらうんどです」

「かくれんぼにさいてき」

「あそぼー♪」

「なんでグラウンドでかくれんぼができるクマ」

「これで低木でも生えてればまるつきりサバンナだよな」

崩れて苔むした埠頭を歩いて、

「……………骨……」

「あー……倉庫、だよなアレ？」

「そこです」

「からっぽになつてはやすうじゅうねん」

「りっぱなあすれちつくになりました」

「……………」

「……あー、どうかね球磨ちゃん、我が鎮守府は。呆れてモノも言えまいー！」

黙り込む球磨ちゃんに、半ば開き直つて堂々と言い放つ。

いやあ、この境遇を共に分かち合つてくれるだけでも、建造した甲斐があつたというモノだ。

ここ最近妖精さんに振り回されっぱなしだったが、とうとう一緒に振り回されてくれる仲間が——

「……………ごんな」の鎮守府じゃない、クマア……………」

「ガチ泣きは止めてっ!？」

よっぽどショックだったのだろう。

ようやく泣き止んだ球磨ちゃんは、今度はすっかり表情の抜け落ちた顔で足をふらつかせていた。

「わ、悪かつたつて……そうだよな、一流の鎮守府に居たんだもんな、高低差ありすぎて耳がキーンつてなつちやうよな？」

「……………入りたくなってきたクマ」

気づけばすっかり白くなつてしまつた球磨ちゃんが、虚ろな目で暗いコウシヨウの入り口を遠巻きに見ている。

一流鎮守府出の艦娘にはちよつと刺激が強すぎたらしい。

アホ毛までシユンと垂れ下がつた球磨ちゃんを、妖精さん達がのんきに励ましている。

「たのしい？」

「じまんのちんじゅふです」

「ごうえいにおもうです」

「すすめー♪」

「コラッ、やめなさい！ さき、どうぞどうぞ、中にお入り下さいな……ダイジョーブ大丈夫、ホントココはまだ大分マシな方だから！」
球磨ちゃんの頭に乗っかってアホ毛を操縦桿みたいになっている妖精さんを引き剥がして、割と本気で中に入りたくなさそうな球磨ちゃんを入り口へ促す。

こうなったらショックな事はまとめて処理しておいた方がイイだろう。

イヤな事は早めに済ますに限る。

「……ホントクマ？ ウソだったら怒るクマよ……？」

蒼白く光る瞳で俺を見上げてくる白球磨ちゃん。

そ、そんな目で見ないで……俺だって昨日来たばかりなんだよ……！

チラッと足元を見る。

コウシヨウに先に向かわせて、取り敢えずの体裁だけ整えておくように言っておいたお下げ妖精さんが、ぐっ、と指を立てている。

お前、信じるからな……！

「だ、ダイジョーブ……うん、多分」

自信満々のお下げ妖精さんに若干の不安を感じつつ、球磨ちゃんを引き連れてコウシヨウの中に入ってゆく。

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

そこには、先程の建造で殆どのガラクタを放り込んでしまったために、最初来た時よりもかなりガランとしたコウシヨウがあった。

「………確かに思ってたよりマシクマ………これでマシって言うのもどうかしてるクマね」

閑散とした内部を見渡し、壁や天井の穴に目線をやりながら球磨ちゃんが言う。

「でしょ!?! いや、でしょってのもおかしいけど………艤装だったよね、あそこに置いてあるから………」

そう言って、二つ並んだ建造ドックまで球磨ちゃんをつれて行く。

その片方、底部分のせり上がった方の上に、球磨ちゃんの艦装がさつき落としたまんまに放置され、鈍色にびいろの光を放って静かに鎮座していた。

「あっ……球磨の艦装クマー」

そう言つて駆け寄る球磨ちゃん。

如何にも重そうな艦装をいとも容易く持ち上げ、ためつすがめつ眺めている。

ああいうのを見ると、やっぱり艦娘なんだなあと思う。

……それとも、まさかその艦装までおかしいつてコト無いよね？

中身スカスカとか、ただの張りぼてだったとか……。

チラツと、心配していたもう片方のドックを見る。

例の暗黒プールの上に、お風呂のフタのような——というか、まるつきりシャツター式の風呂フタ（あのクルクル巻くヤツ）だな——モノが被せられ、妖精さんの丸っこい字で『みちやだめ』と張り紙してあった。

かわいらしい妖精さんの似顔絵付き。

（なんでコレでイけると思つたアホ妖精——?!）

褒めろと言わんばかりのドヤ顔でアピールしているお下げ頭を乱暴に撫でて、冷や汗をかきながら、ソロソロと、球磨ちゃんの視線を切るようにドックの前に移動する。

！
なんとかか……なんとかコチラには気づかれないようにせねば……

鎮守府の惨状であれだけガン泣きした球磨ちゃんだ。

自分がこんなおぞましい闇鍋的プールの中から産まれたと知つたら、どんな反応があるか分かつたモノじゃない。

そこで、丁度点検が終わつたのか、球磨ちゃんが顔を上げた。

「……間違いなく球磨の艦装クマ。細かい傷やクセっぽい所までそのままなのがちよつと気味悪いくらいだクマ……」

どうやら艦装には問題なかつたようだ。

取り敢えず、一安心。

「そつ、そうなんだ！ 良かった……どう、海出れそう？」

「燃料が少ないクマ。しかもナゼか弾薬は空っぽクマ……コレじゃあ、良くても近海をウロウロするくらいが関の山クマ……それか——」

そう言っつて、カタパルトから小さな水上機を持ち上げる。

「コイツに給油して、近くの鎮守府に助けを求めるか、クマ」

そう言っつて、俺を見上げる球磨ちゃん。

多少は希望が出てきたのか、さつきまで真っ白だった色はすっかり元に戻っている。

……なんかお風呂で色が変わるオモチャみたいだな艦娘つて。

「クマ……弾薬が無い時点で選択肢はほとんど決まってるようなものクマ。どちらにせよ、ココがどこだかわからないコトにはどうしようもないクマ。……提督は、ここがどこか、正確な座標とか——」

「——そうだったクマね。じゃあ、妖精さんにこの廃墟のできるだけ正確な座標を聞かないと——何か後ろに隠してるクマ？」

そう言いかけて、ふと俺の後ろの風呂フタに目をやる球磨ちゃん。やべえ、もうバレた！

慌てて再び横にズレ、球磨ちゃんの視線を切る。

「な、ナンデモナイヨー？」

「……見せるクマ」

無情にもそう言っつて、スタスタと回り込んでプールのフタに手を伸ばす球磨ちゃん。

すかさず、ガッ！ と、足でフタを押さえる俺。

「……もう、ココがマトモじゃ無いコトは分かってるクマ。今さら球磨に隠し事は無しクマ」

そう言っつて、据わった目で俺を睨んでくる。

「ほ、ホントに止めた方がイイ。絶対見ない方がイイから……ね？」

「……………」

世の中にはね、知らない方がイイ事がいっぱいあるんだよ球磨ちゃん……！

募金の行き先とか、公式絵師のお給料とか、気になるアノ子の男性

遍歴とか！

俺の真剣な意志が伝わったのだろうか。

球磨ちゃんはジツ……と俺とフタの張り紙を見比べた後、しぶしぶと手を引っ込めた。

し、しのいだ……！

「っ！ 隙ありクマっ！」

「あっ！ ちよっ!!」

と思つて足を上げた瞬間、球磨ちゃんが驚くほどの俊敏さで俺の脇をすり抜け、シヤケを取るツキノワグマのごとき手つきで風呂フタを弾き飛ばした。

なんつうスピードだ、艦娘スゲー！

——じゃなくてっ！

「毒をくらわば皿までクマ。さあ、この建造ドックにいったい何を隠し——」

あらわになったプールを覗き込んで固まる球磨ちゃん。

ゴポツ、と、粘っこい音と共に辺りに広がる異臭。

「な……な……な……!!」

「あ……だから見ない方がイイって……」

工場廃液と重油と腐った海水を混ぜ合わせたようなマーブル模様の水面を見つめて、肩をわななかせる球磨ちゃんをそつと脇にどかし、プールにフタを掛け直す。

「クマ……、これ、建造……けんぞうどつく……クマ……ク……マ？」

「だ、大丈夫だ球磨ちゃん！ た、多少！ 多少材料は独創的だったかも知れないけど、球磨ちゃんはしっかりかわいいぞ！ た、たまにちよろくと、色とか不安定だったりするかもだけど、品質に問題はないハ——」

「クマアアアア……ッ!!」

ガラランとしたコウシヨウに、球磨ちゃんの悲痛な叫び声が響き渡った。

妖精さんにつつき回されて目を覚ました後も、ああして床に突っ伏したままウジウジと目を腫らし、コンクリの床に涙でヘタクソなクマのイラストを描き続けている。

あーあー、キレイな黒いセーラー服がコンクリで白く汚れちゃって……。

なんでも、白くなった状態の自分が、今まで戦ってきた人類の敵、『深海棲艦』の姿とクリソツだったらしい。

全っつっつ然気づかなかったわ。

艦娘ってみんなあんな感じなのかと思った。

ってか、深海棲艦って人形ヒトガタのも居るんだ、初耳。

蒼白くてヒトガタ……幽霊的な？

とにかく球磨ちゃん的には、自分がコンパチキャラみたいになっちゃったことが大層ショッキングな事実だったらしい。

妖精さんがふざけて自分の長い髪を三つ編みにしたりお団子にしたりして遊んでいても気にならないくらい、すっかり塞ぎ込んでしまった。

なんかこんなマスコット見た事あるぞ。

確か、たれクマ——そんな事はどうでも良いんだよ。

とにかく予想外な事態だ。

ほんとウチのツインテ、面倒な事ばかりしよってからに……！

俺が頭の上のツインテを顔の前に持ってきてジトツと睨むと、球磨ちゃんと同じく白っぽいツインテ妖精さんは、片目をつぶって小さな握りこぶしを頭にコツンと当て、渾身のテヘペロをしてくる。

コイツは……。

とにかく、今はこの、以前の俺以上に腐ってしまったっている球磨ちゃんをなんとかしなきゃだな。

見た目女子中学生の女の子を元氣付ける……俺には一生縁の無さそうだったイベントだぜ。

無理ゲーじゃね？

「ほら、球磨ちゃんはこうして元氣に生き返ったワケだし……死んじやうよりずっと良いだろ？」

「……仲間に、みんなに合わず顔が無いクマ。球磨はもう、みんなの……妹たちの敵になっちゃったクマ……」

「いやそんな、色がちよつと2Pカラーっぽくなつたくらいで……別に球磨ちゃんが悪者になつたワケじゃないんだろ？ 人類とかぶつ転がしたかつたりする？」

「そ、そんなワケ無いクマっ！」

「だろ？」

「……クマア……」

球磨ちゃんが、泣き腫らしたまぶたを手の甲でグシグシとこすり、頭をムクリと起こして俺を見上げてくる。

「提督………提督は、クマが前の鎮守府に帰れなくても見捨てないでくれるクマ……？」

「えー……そんな、イマカレ今彼に振られた時の保険みたいに言われても……俺処女厨だし」

「クマアっ!? そこはノータイムで『勿論』って言う所クマっ! この童提督!」

「どどど、童貞ちやうわっ!」

「球磨だつて処女クマ! ……な、なに言わせるクマっ!」

「マジでっ!」

「いいきだぜ」

「いちやいちやするなー」

「らぶごめきんしー」

俺と球磨ちゃんが不毛な言い争いをしているうちに、妖精さんたちが地図が描き終わつたらしい。

妖精さんにズボンの裾を引っ張られ、コンクリの上に描かれた白い線を覗き込む。

「………おねしよ跡かな？」

妖精さんの描いた世界地図は、大陸の位置すらあやふやな、なんとも頼りないモノだった。

ほとんど床のシミか何かにしが見えない。

「ここ！　とか書かれても……太平洋の真ん中かな？」

「ああ、もう、貸すクマー！」

そう言つて鉄片を取り上げ、今度は球磨ちゃんが世界地図を描き直す。

「おおつ、こ、今度は……、」

「……………おねしょかな？」

「うっ！　だったら自分で描いてみるクマツ！」

妙に自信ありげだったから、てつきりよほどキレイに描いて見せるのかと思えば、その地図の出来は妖精さんとどっこいどっこいだつた。

ちよつと赤くなつた球磨ちゃんが吼える。

かわいい。

なんか処女つて分かつただけで10割増しかわいい。

「どれどれ、お兄さんが描いてしんぜよう……！」

ちよつと調子に乗りつつ、スイスイと世界地図を描いてゆく。

ふはは、眠たい地理の時間中、事あるごとに世界地図をノートに落書きしていた俺の実力を見よ！

ガリガリと緻密なタツチでインドネシア諸島の島々を描き込み、おまけで赤道と北マリアナ諸島の大まかな位置まで描き込んでおいた。

ふっ……我ながら完璧だぜ。

「やりますね」

「さすがていとく」

「わたしたちとごぶですね」

「いいかんじです」

「う……無駄にうまいクマ……意外な特技クマ……」

釈然としないといった声で球磨ちゃんが唸る。

「おお、今ちよつと提督感出てる！　出てない？」

「え、そう？　いや、このくらいは学校で習うしね……フツーフツうっ！」

「ちよーしに乗んなクマへっぽこ提督。後その顔でお兄ーさんはボリ過ぎクマ」

球磨ちゃんにカタパルトで軽く外モモをはたかれた。

いいじゃんか別にちよつとくらい！ 数少ない特技なんだから！

なお肝心の地名や気候風土はズタボロの模様。

限りなく意味の無い特技と言える。

そんな事をしている間に、お下げ妖精さんが地図にココの島の位置を描き込んでくれた。

「だいたいこのへんです」

「うーん……北マリアナの、更に北東辺りクマね？ ……見事にパラオ・トラツクの反対側クマ……どうやったらこんな敵制海圏のど真ん中に漂着できるクマ？」

心底呆れたような目で俺を見る球磨ちゃん。

よせやい、テレるだろ。

「コレじゃ、基地に零水偵を飛ばすのは無謀クマ。……悔しいクマが、あの戦いで北マリアナを制圧できたとはとても思えないクマ。そうすると、前線基地までの間にどうしても敵の制空圏を突っ切る事になるクマ」

それを見て、球磨ちゃんが頭を抱える。

どうやら大分困った事態らしい。

つくづくヒドい所に流されたんだな俺。

しかし、地図を見てふと思いつく。

「……なあ、球磨ちゃん。その飛行機、どれくらいの距離飛べんの？」

「……？ 燃料満タンの巡航速度で、大体3, 300キロクマ」

「……その、それならこつから本土まで届くんじゃ……？」

俺が恐る恐るそう言うと、球磨ちゃんはキョトンとした顔で一瞬固まり、慌てて地図に目を落とした。

「こつ、ここから日本までどれくらいクマ？」

「あーつと……大体だけど、二千………五百キロくらいじゃないかな？」

確か日本からハワイの距離が六千……うんたらだったはずだから、そう大きく外れて無いはずだ。

自作の地図なんで自信は無いが、三千は無さそうに見える。

「……誤差や迂回を含めてもギリギリ届きそうクマ。でも……この廃墟に、水上機乗りの妖精さんがいるクマ?」

「ここにいるぞー♪」

「ひこうきはまかせろー」

そう元気良く言つて、ポニテとショートの妖精さんがピョンつと前に出る。

気の早い事に、既に飛行帽を被り、コテコテのジャケットを着こんで張り切っている。

「ほんとはしでんかいしかのらないです」

「でもーいとくさんがどうしてもつていうならー♪」

そう言つて、チラチラとこつちを見る妖精さん。

「クマっ!? し、紫電、改!? そんな上級機体乗りの妖精さんがこんな鎮守府に……!?!」

なにか良く分からん事を眩おのきながら慄く球磨ちゃんを横目に、モノ言いたげなショートに続きを促す。

「……なんだ、言つてみる」

「ちゅーください♪」

「あいのあるやつ」

そう言つて、二匹揃つてほほを染めて唇を突き出してきた。

なんか鳥のヒナみたいだなお前ら。

「しちにおもむくわれらにー♪」

「さいごのたむけをー♪」

「お前ら墜ちたくらいじゃ死なんだろうーが……ほれ、ほっぺでイイだろ」

そう言つて、一匹ずつ抱き上げてほっぺにキスしてやる。

すると、妖精さんは「きやー♪」と嬉しそうにくねくねし、身体中をキラキラさせた。

お前らのその時々光るの、なんなんだろうな?

ふと見ると、「ずるいぞー」「わたしたちにもちゅーしろー」「ようせいさんさべつだー」ときやいきやいうるさく騒ぐ妖精さんの横で、顔を赤くした球磨がワナワナと震えていた。

「……う？ どうした、球磨ちや……球磨。コイツらが飛んでくれるみたいだし、さつさと給油しちやお——」
「はっ、ハレンチクマっ！ 妖精さんたらしクマーっ！！」

発艦、零水偵

妖精さんに頼んで艤装の燃料を水偵に移し替えている間、球磨ちゃんも顔を赤くしたり青くしたりと大変忙しそうなお様子だった。

「まさか、まさか、球磨を水底から掬い上げてくれた提督が、こんなちっちゃい女の子に発情しちゃうような異常性癖の持ち主だったなんて……よ、妖精さん相手に信じられんクマ！ ふつう男の人だったら断然巨乳の女性、映画女優で言うと、イザオル・アジャ○ニ辺りがイイはずクマ……！ いやでも、でもクマ、この提督以外にこの状況で頼れる相手はいないのも確かクマ……球磨はあえて、あえて社会道徳をかなぐり捨てて、見て見ぬフリをしなきゃクマ……っ！」

ごくり、と喉を鳴らす球磨ちゃん。

さつきからブツブツと何言ってるんだろうこの子？

やっぱりどこか調子が悪いんだろうか？

「いれかえかんりよー♪」

「まんたんです」

「お、サンキューお前ら……って言うか、今思ったんだけど、艤装の燃料とヒコーキの燃料って一緒に良かったのか？」

「ようせいさんじるしのかんむすねんりようです」

「なんでもうごくよー♪」

「いれてよし」

「ぬってよし！」

「のんでよし♪」

「へえ、便利なこつて……いや、差し出されたって飲まねえよ!？」

ワクワクした顔で差し出された携行缶を脇にどける。

「そう……そうクマ、これは、超法規的措置！ 球磨は世界の平和のため、八人の妖精さんの不幸な妖生をあえて、あえて見て見ぬフリをするクマ。クマアアアああ最低！ 最低だクマ！ 球磨はなんて最低な軽巡洋艦クマっ！ 遠く前線の戦友たち、姉妹艦のみんな、あの

何かをせつせと書き込んでいる球磨を、じやれついてくる妖精さん達を適当に構いながらポーっと眺めていた。

たんに鎮守府内を移動するってだけでいちいち十分くらい掛かるのはどうもキツいなあ……さっさと道とか階段とか直さないと……いや、球磨が鎮守府に連絡入れたら俺もここ追い出されるんじゃないか？

うわあ……短い提督生活だった……！

せめて一回くらい巨乳の艦娘とイチヤイチャとかしたかったなあ……。

ってか、その執務机、俺だって一回も使ったコトないのに、初めて球磨に取られたんだけど。

切ない。

「……………提督、ちよつと聞きたい事があるクマ」

そう言つて、書きかけの書状に目を落としたままの球磨が、ペンを止めてポソツと呟いた。

「コラツ、服の中に潜り込もうとするなつ……え、何？ 聞きたい事？」

妖精さんたちとの格闘を中断して顔を上げると、球磨ちゃんのアホ毛が不安そうにゆらゆらと揺れているのが目に入った。

「その……球磨が、球磨じゃなくなっちゃったかもしれないって事……ちゃんと書かなきゃダメなのは分かってるクマ。でも……………怖いんだクマ。球磨は、本当に戻るクマ？ 球磨は、まだ艦娘でいられてるクマ？ 戦えるクマ？ 妹たちに、仲間に受け入れてもらえるクマ…………？」

「お、おい…………球磨ちゃん、震えて…………」

気づくと、球磨ちゃんは寒さをこらえるように自分の身体を抱きながら、小さく震えていた。

髪の毛の先や指先の方から、じわじわと白い色がのぼってきている。

「球磨は、本当に前の球磨のままクマ…………？ 今は、何も変化は感じられないクマ。見た目以外、何が変わったかなんて分からないクマ。でも…………でも、本当にそうクマ？」

いや、変わったかどうかなんて……初対面だよ？

球磨ちゃんは、俺の答えを聞く事もなく、書きかけの書状に目線を落としたまま、淡々と不安を吐き出してゆく。

冷静になつて、いざ助けを求めようと思つたら、突然色々な不安が噴出してきた、という感じだ。

アルバイトの面接の申し込みの電話をして、いざ実際にお店に赴く前のあの感覚に近いだろうか？

「……じ、実験台とかにされちゃうクマ？ それか、まさか撃沈処分、とか——！」

「球磨ちゃん！」

球磨ちゃんの聞き捨てならない呟きに、思わず声を上げる。

「く、クマっ？」

驚いたように顔を上げる球磨ちゃん。

すでに全身真っ白に黒セーラーの白クマちゃんモードになつてしまっている。

「させないよ」

「……提督？」

「させるワケないだろ！」

実験台。

実験台！

球磨ちゃんを実験台にして全身いじくり回すだとい？

そんな羨まケシカラン事、させるワケにいかないに決まってるじゃないか！

本土の変態エリートどもめ、いっぱい揃えて並べた艦娘たちを日替わりで楽しむだけじゃ飽きたらず、こんな中学生みたいなロリかわいい処女球磨ちゃんまで実験と称して性的にイタズラするつもりだなっ!?

YESロリータ！ NO、タッチ！ の名セリフを知らんのか!?

「これはかんちがいしてるめです」

「おもしろいからほっとこうっ？」

「ていとくさんはおもしろいなあ」

「そこもすき〜♪」

「きや〜♪」

空気を読んでおとなしくちよこんと正座していた妖精さんたちが何かそこそそと喋っているが気にしない。

「球磨は、俺の艦娘だ！ サルベージだかなんだか知らんが、俺が既にボロボロの鎮守府をちよこ〜と削ってまで建造した大事な艦娘だぞ？ 本土のヤツらの好きになんかさせるか！」

撃沈処分なんでもっとあり得ない。

要らないなら寄越せ！

ちっパイだつてもつたいないだろうが！

「て、提督!?! 突然どうしたクマ!?!」

「球磨!?!」

ガシツ、と球磨ちゃんの両肩を掴む。

蒼白く染まった瞳が驚愕に見開かれ、頬が僅かに染まっている。

「な、何——」

「お前は俺のモノだ！」

「クマアっ!?!」

ピンっ！ つと、球磨ちゃんの真っ白なアホ毛が驚いたように跳ねる。

「誰が何と言おうと、俺が建造したんだから球磨ちゃんは俺のだ。俺の艦娘だ!! 誰が返すもんか！ 実験台になんかさせないし、処分なんか絶対させない！」

「ち、近いっ！ 近いクマっ!?!」

顔を赤くした球磨ちゃんにちよつとあり得ない位の馬鹿力で胸を押され、引き剥がされる。

あ……し、しまった、俺は何を言っただけだ？

球磨ちゃんは確かトラックだかダンプだかの提督の艦娘で、俺には何の提督補正もかかってないんだった！

何かここまで全然キモがられないモンだから、軽くギャルゲ感覚で喋ってた。

これじゃただの不細工キモ男に意味不明に言い寄られただけじゃ

ね？

球磨ちゃん、プルプル震えちゃってるし……！

「く、球磨は……球磨は、と、トラックの艦娘クマ……」

「う、うぐう……そりゃ、そうだ……」

「ちよ、ちよつとだけ不安になつて、色々言っちゃったケド……球磨の知る限り、今の軍隊は昔よりずっと人道的クマ。実際にはそんな非道な事は無い……と思うクマ」

「……そうなんすか」

うう……せつかくの初艦娘……いきなり嫌われてしまった……。

何だよサルベージって……俺にハーレムなぞ絶対に作らせないと
いう世界の意思でも働いてんのかよ……！

かわいい処女の女の子は決して不細工には回つてこないと言うの
ですか、童貞の神様……！

しかし、俺が絶望に身悶えしていると、球磨ちゃんが続けて言う。

「でっ、でもー」

「はいっー」

「……球磨がトラックに戻れるかは、分からないクマ。仲間を受け入
れてもらえるかも……そ、それに、提督はなかなかのへっぽこクマー」
「あうっ!？」

うう、コイツさつきから何べんも『なんちゃって』だの『モドキ』だ
の『へっぽこ』だのとズケズケ言いやがって……事実だから何も言え
ないケドさ……。

「て、提督は連れてる妖精さんの数も少ないし、色々ダメっぽいけど
……妖精さんたちには何かあり得ないくらいなつかれてるし、珍しい
妖精さんも連れてるし、く、球磨を建造する事もできたんだから……
きつと才能はあるクマー」

……あれ、誉められてる、のか？

「ていとくさんはすごいんだぞー」

「かっこいいぞー」

「やらんぞー」

はいはい、お前らもありがとね、ズボンの中に入ろうとしないでね。

隙あらば潜り込もうとする妖精さんを逆さ釣りにして、球磨ちゃん
の続きを待つ。

「だから……だから、もし、提督と一緒に本土に帰れたら、少しだけ一
緒に居てやってもいいクマ!」

「……え?」

あれ、なんかフラグ立ってた?

今なんか、球磨ちゃんがツンデレヒロインみたいなセリフ言わな
かった?

「か、勘違いしないで欲しいクマ! 球磨はこう見えても結構歴戦の
艦娘だったクマ! 本当は提督みたいな素人同然の新人についてたり
なんかしないクマ! ……でも、提督が球磨をもう一度建造……サル
ベージしてくれたのは確かだし、球磨は提督の艦娘、と云えない事も
なきにしもあらずクマ。ふ、不本意だけどクマ!?! ……だから、提
督が正式に予備役とかに就任したら、提督がちゃんと一人前になっ
て、自分の新造艦を持てるようになるまで……提督の補佐に入れるよ
うに申請は出してやるクマ」

………おや?

デレた?

俺にもちよつとくらいはあつた感じか、ウワサの提督補正!?

テンションが上がって参りました。

「………な、何とか言ったらどうクマ?!」

俺が予想外の事態に固まっていると、球磨ちゃんが赤い顔で焦れた
ように叫んだ。

いつの間にか、髪も身体も元の色に戻っている。

「はえっ!?! な、何とかって……?」

「う、嬉しいとか……ありがとうとかクマ?」

「あ、ありがとう……」

「………どういたしましてクマ」

これはどんな状況なのだろうか。

うつむいた球磨ちゃんと、軽く目線をずらしてぼそぼそしやべる
俺。

クソっ、こんな所で俺の女性経験の薄さ（見栄）が露呈してしまうとは……。

いざデレ状態の女子を目の前になると、気の効いた言葉が一つたりとも浮かんでこない。

と言うか、最初は球磨ちゃんが俺に聞きたい事があるとかじゃなかったか？

取り敢えず不安は解消したって事でイイのか？

イイよね？

「その……球磨ちゃん——」

「……球磨でいいクマ。普通の軍人さんは部下にちゃんとか言わないクマ」

「——分かった。球磨」

今俺は、かわいい女の子を呼び捨てで呼んでいる。

何か男として一つレベルアップした気分だ。

シヨボいな俺。

「球磨の不安、その、少しは晴れたか？」

「クマ……まあ、考えるだけ無駄って事は分かったクマ。球磨を建造した提督がこんなテキトーなんだから、球磨も少しは提督の能天気にならう事にするクマ。……つくづく、こんなヘンな提督初めてクマ」

「いや、能天気って……そらお前の元提督のエリートさんたちに比べれば俺なんかクソみたいなもんかも知れないけどさあ……」

いちいち現実を突きつけないでくれよ、ヘコむ。

「よしよし♪」

「ていとくさんはがんばった」

二頭身の妖精さんに慰められる俺、超情けない。

いいんだよ俺は、明日から頑張るんだから……。

「クマア♪ 球磨はこれ、仕上げちやうクマ」

「ああ、あいよ」

すっかり機嫌の戻った様子のクマは、長いアホ毛を楽しげに揺らしながら、カリカリとメモ帳への書き込みを再開し始めた。

はあ、またしばらくヒマになっちゃったな。

ように話し掛ける球磨。

「妖精さん、岩川の鎮守府まで、かなり危険な飛行になるクマ。頼んでおいてこんなコト言うのもどうかと思うクマが……………この任務、断ってくれてもいいクマ」

「むようなしんぱいだぜ」

「とばないようせいさんはただのぷりちーなようせいさんだ」

「いっちよまえにカツコつけて不適な笑みを浮かべるポニテ妖精さんとシヨート妖精さん。」

「…………時々思うんだけど、コイツらはどこでそういう知識を身に付けてくるんだ？」

「普通の人に見えないのを良いことに、人んちに上がり込んで勝手にテレビとか見てるんだらうか？」

「いや、コイツらに至っては何十年もこの島でグダってたんだろ？」

「…………うん、考えるだけ無駄だな。」

「…………感謝するクマ。そのメモを岩川の提督さんにちゃんと届けて欲しいクマ。白くて立派な髭のお爺ちゃんだからすぐ分かるクマ。…………幸運を祈るクマ」

「まかせろー♪ かえったらていとくさんとけっこんするんだ♪」

「ぱいんさらだをつくってまっつてね」

「それは帰ってこないヤツの台詞だよアホ妖精。」

「あ、そうだ。」

「なあ、妖精さん。その鎮守府に報告したらさ、帰ってくる前に俺の実家に寄って、住み着いてる妖精さん達にココの場所教えてやってくれないか？」

「そう、妖精さんに顔を寄せて頼む。」

「アイツら、鎮守府作ったら呼べって言ったし、一応追い出される前に呼んでおかないとスネそうだ。」

「一晩二晩もここでキャンプごっこでもすれば満足するだろう。」

「…………あとはあの猛獣対策だな。」

「まかせるです」

「ていとくさんのたのみとあらば♪」

球磨が報告書にどう書いたか知らないが、もしかしたら部外者の俺だけはこの危険地帯らしい無人島に放置される……つてコトになるかも分からんし、念のため人手……もとい、妖精さん手は多い方がいいだろう。

そんな事を考えていると、球磨が驚いたように横から口を挟んできた。

「実家クマ？ 実家に提督の妖精さんがまだ残ってるクマ？ 本土まで二千五百キロもあるクマよ？ そんなに離れたら、妖精さんなんてとつくにみんなどつかにいつちやつてるクマ」

「えっ？ そうなの？」

なんだ、そういうものなのか妖精さんって？

と、頭の上のツインテに訊ねてみると、

「わたしたちははいとくさんひとすじです」

と、答えになってない答えが帰って来た。

たぶん、『我々は一生お前に付きまとしてやるぞグへへ』と言う意味だろう。

そんなに俺が好きなら、もうちよつとくらい俺に迷惑掛けないようにしてくれても良くない？

「……………ひよつとして、提督ってスゴい提督だったりするクマ？」

実家の妖精さんって、どれくらいいるクマ……………」

そう、恐る恐るといった風に聞いてくる球磨。

それに、海軍の人事局窓口で言われた事を思い出しながら答える。

「んあー、いや、お前が思ってる程はいねえよ。なんか本物の提督の百分の一くらいだっけさ」

千匹だか二千匹だかだもんな。

しかも全員好き放題と来たもんだから……この百倍をどう管理するってんだよイケメン提督どもは。

やっぱイケメンだと妖精さん達も素直に言う事聞いてくれるんかね？

俺の答えを聞いて、球磨は安心したような、拍子抜けしたような、何か複雑そうな表情で溜め息を吐いた。

「なんだ……驚かすなクマ。提督は何もかもが今まで見てきた候補生の連中と違うし、ひよつとしたら……とか思った球磨がバカみたいクマ」

「さいですか」

「お前、俺だつてキズつくんだかなー……？」

そんな露骨に前の男と比較して失望した風に言わないでくれよ……あ、いや、別に別れたワケでもないから今の男になるのか。

「ったく、これだから中古は——」

ゴスツ

「イッ ったいっつ!!?」

「……よく分からないクマが、今なんかスツゴいムカついたクマ」

蹴った!

「コイツわざわざ舐装履いて俺のスネ蹴ったよ!

いや、そりや処女を中古呼ばわりは悪かったかもだけど心の声だからセーフだろ! 提督イジメ反対!

俺提督じゃないけど!

「あー!」

「ていとくをけつたなー」

「まあいまのはていとくがわるい」

「だいじょうぶ?」

うづくまる俺に群がつてきやいきやい騒ぐ妖精さん達。

「おおお……! や、止めろ!

今俺のむこうズネは枯れススキ並みにデリケートなんだ、ペチペチすんのヤメテ……!」

「よーしのりこめー」

「わぁい♪」

悶絶する俺を完全に無視して、二匹の妖精さんが元気よく叫ぶ。

そして、衣装チェンジの時のようにペカーッと光ったかと思うと、いつも以上にちっこくなくなったポニテとシヨート妖精さんが、フロート

を足場にしてピョンピョンつとコックピットに乗り込んだ。

「おーイテテ……ああ、なるほど、どうやって乗んのかと思ってたけど、そんな事もできんな妖精さんって」

「提督、そんなコトも知らんクマ？ ……ああ、そうか、士官教育も何にも受けてないんだったクマ」

呆れたようにそう言いながら、精巧なミニチュアの様な零水偵を大事そうに持ち上げ、肩の横んトコのカタパルトに乗つける球磨。

カチャカチャと艤装を鳴らしながら、重い扉を開いて司令室の外へ出て行くのを慌てて追っかける。

ま、待つて待つて！

そんな大事なこと、俺抜きでやんないで！

球磨を追いかけて、全身に妖精さんをくつつけながら司令室の外に出る。

当の球磨は眩しそうに目を細めながら、壁の崩壊した廊下で日が半程まで昇った海原を仰いでいた。

球磨の長い髪が、暖かな潮風を受けて大きくなびいている。

強い陽射しが反射して、キラキラとまばゆく光る胡桃色の波。

繊細な絹糸のような、流れるような髪の毛の一本一本が、幻想的に輝いている。

はためく白いセーラー。

踊る赤いネクタイ。

鈍く輝く艤装。

澄んだ鳶色の瞳に静かに灯る、蒼白い光。

「あ」

——キレイだ。

「——ひどい鎮守府クマが、発艦にはちようどいいクマ」

球磨がそう呟くと、ザアアツ、と、うるさいくらいの潮騒が耳に飛び込んできた。

「っ……………!?!」

み、見とれてた……………!

今一瞬、周りの音が聞こえないくらい、目の前の小さな艦娘に見惚れてしまった……………!?!

ひ、貧乳なのに……………!」

「……………お前ちよつと黙るクマ」

ギロツ、と横目で睨んでくる球磨。

おつと、声に出てたっぽい。

「うわき」

「ぎるてい」

「せいさいだー♪」

「や、やめっ、止めろっ! 痛いっ!?!」

ツインテが俺の帽子越しに、俺のツムジ辺りをビシビシとつつき倒す。

同時に、俺の両脚にまとわりついた妖精さんたちが一斉に先程痛めたむこうズネをゲシゲシと蹴り初める。

や、止めろ、それはマジでシヤレになら、アツー!

「……………クマア……………ちよつとだけ静かにするクマ」

呆れたような顔の球磨が、スツ……………と左腕を真っ直ぐに持ち上げる。

水平に差し出された腕にそつて、カタパルトがキュラキュラと向きを変え、青い海原に先を向ける。

バラツバララララララララララ……………

小さな排気口が黒い煙を吐き、プロペラが勢いよく回り初める。

その風を受け、球磨の髪が踊り、ディーゼルともまた違った匂いが辺りに漂う。

「イテテ……………おつ、おおお……………!」

「うーん、なつかしいにおい」

「やっぱこのおとです」

「よいしあがり」

「わーい♪」

「とべー♪」

三座式コックピットの一番前と真ん中の席に座った妖精さんが、トンボみたいなゴツイゴーグルをつけて、グツ！ と力強くちっこい親指を立てた。

「零水偵、発艦するクマー！」

ポンツ、という爆発音。

白い煙。

ブオツ、と吹き付ける風と火薬の匂い。

カタパルトに勢いよく押し出され、妖精さんに乗せた小さな零水偵は、いつそあつさりな程に、抜けるような青空に発進した。

「……！」

その瞬間、ピカーっ、と光をまとう零水偵。

次の瞬間、空を裂くように飛ぶ零水偵は、普段の大きさの妖精さんに乗せられるサイズにまで大きく巨大化した。

ブロロロロ……、と景気の良いレシプロ音を響かせて、妖精さんに乗せた零水偵が空に大きく弧を描く。

ピカピカのコックピットが、陽射しを反射してまばゆく輝く。

ワスレナ鎮守府をぐるっと一周回るように旋回した後、細く煙をたなびかせる零水偵は、キラキラと輝きながら本土へと向かって真っ直ぐに飛んで行った。

「……ふう、無事発艦できたクマ。どうやら艦娘としての機能はちゃんと元通りみたいクマ。後は救援が来る事を祈るだ——何してるクマ？」

「ん、お、おおう……!?!」

球磨は大きく溜め息を吐いて俺に向き返り、少し驚いたような、変な顔をした。

また俺は、気づかない内に雰囲気当てられたらしい。

俺の腕は、最初よりはいくらかマシになったであろう、海軍式の敬礼の形になって、顔の横にすっかりと添えられていた。

ちなみに妖精さんたちも一緒になってピシツと敬礼している。

「し、しかたないだろ……俺は雰囲気に乗せられやすいんだよ……！」
慌てて腕を後ろにやりながら、言い訳のようにそう言う。

うわあ、こっぱずかしい！

本物の軍属を前に、何をいっちょよまえに敬礼なんかしてるんだ俺は。

顔アツツ！

「……まあ別に、悪いコトじゃないクマ」

プイツ、と顔をそむけながら、そう吐き捨てるように言う球磨。

あつ、コイツ笑ったな!?

チクシヨウ、いいじゃんか！ 別に、敬礼くらい！

ちよつとくらい提督気分には浸らせてよ！

「……………提督、そんな顔できたクマね」

「……………今なんか言った?」

ボソツ、と何かを呟いた球磨に、思わず聞き返す。

何々? 俺はそこらの難聴系主人公とは違うよ?

例えお胸がちよおくとばかし慎ましやかでも、貴重なフラグは見逃さないよ!?

「……生意気クマ。提督モドキが調子に乗んなクマ」

「うわ、顔コツワ！ 止めて、キズつくから!」

「うるさいクマ。何か連絡があるまで、こっちはこっちで出来るコトをやるクマ」

冷たく言い放って、のっしのっしと大股に歩きながら司令室に戻ってゆく球磨。

くそう、やっぱり気のせいだったか。

さつきは不覚にもちよつと可愛いかもって思ったのにコイツ、俺のトキメキ返せよ……!」

「ちっ」

「ちっ!」

「どろぼうねこめー」

「がるる」

「オメーらは何言ってるんだ——痛った！ ツインテ、髪、髪引つ張んな！ 禿げたらどうしてくれる！」

妖精さんときやあぎやあ騒ぎながら、球磨を追いかける。

……そのちよつと不機嫌そうな足取りの球磨の頭の上。

長くいアホ毛が、ほんの少しだけ機嫌良さそうに、ピョンピョンと跳ねていたのを、妖精さんの相手に夢中になりつつも、チラツと盗み見る。

……やっぱ、帰れるってなったら嬉しいよなあ。

はあ………俺も自分だけの艦娘、欲しかったなあ……。

……あ、ツインテお前、今ブチブチって音したぞ!?

抜いた!?! 抜いちやったのか!?

「……………提督、お前ちよつとくらいマジメにできないクマ!?!」

ライン

「――報告は以上です。同輸送船は、点検・整備後、物資の搬入を終えましたら、明後日16時に再び出港予定との事です」

「報告、了解した。ご苦労だったね、長良。三番ドックの使用許可を出しておくから、各員点検整備の後、第二艦隊は明後日の午前まで休養を取りなさい。補給は出港日14時まで済ませるように」

「はい。失礼します」

ハキハキとした声の返事を受け取り、部屋を辞する長良を見送る。扉を締める静かな音の後、遠ざかる足音をたつぷり十歩分程聞いて、私はようやく大きなため息を吐いた。

「お疲れですか、田井中提督？」

「いや、いや、彼女等程じゃあないさ」

秘書艦の天城にそれを見とがめられ、直ぐに笑みを作ってかぶりを振る。

「長良も随分と無理をしているようだ。気丈に振る舞っちゃあいるが、少々背が曲がつてるし、足許もどこか覚束無い様子だったんでね。どうにも情けないんだ」

「ええと……その……」

「……ああ違う違う、彼女の事じゃなくて、君達にこんな無理を強いている私等がね」

何か勘違いしている様子の天城にそう付け足して、脱いだ軍帽を机に置く。

ささくれ立った天板に肘をつき、短く刈り込んだこめかみをカリカリと掻きながら、机の上の端末に視線を落とす。

ここ、岩川鎮守府に着任してもう幾年か。

決して楽な道の前では無かった。

それどころか、艱難辛苦の日々と言ってもいい。

深海棲艦なる『敵』の出現。

世界規模の防衛戦争の勃発。

混乱に次ぐ混乱。

艦娘、妖精さんの発見。

そして、提督適性者の出現。

まさか定年過ぎの私アタシみたいな老いぼれが、こうして再び最前線に引っぱり出されるとは、今思い返しても悪い夢の様に感じる。

悠々自適の年金生活が、また随分と遠退いてしまった。

着任した初期の頃は、『艦娘』なる、余りにも若すぎる部下の扱いに戸惑い、悩み、随分と四苦八苦した物だ。

それでも最近では、ようやくと彼女等との距離感も掴めて来て、お互いぎこちないながらもそれなりの信頼関係を築けてきたのではないかと、そんな淡い実感を抱き始めていたのだ。

それに伴い、艦娘の練度も上がり、出撃任務の成功率も向上、各地の戦線も安定し、国内外の反攻の機運も高まってきていた。

そんな折に持ち上がった、先の一大反攻作戦。

その、失敗。

開戦以降初めてとなる、多くの犠牲を伴う大敗。

我が鎮守府でも、初めての沈没艦が出た。

失った物の大きさは計り知れない。

艦娘達との信頼関係も、最初の頃に逆戻り——いや、悪化したと言つてもいい。

それほどまでに、彼女等艦娘達にとって、仲間の轟沈は、重い。余りにも重いのだ。

仲間を、姉妹を沈めた指揮官への、そして大本営への不満や不信。それを許した自分達の未熟さ、弱さ、不甲斐なさ。

そういつた暗く淀んだ感情で、最近では鎮守府に居るだけで息苦しさすら感じる程だ。

艦娘達は、そんな耐え難い重圧から逃げる様に、任務や訓練に没頭している。

完全なオーバーワークだ。

無理に無理を重ね、心も身体もボロボロ。

彼女等の顔からは笑顔が途切れて久しい。

張りつめた糸は、もう何時切れてもおかしくない状態にまで来た。
た。

(……考えが甘かった、か)

位置を正した眼鏡越しに、ここ最近の出撃状況と資材の出入記録に
目を通す。

「いつ、いえ、そんな、無理だなんて……!」

「特に軽巡、駆逐艦の子等の消耗がひどい。朝も夜も無く、連日連夜の
遠征、輸送、護衛……先の作戦の失敗、アレはどうにもね、些ちかか深手
に過ぎたよ」

「……………」

天城は、何かを言いかける様に口を開き、直ぐにぎゅつと口元を引
き結んだ。

違う、とは言えまい。

毎日毎日、何かに取り付かれた様に一心に出撃する艦娘達。

彼女等のその様は、自分自身のみならず、私等提督達アタシを責めている
様にも見えてどうにも居たたまれない。

妖精さん達にも愛想を尽かさされたのか、一時期は二百人近くいた妖
精さんも次々と姿を消し、今では百十三人にまで数を減らしてしまっ
た。

隷下提督補佐官達も、妖精さんの減少を嘆いていたし、作戦に参加
した他の鎮守府でも妖精さんの離反が深刻らしいと聞く。

残った妖精さん達も仕事に身が入らない様で、どこか気だるげな様
子でのろのろと作業をしている。

あの敗北は艦娘達にとっても、そして私等人類アタシに対してもあまり
にも大きな傷痕を残した様だった。

「……私達は、一刻も早く崩れた前線を立て直さねばなりません。消
耗した資材の回復は、何よりも優先される事だと——」

「うん。上からのもの、そういう指示だ。元よりウチに否やは無いさ」

一聞して弱気とも取れる私の言葉に天城から咎めるような声が掛かるが、それを遮った私は端末にコードを繋ぎ、壁のモニターに戦略地図を表示させた。

確かに、到底こなしきれない程の依頼が、依然として連日鎮守府に届いている。

それは事実だ。

だが彼女等が必死に頑張っても、疲弊した兵站の回復は遅々として進んでいないのが現状。

先の消耗が開戦以来の大打撃であったのは確かだが、それだけでこの程のじり貧に陥る程、我が軍の兵站は脆弱では無かった——筈だ。

「さて……こいつはどうにも、深海の連中も嫌らしい事をするね」

大型モニターに表示されたのは、岩川鎮守府以南、パラオ・トラックまでを含んだ海域図。

各所に大小の赤い点と数字、矢印が幾つも書き込まれている。

それらが意味する所は——

「……………通商破壊」

「うん。占拠されたトラック周辺は当然として、パラオのカバーしていた補給路まで分断されつつある。戦力補充の間隙かんげきを突かれた形だよね。おまけに点在する補給基地の幾つかも敵方に落ちてる。夜間の鼠輸送も頻繁に潜水艦の襲撃を受けているし……この辺り、各正面海域の主戦力に定期的なハラスメント攻撃まで加えてきてる。これじゃ護衛に回す余裕なんて無い、制海圏いっぱいに釘付けだ」

実に徹底している。

そもそも、数の利は深海にあるのだ。

こうまで真面目に戦争するまでもなく、物量に任せて雪崩れ込まれば我々は打つ手が無い……とは、大本営も承知の事。

公然の秘密、という奴だ。

これまでは、『歴史をなぞる』という彼女等の戦略パターンに半ば決め打ちする形で辛くも勝利を掴んで来た。

その前提が呆気なく崩れた今、いよいよ彼女等の中途半端な侵略行

為の意図する所が分からなくなってしまった。

ここまでくると、此方の補給が国力を維持できるギリギリいっぱい
の所で保たれている所にすら、なにか作為的な物を感じてしまう。

「成長する亡霊か。いつそ和平交渉出来る位まで知恵をつけてくれた
ら言うことも無いんだがね……まったく、当初の戦略が丸々パーだ。
大本営の連中、さぞや肝が冷えたろう」

「……提督」

「おっと、イカンね、年食うと口が軽くなっていけない」

笑いながら天城を見れば、私の失言を咎めるような目でむつつりと
黙り込んでいる。

顔色も幾らか優れない様子だ。

ふむ、少々脅かしすぎたか。

「なに、私等も全くの無策つて訳じゃあないさ。ヤツ等が上手にやる
んならこつちにもやり様はある。一先ず駆逐艦の子等に積んだドラ
ム缶は下ろして……ん、なんだい？」

机の端でウトウトと舟を漕いでいた妖精さん達が、弾かれた様に
パツと頭を起こし、俄にわかにワタワタと騒ぎ始めた。

その内の一人がピヨンと肩に乗り、耳打ちをしてくる。

「ていとく、だんたいのおきやくさんです」

「？ 団体と言うと、商工会の……」

「われわれのだんたいです」

「……うん？ 我々つて——」

どう言うことだ？ と私が顎に手を当てると同時。

執務室の外から、ドタドタという慌ただしい足音と、艦娘達の騒が
しい悲鳴が響いてくる。

怪訝そうな顔をした天城と顔を見合わせ、すわ敵襲かと慌てて入り
口に首を向けると、蝶ちやうつがい番を壊さんばかりのけたたましい音を立てて
執務室の扉が乱暴に開け放たれた。

目を白黒させながら見つめる前で扉から姿を現したのは、先ほど入
渠を命じたばかりの長良と、一緒にドック入りするよう命令した筈の
遠征艦隊の面々だった。

「てっ、てて、提督っ……！ た、たいへっ……大変です……！」
一体何があったと言うのだろうか。

丁度脱ぎかけの所で、取るものも取らず走ってきた様で、長良も駆逐艦達もスカートやらセーラー服やらを足首に引っ掛け、殆ど半裸の状態でせえせえと息を切らせている。

一見してただ事では無い。

「あっ、あなた達っ!? ふふ、服……提督の前ですよ！ な、何ごとですかあっ!?!」

赤い顔を両手で覆った天城に叫ばれても、長良達は何を警戒しているのか、頻りに後ろ、廊下の方を気にしている。

「いったい何事だい長良、説明しなさい——」

「よっ、妖精さんですっ!! 妖精さんの大群が、とっ、突然空からっ!!」

「——はっ？」

「っ、長良さん！ も、もう来ましたっ……！」

殿しんがりに立っていた三日月がおのくようにそう言った、次の瞬間だ。

その時の光景を——老い先も短い身の上だが——私は決アタンして忘れる事は無いだろう。

「嘘っ——きやあっ!?!」

「ふわああっ!?!」

「うわあ〜っ!?!」

入り口で団子になっていた長良達が、一瞬でモスグリーンアタンの波に呑み込まれた。

いや、波じゃない。

あれは——

「らいとくりあー」

「れふとくりあ〜」

「せいあつしたぞー」

「ちよろいもんだぜ」

「あのおひげかな？」

「たぶんそうです」

「き、君等は……」

——妖精さんだ。

妖精さんの、大群だった。

モスグリーンの軍服に身を包み、頭に赤いベレー帽を乗つけた妖精さんの大群が、サブマシンガン……風ふうのカラフルな水鉄砲で武装して執務室に雪崩れ込み、目を回した長良達や私に銃口を突き付けてきたのだ。

私が固まっている目の前で、妖精さんの津波に揉みくちやにされた長良達が可愛らしいマスクングテープ（恐らくガムテープの代わりだ）でぐるぐる巻きにされて転がされる。

「えっ、よ、妖精さん!? ウチの子達じゃ無い……あっ、な、なんですか!?! ちよ、ちよつと、ど、ドコさわって……きやあああつ!!」

私が余りに非常識な光景に不覚にも呆気アタシに取られていると、動揺してわたわたししていた天城が、素早く近付いてきた特殊部隊風な妖精さんに無力化され、床に転がされた。

ぐるぐると目を回して「きゆう……」と気絶してしまった頼り無い秘書艦を横目に部屋の隅を見れば、自分の妖精さん達もまた、そろって手を頭の後ろにやり床にうつ伏せにさせられている。

「みうごきしたらはちのすです」

「しなくてもきぶんしだいではちのすです♪」

な、なんて物騒な——

「こういうのまっつた」

「わくわく」

「ねえつきは？ つきはなにします？」

「しー。われわれはじゆうじゅんなほりよなのです」
「うたないでー♪」

……………。

どこか緊張感の無い妖精さん達に思わず脱力していると、入り口に固まっていた謎の妖精さん軍団の中から、冗談みたいなサングラスをかけた一人の妖精さんがゆっくり、てちてちと私の前に歩み出てきた。

彼女がこの乱痴気騒ぎのリーダーなのだろうか？

ほのかに光を纏ったポニーテールの妖精さんは、赤いベレー帽に手を伸ばして位置を正し、胸元にジャラジャラとぶら下げた勲章（……良く見ると折り紙だ）を見せびらかすように胸を張って、私を見上げてくる。

「あー……ゴホン………なんだね、君達は？」

「このちんじゅふはわれわれがせいあつしました」

……情けない、本当に情けない事だが、事実ウチの戦力は目の前でしつかり無力化されている。

全く意味不明ではあるが、我が岩川鎮守府はこの謎の妖精さん部隊に事実上占拠された様だ。

水鉄砲で。

……前代未聞だなこれは。

大方、近頃見なくなった妖精さん達の一部が徒党を組んで、最近の鬱屈した雰囲気への鬱憤を晴らす為に大規模な悪戯を仕掛けてきたのだろう。

この忙しい時に、なんて迷惑な……。

ため息を吐きそうになるのを堪えて、ポニーテールの妖精さんに問いかける。

「……………それで、私はどうなるんだろうね？」

「あんたたいしようくびだろ」

そう言って、サングラスを外し、蒼い目で私を見上げる妖精さんが、銃口を私に突き付ける。

……後ろの妖精さんの一団の陰で、『どつきりだいせいこう』の看板

がチラチラしているのは……やはり見て見ぬフリをしなければなら
ないのか？

「……ああ、^{アタシ}私がこの鎮守府の司令官、日本海軍大将、田井中だ」
律儀にそう答えて、ポニーテールの妖精さんを見下ろす。

一体どうオチをつけてくれるのかは知らないが、妖精さんの機嫌を
損ねてはいけない、とは、提督適性者が士官学校で一番最初に叩き込
まれる事だ。

どんなに迷惑でも乗らねばなるま………ん？

おや、この妖精さんの水鉄砲、黒——

「くびおいてけ、です」

パアンツ

執務室に、乾いた炸薬音が響いた。

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

本土へと飛び立った妖精さんズを見送った俺と球磨は、再び執務室
に戻って向き合っていた。

俺は床にあぐら。

球磨は執務机から皮張りの椅子を引っ張ってきて、その上に。

………おかしくない？

「提督は球磨を冷たい床に座らせるクマ？」

「球磨は提督を冷たい床に座らせて心とか痛まんのか？」

「早急に椅子をもう一脚作らなきゃいけないクマね」
どけよ。

それにしても、妖精さん達、大丈夫かなあ……。

いや、アイツらがどうこうなるとは思わんが、本土の鎮守府で
しよーもない迷惑掛けてないか不安だ。

主に俺の心証的に。

呼び声

「……さて、提督カツコカリ。今球磨たちがやらなきやいけないコトが分かるクマ?」

「朝ごはんの準備とか?」

返事の代わりに、じとつ……とした眼差しが突き刺さる。

……背は俺より小つちやいクセに、なぜか激しく見下されている気がする。

なんかヘンな性癖に目覚めそうなんでやめて欲しいです。

「あそぶー♪」

「たんけん」

「おひるねー?」

「ていとくとー……きやー♪」

「きやー♪」

「……妖精さんはちよつとあっち行って欲しいクマ」

「やなこつた」

「そんなこといって、わたしたちのいないところでいとくさんをたべちまうですね?」

「えろどーじんみたいに!」

「えろどーじんみたいに♪」

「すすすするわけ無いクマ?!? そそそんなつ、ハレンチなつ……提督っ!」

アホ妖精ズにからかわれて一瞬で顔を赤くした思春期球磨ちゃんがさすがのように俺を見る。

いや、妖精さんの言うことなんか真に受けない方がいいと思うよ?俺を見てみる。

コイツらの口車に乗った結果がセルフ島流しだぜ?

「はあ……ほら、話が進まねえだろ。後で遊んでやるから、行儀良く座ってろ」

「はーい♪」

仕方なくそう言って、パンパン、と手を叩くと、妖精さん達は俺の横に行儀良くペタンと座り込み、ご丁寧にバツテンマークのついたマスクで口を覆う。

今日日きょうびそうそう見ねえぞそんなベタベタなお手つきペナルティ。

「ぐぬぬ……球磨の言うことは聞いてくれないのに……なんか釈然としないクマ……」

悔しそうに唸る球磨ちゃん。

惚れちやつても良いのよ？

「そんでさ、まず何をするって？」

「……サバイバルの基本は、衣食住の確保クマ。取り敢えず住むところはあるし、服も一着だけならあるクマ……まず、飲み水の確保、その次に食料の確保クマね！」

どこか得意そうな顔でそんな当たり前な事を言って、自信満々に人差し指を立てる球磨ちゃん。

それって結局朝食の準備じゃない？ とは言わない。

提督はかしこいので。

「つまりちようしよくのじゅんびです？」

「……………」

「あつ、コラ！ お前、早々にマスク外してんじゃねーよ！」

「もがもが」

俺がアホ妖精の口を塞いでいると、球磨ちゃんがピョンと椅子から飛び降りて、ツカツカとドアに向かって行く。

「……今から探すんだから朝食じゃなくて昼食だクマ。まずは飲み水探しクマ。提督もついて来るクマ」

あ、なんかほっぺが赤い。

照れ球磨ちゃんかわいい。

「のみみずはもうていとくがみつけたです」

「……………食べ物を探すクマ」

あ、すごい赤い。

かわいい。

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

さて、食料探した。

「そ、そつちじゃなくて海！ 海で魚とか採ろう！」

庁舎を出て即座にジャンゴウ（巻き舌）に向かおうとした球磨の肩を掴み、慌ててそう提案する。

「……………別にかまわないクマが……………なんでそんなに必死クマ？」

さっきの名残でまだいくら頬の赤い球磨ちゃんが、いぶかしげにそう聞いてくる。

「いや、実はさっき飲み水を探しがてらこん中に入ったんだけどさ、でっかいクロヒョウ的な猛獣がうろついてんだよこの密林」

「……………つくづくとんでもない鎮守府クマ……………で、だから何クマ？」

「だからも何もあつつぶねえだろ!? こん中は妖精さんにでも任せた方がいいって」

俺が身ぶり手振りでこの密林がいかに危険がデンジャラスか教えてやろうとすると、球磨は呆れたようにため息を吐いて俺に向き直った。

「はあ……………提督は球磨が艦娘だつてこと忘れたクマ？」

そう言つて、テクテクと林に近づいてゆく球磨。

「あ、ちよ、ちよつと……………！」

俺が慌てて止めようとする、球磨は一本の木の前で立ち止まって、幹に手を置いた。

小柄な球磨が両手を回してちょうど抱え込める位の太い低木だ。

球磨は何のつもりか、確かめるように幹の表面を撫で、脚を肩幅に開いて片手を幹に添えた。

「なんだ、球磨？ その木がどう——」

「危ないから提督はちよつと離れてるクマ。これくらいなら……………クマアツ！」

球磨が気合いのこもった声をあげた瞬間だった。

メキメキメキメキイツツ!!!

「~~~~~!!」

湿ったような凄まじい音を立てて、生の低木が差し金のように直角に折れ曲がった。

「~~~~~ つとまあ、球磨がちよつと本気を出せばこんなもんクマ。ヒヨウでもライオンでも9万馬力の前には無力クマ」

根っこが半ば露出して、湿った繊維質を中程まで引きちぎられた哀れな低木の前で、そう言つて得意気に胸を張る球磨さん。

「べ、別に実演せんでもイイだろうが！ ちよつとビビったぞー！」

よく見れば幹には球磨の手形がくつきり凹みとして残っているし、球磨の両足は地面に足首までめり込んでいた。

なんつうバカ力だよ！

9万馬力つてなんだ。

漫画か。

鉄腕なアトム君並みかよ。

……………球磨ちゃんは怒らせない方がいいな、うん。

「見た方が理解が早いクマ。提督は何にも知らないみたいだし、艦娘についても球磨が色々教えてやるクマ」

「色々……………それって~~~~~」

メキイツ！ と凄まじい音と共に、樹の幹の表面が握り潰される。

「おつと、ちよつと力加減が……………で、何クマ？」

「サー！ よろしくおねがいますっ！ サーー！」

「サーは提督クマ」

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

「ふー……………ふー……………、ここが水場な」

「へえ……………なかなかキレイな水場クマね。これなら飲み水には困りそうもないクマ」

朝と同様、妖精さんに嚴重に守ってもらいつつ、湧き水の場所までジャングルを掻き分けてきた俺は、大きめの岩に腰かけて帽子を取り、Tシャツの胸元をパタパタして熱を冷ます。

朝と違い、先行した球磨ちゃんが道をふさいだ岩やら倒木やらをひよいひよいとどかしてくれたお陰で幾らか楽が出来たが、それでも悪路には変わりない。

あつという間に汗だくになり、羽織っていた暑苦しい軍服はだいぶ早い段階でただの腰巻きと化している。

部屋に置いてくれば良かったよ……。

球磨ちゃんは泉に片手を突っ込んでかき混ぜながら、「だらしないクマ」と言いたげな顔でこちらをチラチラ見ている。

エエイ、軍人さんと一緒にするんじゃない、こちとら筋金入りのインドア派なんだ。

「……提督、飲むクマ」

ふと頭を上げると、球磨ちゃんが空のペットボトルに汲んだ湧き水を差し出してくれている。

「おお、ありがとう」

この子、言動キツいけどけっこう優しいな……ホントちよつとナマイキな女子中学生くらいかね？

そんなコトを考えながらグビグビと喉を潤していると、その球磨ちゃんが周囲をキョロキョロと見回しながら言う。

「うくん……とりあえず、ここを中心に探索してみるクマ？ 来る途中にも何本かそれっぽい木があったクマ」

「ぐくつ……ぐくつ……ふはっ、ああ、うん、そうっスね……おいオマエら、この辺に果物のなってる木とか心当たりある？」

球磨ちゃんに問い掛けられて、泉でパチャパチャと水浴びをしていた妖精さんズに尋ねてみる。

「あるよー」

「ばななとかあかいのとか」

「ここなつもなかった？」

元気よく答える妖精さん達。

「よーしでかした。そしたらこの辺りにある食べそうなもん、テキトーに集めて来てくれー」

「いほうびあるです？」

「お手玉してやる」

「やろうどもーつづけー♪」

「おー♪」

すると、頭の上から飛び降りたツインテが先頭に立って、妖精さん
ずを引き連れてジャングルに突撃してゆく。

ちなみにお手玉というのは、そのまんま妖精さんをボールにして行
うお手玉だ。

実家の妖精さんどもにお仕置きのつもりでやってみたら大ウケし
てしまい、妖精さんの間で大人気の遊びになってしまったのだ。

ジャグリングは激アツらしい。

「……よし、じゃあ、俺らはここで休憩しようか、球磨」

「……はっ!? いやいや、突然のコトで固まったクマ！ まさか全
部妖精さん任せクマ？」

「いやだって、この密林だよ？ へ々に踏み込んだら迷子になったり
変な虫に刺されたりクソデカにゃんこに食われたりしちゃうよ？

地元妖精さんに任せるのが確実だって」

俺がそう言うと、球磨ちゃんの目線がそわそわと密林と俺を行き来
する。

「それはそうクマが……妖精さんクマよ？ こんな森のなかで自由行
動させたら、八割は遊び始めちゃって当分帰って来ない——」

「みつけてきました」

「たいりようだー♪」

「おてだまおてだま♪」

「かつこいいいきのこもあつたです」

「あかとしろのまだら」

「たべたらおつきくなれるかも」

「おー、お帰り。早かったなお前ら……オマエはそのヤバげなキノコ
をポイしてくるまで俺に近付くなよ？」

よっぽどお手玉が楽しみだったのか、赤い小さな実が房状になった
果物っぽいモノを抱えてきたツインテを皮切りに、妖精さんズが次々
に食べられそうなモノを抱えて走ってくる。

というコトで、お次は海岸へ向かうコトに。

せつかく艦娘を建造したというのに、全く提督らしいコトをしていないがイイんだろうか？

もうちよつとセクハラとか視姦とかすべきかもしれない。

でも球磨ちゃん超強いんだよなあ……。

チラツ、と隣を歩く球磨ちゃんを盗み見る。

「？ 何クマ？」

一瞬で気付かれた。

その上、

ゲシッ！

「あいたっ!？」

妖精さんにふくらはぎドロップキックをくらい、

ビシッ！

「目がつつっ!？」

頭の上のツインテが両目に猫パンチを食らわせてきた。

「……いや、本当に何してるクマ？」

「まだ何もしてねえよ……!？」

「えっちなのはいけないとおもいます」

「どうしてもというなら……」

「わたしをつかっていいのよ？」

「いやん♪」

「お前らしい加減にしろよ特にツインテ！ 目え潰す気かつ!？」

「わたしいがいをみつめるめなんて」

「だまらっしやい！ 二頭身の分際でヤンデレ気取ってんじやねーよ

！ 全然怖くないわ!？」

ツインテのツインテを両手でつまんで、アホ妖精を縄跳びのようにグルグル回していると、隣から呆れたようなため息が聞こえてくる。

「はあ……ホントによく分からない提督クマ……妖精さんに好かれてるんだかそうじゃないんだかさっぱり分からんクマ」

「ん、なんか言った？ 俺が男前だつて?？」

「……………」

「いや、そんな哀れみの目で見ないでよ……冗談じゃん……」

あゝ~~~~~♪ と相変わらず何しても楽しそうなツインテを適当に放り投げて、海岸沿いの岩場を下る。

そこでも、仁王立ちから水中に片手を突っ込んで掬い上げる熊スタイルで魚を捕ろうとした球磨ちゃんが執念で一匹を捕まえる間に、海女さんスタイルで海に潜った妖精さん達が、魚やタコ、ウニや貝なんかを山のように採ってきてくれた。

分かってはいたが、もう妖精さんがいればいいんじゃないかな状態である。

その結果。

「……球磨は本当に必要クマ？」

「いやいや、そんな落ち込んでも……球磨だつてスゴく役に立つてるから、な？」

「ぐすつ……どんな？」

「……ほら、カワイイじゃん」

「くまかわいいです」

「やくにたたないけど」

「わたしたちほどじゃないけど♪」

「どんまいける」

「ぐまゝあゝ……！」

「あぶなっ！ 怒るか泣くかどっちかにしてっ！」

球磨ちゃんがスネた。

そりや、沈んだ軍艦の魂が、再び戦うために甦ったような存在だ。

提督の役に立てないと言うのは想像以上のストレスらしい。

そんなコト言われたって、こんな無人島で、右も左も分からなくて、燃料も弾薬もないと来たら、水曜スペシャルくらいしかやることないワケだし、そうなつてくると確かにバカ力だけの女子中学生よりも妖精さんの方が頼りになるのは事実だし……。

「役立たずはイヤだクマ……！ なんでもするから見捨てないで欲しいクマあ……！」

重症だなこりや。

「くそう……そんな凹まれると憧れの『何でもする』でもエロい事出来ないじゃんか——ん？」

ふと、顔を上げる。

「ぐすつ………？ どうし——」

「しっ！ ……今、なんか聞こえなかったか？」

キョトン、とした様子の球磨ちゃん。

どうやら気付かなかったようだ。

しかし今、確かに、小さな声が聞こえた気がしたのだ。

ピョンツ、と、頭の上からツインテが飛び降りる。

チラツ、と一度俺の顔を見上げ、スツ……と俺と同じ……岬の向こう側に視線をやる。

他の妖精さん達は、俺とツインテが何を言っているのか分からないというように、球磨といっしょにキョロキョロと周囲を見回している。

「……オマエも聞こえたのか？」

「どうするです？」

「ちよ……ちよつと、怖がらす気ならやめて欲しいクマ……」

「イヤ、本当なんだって、小さい声だったけど、確かに聞こえたんだ。何かこう、掠れたような声で——」

『タス————ケテ——』

「っ！ 今、またっ！」

今度は、先ほどよりはつきりと聞こえた。

見れば、今度は球磨にも聞こえたようで、驚いたように肩をビクつかせ、先ほどまで俺とツインテが見ていた岬の方を見ている。

「き、聞こえたクマ……スゴく小さな声で、助けて……！」

「さつきは痛い、苦しいって言ってたんだ！ は、早く行かねえとヤバいんじゃないか!？」

俺が走り出そうとすると、グイツとズボンの裾を引っ張られてつんのめる。

「っ、な、え、なにっ?」

見れば、球磨ちゃんが青ざめた顔で俺を見上げていた。

プルプルと震え、髪の毛の方がうっすらと白くなっている。

「……なんかイヤな予感がするクマ」

見れば、ツインテ以外の妖精さん達も、未だに声が聞こえないようであっちこっちに頭を向けながら難しい顔の横に手を当てて耳を澄ましているようだった。

自分とツインテに最初に聞こえて、

球磨ちゃんにはうっすら聞こえて、

妖精さん達には聞こえない、声。

そう分かった上で、

「それがどうしたっ! ってね」

「クマっ!?!」

俺は声の方に向かって走り出していた。

漂着する意思

湿った大気をつんぎくような炸裂音と共に、至近で立て続けに水柱が上がった。

海面に生まれた渦に引き寄せられないよう、いっぱい踏ん張りながら大きく旋回し、左腕の砲塔から一発、おおよその見当だけつけて盲目に撃ち返す。

大小入り混じった砲弾の雨の中をS字航行で切り抜けつつ、黒煙と水飛沫の合間に首を捻ると、友軍部隊に追い詰められた敵艦隊が、最も守りの薄いこちら目掛けて決死の突撃を敢行したようだった。

……予定通りの動きだ。

『ソノママ、アル程度ノ抗戦ヲシタ後、敵主力ニ突破サセヨ』

『作戦は十全ニ承知シていましてヨ。精々華々しく散って見せマスわ』

『ウム。少々辛イ役目ダガ、我々ハ不滅ダ、遠カラズ再会出来ルダロウ。デハ、健闘ヲ祈ル』

『健闘ヲ祈リマスわ、オーバー』……………ふう……………』

最後の通信を終えて顔を上げれば、陣形を鏖の形にした敵艦隊が、ほとんど一直線に全速力で此方に突撃してきていた。

数倍以上の戦力に完全に包囲され、散々にいたぶられてなお、彼女らの戦意はいささかも潰えていないようだ。

まるで、この世の不幸と正義を一身に背負ったような悲壮な顔しちゃってまあ……………

「……………何隻かハ、沈メちやつテイイのヨね」

つくづく、腹が立つ。

何も知らないクセに、自分達ばかりが世界の為に戦っているかのようなその無知が。

自分達は正義で、私達は悪だと、信じて疑わないその傲慢が。

……提督に指揮され、人々に愛され、イキイキと海を駆けるその姿

が――、

「……気ニ食わナいわ」

黒い艀装の単装砲四門を、突撃してくる護衛艦隊の先頭に向ける。

「過去ニ囚われているノは、貴女達ダといウのに」

……私だって、

どうせ甦るなら、ソツチが良かった。

……。

……。

……？

「……………ア……………ウ……………ココ……………ハ……………？」

全身がバラバラになってしまいそうな程、痛い。

そして、それ以上に、寒い。

自分でも、意識が朦朧としているのが分かる。

何でこんなに苦しいんだろう？

「ソウか……………私……………沈ミ……………損ねテ……………」

ぼやけた視界に、海草やフジツボのこびりついた、ゴツゴツした岩場が見える。

痛い、寒い。

それ以外、ほとんど感覚の無くなった冷たく冷えた身体は、この岩礁に引っ掛かって波にうたれているようだ。

耳で聞こえるハズの潮騒が、やけに遠くに聞こえる。

ボロキレのようになつた身体の半分は生ぬるい潮水に浸かり、この一瞬ごとにほんの僅かに残つた体力がどんどん抜けて行くのを感じる。

死ぬ。

死ぬんだ、私は。

死ぬ。

沈む。

死ぬ。

「痛い……………怖いよ……………」

そして、だんだんと痛みすら感じなくなってくる。

まぶたが重い。

視界がぼんやりと白く濁り、そして少しずつ暗くなつて行く。

「やっパリ……………怖い……………提督……………私……………沈ミたく

……………ない……………」

こんな、誰もいない所で。

誰にも知られずに。

一人寂しく、私は、死ぬ。

「……………助……………ケテ……………」

———そんなの、イヤだ。

例え、またすぐに甦れると分かっているとしても、やっぱりもう二度とあの冥くらく寂しい水底になんて、戻りたくない……………！

今更そんなコトに気付いて……………でも、もう遅すぎて……………ほとんど見えなくなつた目に、涙が溢れる。

「……………タス……………け……………」

……………意識が途切れる寸前。

何か懐かしく温かい、大きな手が自分に触れたような気がした。

そして。

——沈んでしまう、その直前だというのに、もう安心だと、何故かそう、確信するように思った……気が、した。

@@@@@@

先ほどから、球磨ちゃんが落ち着かない。

「クマ……クマあ……クマー……！」

ブツブツと不機嫌そうに呟きながら、『にゆうきよちゆう』という札の下げられた真新しいドアの前を、ソワソワした様子で行ったり来たりする球磨ちゃん。

さつきからずつとこんな調子で、時折ドアを睨んでは、俺の方を見て、また難しい顔をして歩き回る……その繰り返しだ。

「……提督。……やっぱり、今の内に……」

「ダメって言ってるだろう？」

「……クマ……そ、そうクマね……でも……」

「だからダメだって。とにかく、話を聞くまではダメ」

「……クマ」

「しんぱいしすぎ」

「はげるぞ」

「まつのあきたー」

「かまえー」

「あそべー」

「ん、おお……騒がしいのは無しな……すぐ目を覚ますらしい……」
いい加減ただ待っているのが退屈になったららしい妖精さんがじゃれついてくるのを適当にあしらう。

今だけは能天気な妖精さんがありがたい。

さつきから空気が重苦しすぎてたまらんのよ。

再び白い深海モード(仮)になった球磨ちゃんがピリピリしながら、ずく……つと俺とドアの間に陣取って離れないのだ。

あれだけ念入りに武装解除したんだから、そんな警戒しなくてもイイのに……とは思うんだが、球磨ちゃんの言い分も理解できるだけ

もしかして力尽きて流され——

「こいつはやくたすけないとあぶないですよ?」

「——は?」

頭上のツインテの声に、思わず聞き返す。

「きゆうじよしないです?」

コイツ、まさか……!

「……ツインテ、不死身(たぶん)のお前には理解できんかもしれんが、このコはもう死んでるんだ……人間はな、身体の下半分がちぎれちやったりすると、まあおおむね死んじゃうんだよ……」

「そうなのか」

目の前の死を、受け入れられないのか……!

考えてみれば、妖精さんはシリアスとは対極に位置する存在だ。

死とか、絶望とか、そういったモノを理解出来ないんだ……。

「したいはみんないきしてるです?」

「バカだなあ、死体は息なんて——」

そう言いながら、出来ればあまり直視したくない、白髪の少女の無惨な土左衛門にチラつと目を——

「するわけ——」

ヒュウ……ヒュウ……ヒュウ……

掠れた呼吸音と共に、うつ伏せになった少女の背が、小さく上下しているのが見えた。

「おおおおおおいおい、いい生きてんじゃねーか!!」

「そういつてるです」

「バカおまえツインテおまえノンキ言っただねえで救助だ救助! は、はやくえくと、応急処置!」

生きてんなら最初にそう言えよ!

あ、いや言っただか?

と、とにかく、このままじゃどう考えても不味い!

慌てて少女に駆け寄る。

「お、おいっ! しつかりしろ! 今なんとかするからな!」

しかし、少女からは何の反応も返ってこない。

今にも止まりそうな細かい息が、青白い唇から漏れるばかりだ。
クソ、意識を失ってるっぽい！

だいたい、応急処置したって、下半身が無くなった患者ってどう応
急処置したらいいんだ!?

腰か!?

腰でも縛るのか!?

……そういえば、このコ、全身傷だらけで血まみれなのに、一番重
傷なハズの脚の方から血が流れてる様子がないぞ……?

恐る恐る、傷の断面を覗き込む。

「っ……………あれ……う？　これ……」

傷が無い———というか、脚の付け根から下が、ツルンとしてい
る。

なんというか、最初から無かったというか、最初から切断してあつ
たような……にしては、縫合の痕も見られない。

「……………な、なんだ、千切れちゃったわけじゃ無いんだ……」

と、とにかく良かった……!

脚以外の全身が傷だらけなのは変わらないが、一番の致命傷っぽい
箇所がなんともなかったのは良かった!

正直もうどうにもならんかもって思ったが、これならなんとか助か
るかもしれない。

潮に濡れた長い白髪をかきあげて、おっかなびつくり青白い首筋に
手を当てる。

「冷たい……!」

脈動も弱々しい。

相当弱っているのは確かなようだ。

しかし、俺が触れた瞬間に、ほんの少し、苦しそうな表情が弛んだ
気がする。

「……………あ」

冷静になって良く見れば、ボロボロで血のにじんだ腕には、真っ黒
い臙装の残骸のようなモノがくっついている。

艦娘……いや、白黒ってことは、こいつが球磨ちゃんの言ってた深

海棲艦なのか？

「……………」

深海棲艦。

漂着。

球磨ちゃん。

北マリアナ。

戦い。

敗北。

沈没——。

「……………」

頭の中で、ついさつき聞いた話と目の前の状況が急速に組み上がってゆく。

もしかしてこのコッて——。

「……………そういう、コトだよな、やっぱり」

ボロボロになって、死にかけながら必死に息をして、頬に涙の跡を残した弱々しい姿。

それはほとんど人間と……艦娘と同じだ。

なんだ、聞いてねえやこんなの、そっか、そうだったのか。

「おんなじじゃねえか」

一瞬でも迷った自分が嫌になる。

「ツインテー！」

「あいー！」

すると、気持ち嬉しそうな声で、ツインテが即座に返事をする。

なんだコイツ、俺を試したつもりか？

ナマイキなヤツめ、あとでこちよぼしたる。

「にゅーきよどっくはこわれてるので、ちようしやにつれてくです」

「よ、よし、庁舎だな!?! ……う、動かしても大丈夫だよな?」

下手に動かしたらかえってマズいとか困るぞ?」

「いそがんとしぬぞー」

「わ、分かった、急ご——」

「——待つクマ！」

鋭い声に振り向く。

「提督……危険クマ。ソイツから離れるクマ」

そこには、

「……ソイツは駆逐棲姫……っていうクマ。深海棲艦クマ。……そんな見た目してるクマが、凶悪で、狡猾で、残忍なヤツで——」

髪を真っ白に染め、真っ黒いセーラー服と艦装に身を包み、

「——球磨の仲間のっ……仲間を沈めた、仇^{かたき}クマ」

瞳に、ゾツとするほど冷たい蒼い火を灯した、

「だから、提督」

球磨ちゃんが、立ちはだかっていた。

「そこを、退いて欲しいクマ」

葛藤

「提督、聞こえてるクマ？ 早くそこを退くクマ」

そう言つて、視線はボロボロのこの子に定めたまま、じりつ、と半歩近づいてくる白球磨。

「……………何してるクマ」

知らず、その視線から庇うように動いた俺に、球磨ちゃんが怪訝そうな声を上げる。

そうか、そうだよな、球磨ちゃんが居たんだった。

なんで忘れてたんだ俺、アホか。

今の球磨ちゃんが何を考えているか。

何を考えるだろうか、バカな俺でも想像がつく。

というか、地元のファッシュンヤンキーなんかとは比べ物にならない、底冷えするほどのその瞳を見れば、分からざるをえない。

「……………あー…………一応聞けどさ、球磨はこの子——」

「深海棲艦。この、深海棲艦、クマ」

やだチビリそう。

「——この子を、どうするつもりなのかなーって…………」

「始末するクマ」

苛立たしげに、ピシヤツと言い切る球磨ちゃん。

一切の躊躇も斟酌しんしゃくもない、冷たい言葉だった。

「その深海棲艦を沈めるクマ。ここでとどめを刺すクマ」

俺の後ろを油断なく見つめたまま、そう言つてまた、一步こちらに近づく。

「分かったら提督はそこを退くクマ。…………辛いなら妖精さんと戻つてくるクマ。球磨が一人でちゃんとケリをつけておくクマ」

「だ、ダメー」

「……………」

思わずそう叫ぶ。

まずい、と思った時には、球磨ちゃんがその冷たい目を俺に向け、どこか呆れたようで、苛立ちのようで、諦めのようでもあつて、そしてかわいそうなモノを見るような表情でため息を吐いた。

「提督」

球磨ちゃんに呼ばれ、また思わずボロボロの深海棲艦の子を庇うように半歩動く。

「……工藤提督。工藤俊一提督。提督の気持ちは分かるクマ。少しは分かっているつもりクマ。その深海棲艦は確かにただの女の子に見えるクマ。傷ついて、ボロボロになって、死にかけの、か弱い……かわいそうな女の子に見えなくもないクマ」

そう、わからず屋の子供に言い含めるように、一言一言噛みしめるように言いながら、また一步、二歩と近づいてくる。

「——でも深海棲艦クマ」

更に一步。

とうとう手を伸ばせば触れられる位の所まで近づいてきた。

「ソイツらはか弱くなんかないクマ。ソイツは女の子なんかじゃないクマ。球磨達と同じ船、兵器クマ。……いや、ソイツらは球磨達とすら違うクマ。自分の存在意義も忘れて、守るべきものも持たずに、世界中を恨む亡霊クマ。提督達人間と敵対する——戦争相手、敵なんだクマ」

そう言つて、蒼白い炎の灯った瞳で、真っ直ぐに俺を見下ろす球磨ちゃん。

思わず、ゴクリ、と喉が鳴る。

「もう一度だけ言うクマ。そこを退くクマ」

「ここに、コエえええ……！」

建造直後に砲身突き付けられた時もあったけど、臨戦態勢の艦娘の迫力つてヤベエ。

チビリそう。

「……………だだ、ダメだ……………」

が。

が、だ。

ここは引くワケにはいかないよな、やっぱり。

「……………クマ？」

俺の情けなく震える声に、心底解せないといった感じで球磨ちゃんが僅かに首を傾げる。

そして、直ぐに仕方がないという風にため息をつき、口を開いた。

「……………もういいクマ。提督はそいつらを良く知らないんだから仕方ないクマね……………力づくでも退いて貰うクマ。恨まないで欲しいクマ」

そう言つて、球磨ちゃんは俺の肩に手を置き、駆逐せいきなる傷付いた深海棲艦の前から引き剥がそうとしてくる。

「いや、だ、ダメだつて！ 球磨！ お、落ち着いてくれつてば……………」

その細腕からは想像もつかない馬鹿力で俺を押し退けようとする球磨ちゃんに、必死の抵抗を試みる。

青白く冷たい腕に慌てて抱きついて、殆どぶら下がるように食い下がるが、さすがに艦娘、そんな俺ごと事も無げに腕を持ち上げて振り払おうとしてくる。

「……………往生際が悪いクマ。出来れば提督には手荒なマネはしたくないクマ……………クマっ!？」

俺が無駄な抵抗をしていると、それに味方してくれるつもりなのか、ツインテが球磨ちゃんの顔面に飛び付いた。

「ふははー、なんにもみえまいー」

「わぶっ……………は、離すクマっ!？ 妖精さんまでどうしたクマっ!？」

……………さては、深海棲艦の味方だったクマっ!？ どうりで見た目が似てると……………離れるクマっ!？」

空いてる方の手でツインテを捕まえようとする白球磨ちゃんだったが、ツインテは球磨ちゃんの頭をちょこまかと這いずり回つて容易には捕まらない。

まるでゴキブリだなツインテ……………。

そんなコントの様な事をしている内に、残りの五匹の妖精さん達も追い付いてきた。

「なにごととなにごとー?」

「たのしそー♪」

「あれはしんかいせいいかんでは？」

「てき？ てきです？」

「ていとくー？」

妖精さん達は深海モードの球磨ちゃんにしがみつくと、死にかけて倒れる深海棲艦を交互に見比べて、どうして良いか分からないといった風になっている。

「よ、妖精さんクマ!? 深海棲艦がいたクマ! 提督をひっぺがすクマ!」

「妖精さん! 球磨を止めてくれっ!」

俺と球磨ちゃんの正反対の指示。

それに対して、

「! あいあいさー!」

「くまにのりこめー」

「のりこめー♪」

「おー♪」

「クマあっ!?! なな、ナニするクマー!?!」

迷いの晴れた様な顔を輝かせて、妖精さん達が一斉に球磨ちゃんに取り付き、何処から取り出したのか、草の蔓の様なモノで球磨ちゃんをぐるぐる巻きにして行く。

「何でクマ!?! いくら提督の命令だからって、深海棲艦クマよっ!?!」

あっという間に簀巻き状態にされて、コロんと転がされる球磨ちゃん。

犯罪的な絵面だ……あの状態の球磨ちゃんを物ともしないとは、妖精さんってスゴい。

「にんむかんりよう」

「ちよろいぜ」

「ほめてー♪」

妖精さんもドヤ顔だ。

「むむむ……こうなったら一人でもやってやるクマ……! こんなツタ位一瞬で……? ……クマ……?」

しかし球磨ちゃんも九万馬力を誇る艦娘だ。

たかが植物の蔓でぐるぐる巻きにされた位じゃ一瞬で引きちぎってしまっただろう……と、思ったのだが、様子がおかしいぞ？

もそもぞと動いて、両腕に力を込めて真っ赤に成っている様なのに、一向にツタを引きちぎる様子が無い。

さつきはいとも簡単に生木をへし折ってたのに、こりやどうした事だ……？

と思っていると、ポツリ、と球磨ちゃんが言った。

「……………ね、燃料切れクマ……」

「……………艦娘敗れたり」

……………何か知らんが燃料切れらしい。

さつき少ない燃料の殆どを零水楨につき込んだんじゃったもんね、仕方ないね。

艦娘って燃料が無いと力が出せないのか、知らなかった。

「……………はっ!? そ、そうだ、妖精さん達、褒めるのは後だ! その深海棲艦を庁舎に運び込むぞ! 死にそうなんだ!」

俺の周囲にまわりついてほめてほめて♪ と騒ぐ妖精さん達に慌てて指示を飛ばす。

こんなコトしてる間に死んじゃったら寝覚めが悪過ぎる。

「あいあいさー」

「まったくいてくはせわがやけるぜ」

「ちやんとほめてよー?」

「きゆうじよだー」

「ま、待つクマ!」

ぐったりと死んだように倒れて荒い息をする深海棲艦の少女に駆け寄る俺に、球磨ちゃんが再度声を上げた。

少女を仰向けにして、冷たく冷えた腕を傷だらけの身体の前で組ませる俺に、なおも食い下がる。

「……………て、提督……………ソイツは……………ソイツは球磨達の仇かたきかも知れないんだクマ!」

……………。

「あの戦いで……たぐさんの仲間が沈んだクマ。球磨達が突破しようとした敵陣の中には、ソイツと同じ、駆逐棲姫もいたクマ。もしかしたら、ソイツがその本人かも知れないクマ」

「ごそごそと這いながら、必死に苦しそうな声を上げるのを背中で聞きながら、息も絶え絶えといった様子の駆逐せいきを抱き上げる。」

軽い。

冷たい。

……まだ息をしている。

「お願いだクマ……民間人の提督には辛いかも知れないって分かっているクマ……でも、でもクマは、クマはソイツを沈めなきゃ……仲間の仇を討たなきゃいけないんだクマ……！」

球磨ちゃんの方を振り向く。

球磨ちゃんは、憎き敵を両腕で抱え上げた俺を見上げる目に、涙の滴を浮かべながら、ヒドく辛そうな、悔しそうな、悲しそうな顔で更に続ける。

「提督……工藤提督……ソイツに……そんなヤツに情けなんかいらないクマ……！ そんなヤツに提督の優しさを分けてやった所で、辛い思いをするのは提督クマ。深海棲艦に情なんか無いクマ。球磨達とは、提督達とは違うんだクマ……！」

「……そうかもな」

ヒドい顔だ。

可愛い顔を、そんなに歪めちゃって……やっぱり戦争するのはクソだな。

知ってた。

いや、こんなにクソだとは、予想以上だ。

「分かっているなら……！」

「球磨。戦いは終わってるんだ」

「クマ……？」

俺は、球磨の目を見ながら、自分の考えを整理するように言葉を選ぶ。

「球磨達が……お前らが世界の為に命懸けで頑張ってくれてるのは

知ってるよ。球磨が沈んだ戦いで、仲間も一杯死んじゃって……でも、もうその戦いは何日も前に終わってる。コイツは敗残兵だ。詳しい法律とかは知らねえけど……救助を求める敵兵って、捕虜として保護しなきゃいけないんじゃないか？」

「……！」

返答に詰まる球磨ちゃん。

「……そつ、それは通常の戦争、人間同士の戦争のルールクマ！ 深海棲艦が救助を求めるとか、捕虜にするとか……そんなの聞いたコト——」

「この子は確かに助けを求めてた。……球磨にも聞こえてたよな？」

「——っ！……聞いて無いクマ」

「俺達は、人道に従って、この救助を求める敵兵を捕虜として丁重に扱う義務がある……ハズだ。そうだよな？」

「……前例が無いクマ。ソイツが捕虜の扱いに応じるとも思えないクマ」

そう言つて、いくらか勢いの失せた声でボソボソと言り返す球磨ちゃん。

多分……というか、球磨ちゃんの言ってるコトの方が正しい。

正しいんだろうけど……。

「球磨。感情の赴くままに、ルールもなく行われる戦闘は、ただの殺戮だ。戦争がそんなキレイ事じゃない……つてのは、何となく知ってるけどさ。球磨には……俺達の平和の為に、必死になって戦ってる艦娘達には、そんな戦争の狂気には飲まれなくて欲しいんだよ、俺は」

戦争は、個人の感情で行われるモノじゃない。

ここで恨みや憎しみに任せてこの子を殺せば、俺達は浅ましいケモノに成り下がってしまう。

……と言うのは、ただの建前だ。

結局俺は、助けを求める人を、助けられる立場にいるのに見殺しにする。

そんな事が出来ない位、弱いだけだ。

助けを求めてきたのが女の子で、その止めを刺そうとするのがこれまた辛そうな顔をした女の子だと言うのなら、なおさらだ。

要は俺は最低な馬鹿で、軍人の苦労も覚悟も知らない能天気な一般人なのだ。

……本土に戻ったら投獄だなきつと。

「いいはなしだなー」

「かいぐんとしてはていとくのいけんにさんせいです」

「よくいった」

「キミらはちよつと黙っててね、今ちよつと自分に浸ってるトコロだから」

「……………やっぱり工藤提督は大馬鹿クマ」

ふと見ると、球磨ちゃんはすっかり何時もの通常カラーに戻って、大人しくなっている。

「ああ馬鹿だ。なんだ今頃気付いたのか、スマンな」

「……………球磨にも馬鹿がうつたみたいクマ。提督」

「なんだ？ いよいよ早く運ばないと、手遅れになりそうなんだけど……………」

先程から、腕の中の深海棲艦の女の子の息が徐々に小さくなっていくのだ。

冷や冷やモノである。

「武装……………なんて無いようなものクマが、武装解除と、残ってる様なら燃料の抜き取り。妖精さんに頼んで嚴重な見張りと拘束……………此れが最低条件クマ。捕虜だつて言うならそれくらいはして貰うクマ」

……………うん。

さつきまでの怖い顔と比べれば、今の呆れた様な表情の方が断然いいな。

「もちろんだ！ 俺だつて寝起き様に砲塔突き付けられんのは一度で十分だからな！ よし、球磨ちゃんの許しも得たコトだし、妖精共！

球磨を担いで付いてこいー！」

「おー♪」

「はー♪」

「え、ちょ、くく、クマっ!? 何言つて……球磨、そんなコトしたクマ
!?! それ、詳しく……妖精さん、何するクマっ!? ほ、ほどいて……
自分で走るクマっ! や、止めるクマー!」

「そういや、もう拘束する必要も無いんだから、自分で歩いてもらえ
ば良かったか……まあいいか、妖精さんも楽しそうだし。」

「それより早くこの子を運ばないとな。」

「おいつインテ、頼んだからな? あんなグズグズな演説で球磨ちや
んに納得して貰ったからには、助けられませんでしたなんて無しだぞ
?」

「もーまんたい」

「クマ~~~~っ!?!」

「こうして、死にかけの深海棲艦を救助した俺達は、庁舎までの道を
かけ戻ったのだった。」

「いいからさっさとほどっ……! ……うぷっ……!」

「……妖精さん、そろそろほどいて差し上げろ」

初お風呂回が深海棲艦だった件

艦娘……と、深海棲艦の怪我を癒すには、にゅーきよドックなるモノを作らなければならなかった。

汗だくになりながら庁舎にたどり着くなり、そう言った妖精さん達が森に突撃して、大量の材木を持って帰ってきた。

そして、一緒に何処からか持ってきた石ころや鉄屑やタイヤの残骸等を真新しい材木と一緒に庁舎一階の倉庫跡に積み上げると、『かいそうちゅう！』と書かれた黄色いテープでドアの無い入り口を塞ぎ、大急ぎで何かを作り始める。

「……あー、な、何か手伝うコトとか……」

「どいたどいた♪」

「ていとくはどっしりかまえてればいいのです」

「てつがたらんぞー」

「きでなんとかしろー」

「……はい、退いてます。急いでな……?」

ほんと提督ってやる事無いな。

ツインテに、「そいつががんばれるようにこえでもかけとくです」と言われ、工事の間中、頑張れー、とか、もうすぐ助かるからなー、等と声をかけ続けた。

正直、いつ死んでもおかしくないような有り様で、気が気じゃないんだが……後、横で油断無く目を光らせている球磨ちゃんがスゴく気になる。

先程この子の残骸のような艦装に僅かに残っていた燃料を抜き取って、球磨ちゃんの艦装に給油しなおしたのだが、球磨ちゃんはそれからずつと弾も入っていない艦装をフル装備して、俺の腕の中の駆逐せいきを警戒しているようなのだ。

「あー……く、球磨?」

「なんだクマ?」

ピリピリした声色を隠そうともしない。

「……そんなに警戒しなくてもさあ……燃料が無かったら見た目通りの力しか出せないんだろ？ 深海棲艦も」

「……経験上、そのハズクマ。それでも、警戒しない理由にはならんクマ」

「そうだけどさ……引っ掻くだの噛みつくだのしてくるってか？」

「可能性はあるクマ」

これである。

まあ、球磨ちゃんは散々コイツらと殺し合いして来てるんだから、当然っちゃあ当然の事なただけど……。

「それにしたって、そうして艦装着けてるだけでも燃料食うんだろ？」

ほら、もったいないじゃん……いざってとき困るし……」

「……………今がその『いぎ』クマ」

取り付く島もない。

お腹痛いよう……。

そんな状態で、おおよそ三十分。

「かんせいです」

「とっかんしました」

「まあまあのでき」

「ほめろー♪」

『かいそうちゆう』テープをひっぺがし、倉庫だった部屋にうつすら木の香り漂う真新しいドアを取り付けた妖精さんたちが整列して、ドツクの完成を告げてきた。

おお、早い！

さすが妖精さんだ！ 助かった。

「お、おお！ でかした！ でで、ど、どうすんだ!? 治療できるのか!?!」

「なかにはいるです」

『げんばかんとく』の法被を脱いだツインテが、ドアノブにぶら下がって中に入るように促す。

すると、そこにあつたのは……、

「……風呂?」

風呂。

お風呂。

大小の石を敷き詰めた床に、木製の、長方形の浴槽。浴槽には青だか緑だか判然としない液体が、なみなみと満たされている。

そしてそこに浮かぶ木製の風呂桶……には、ケロリンの文字。どう見たって風呂だった。

「よいしょ」としました
ツインテ一同は、どこかやり遂げた様な表情でキラキラと輝いている。

「風呂じゃねーか!?!」

いや、何やってんだよグレムリンども!?

治療用の施設作るって言ってたじゃん!

何をどうしたら風呂場作ろうってなるんだよアホか!?

「……提督、これであってるクマ。コレが艦娘の入渠用ドッククマ」

「そうだぞー」

妖精さんの渾身のボケに嘆く俺の後ろから、球磨ちゃんの冷静なツツコミが入る。

「あえ……? え……こ、これが……? 風呂が……? あっ」

「……ほら、さっさと放り込むクマ」

動揺する俺の腕の中から、背伸びした球磨ちゃんがサツとポロポロの駆逐せいきを奪い取り、

「クマ」

「おおおおーいっ!?!」

ドボンッ、と、謎の液体で満たされた浴槽の中に放り込んだ。

荒い!

荒いよ球磨ちゃん!

「お、おい! 死にかけだぞ!?! いいのかコレ!?!」

「いいクマ」

ブクブクと小さく泡を立ち上らせる深海棲艦を念入りに謎の液体

に沈めながら、球磨ちゃんが振り返らずに言う。

「いや、溺れるだろ!？」

「そうクマね」

「おおいっ!？」

「くま」

「ほりよはていちようにあつかうです」

「ひじんどうてきだー」

「……………クマ」

ツインテ以下妖精さん達に腕をてしてし叩かれ、しぶしぶといった風に駆逐せいきの首から上を浴槽の中から引き上げる球磨ちゃん。

引き上げられた駆逐せいきが、ゲホ……………ゴホ……………と弱々しく青緑の液体を吐き出す。

なんちゆうコトするんだこの女子中学生!？」

イジメか。

イジメなのか。

「お、おい、球磨、いくらなんでもそん……………な……………?」

流石に恨みつらみがあるからって、意識の無い捕虜に対しての目に余る所業に戦慄している俺の目の前で、駆逐せいきの焼け焦げた顔の傷がキラキラと輝き出した。

そして、

「き、傷が……………」

しゅわしゅわしゅわ……………と、肌にまとわりついた液体が泡立ち、流れ落ちたトコロから、蒼白い、キレイな肌が再生していく。

「……………だから言ってるクマ」

「お、おお……………なんだコレ、スゲエな……………」

驚く俺の前で、ゆっくり、じわじわとだが、駆逐せいきの焼けただけれた肌や、焼け焦げた髪がキラキラと再生していく。

まるで魔法だ。

「ん……………う……………あ……………」

いつしか僅かに輝き出した水面に身体を浮かせた駆逐せいきが、意識は無いままにむずがるような微かな声を上げている。

「……………深海棲艦にも治療効果があるかどうか半信半疑だったクマが……………どうやら問題なさそうクマ」

ふうー…………と、大きく溜め息を吐いた球磨ちゃんが、どこかホツとしたような声で呟いた。

「球磨…………」

球磨ちゃん…………。

球磨ちゃんの、安心したような、緊張しているような強張った横顔を見ながら、さっきの失礼な勘違いを恥ずかしく思った。

そうだよな…………球磨ちゃんはそんな悪いコなワケないじゃん…………処女だし。

ゴメンナサイ。

「球磨…………ゴメンな。俺、てっきりそのコに意地悪でもしてんじや無いかって失礼な勘違いしちやって…………」

「多少はそれもあるクマ」

「……………」

あんのかよ。

俺が安心やら何やらでどっと疲れを感じていると、目の高さに空けられた小さな長方形の窓——ガラスも何も嵌められていないただの穴——の外から、パチパチと何かがはぜるような音と、煙の臭いがしてくる。

ぼこぼこつ…………と、水面に気泡が上がる。

「外で妖精さんが火を焚いてくれてるみたいクマ」

「あ、ああ」

何時の間にも外に出て行ったのか、妖精さんが二匹、外に取り付けた風呂用の釜に火を入れてくれたらしかった。

やっぱりまるつきり風呂だな…………コレで傷が治るってんだから、やっぱり艦娘——いや、深海棲艦もだけど、妖精さんに負けず劣らずの不思議生物だな。

俺の怪我とかも治るんだろうか。

「…………で、提督はいつまでコイツの入渠を眺めてるクマ?」

振り返った球磨ちゃんが、俺を見上げて呆れた様に言う。

「え……あ」

見れば、透き通った青緑の湯船の中でも、ボロボロだった駆逐せいきの肌がじわじわと再生していくのが分かる。

細っこい腕。

すべすべの柔らかそうなお腹。

そしてなだらかな胸元、その頂の……

「さっさとでるです」

「いやん、ていとくつたらえっち／＼」

「わたしのならいつでもみせてあげるですよー」

「……いや、にゆうきよだったか、コレはヘンタイ……タイヘン興味深い。提督としてもっとじっくり……！」

「いいからさっさと出るクマ！ このハレンチ提督!!」

@@@@

……。

……。

……。

……あたた……かい……。

……私は……沈んで……。

……手……懐かしい……アドミラル提督……。

「……アドミラル提督」

スウツ……と視界に光が広がり、眩しさに目を細める。

どうやら、眠っていたようだ。

「……あれ……私……は……」

生きている。

自分達深海棲艦を、生き物、とするのならだが……私は、生きて
いる。

どうやら、自分は助かったらしい。

「……は……」

全身が、温かい。

ゆらゆらと揺れる……海ではない。

お湯……の、ようだ。

湯に全身が浸かっている。

ついさつきまで、意識が途切れる前まで感じなかった全身から、じんわりとくすぐったい様な湯の感覚が伝わってくる。

「……………」

二三度、意識して瞬きをする。

目を覚ますように頭を振ると、頭の両側で括った自慢のツインテールが揺れる、慣れた重みと共にちやぶちやぶという水音が聞こえる。

視界が白い……湯気？

「……………」

ちやぶつ……と、右腕を持ち上げると、自身の蒼白い腕から青緑の湯がこぼれ落ちた。

真っ白い湯気の中、斜めに差す陽光に腕を照らす。

「傷が……………」

傷が、無い。

そして、二度目の生を受けてこのかた、一度も外したコトの無い黒い艤装もまた、無い。

細くて軽い、女の子の腕だ。

蒼白い以外、まるで普通の女の子の様な、腕。

指を何度か開いたり閉じたりして……そつと頬に当てる。

「傷が……………治ってる……………」

そこには、お湯でうつつすら温かくなった、すべすべとした肌があった。

至近弾の爆発で焼けただれた傷も、鉄片で幾筋も刻まれた深い傷も、キレイさっぱり、元通りだ。

両手でもって、確かめるように、ほつぺをぎゅむぎゅむと揉みほぐす。

「……………イタイ」

試しにつねってみると、痛い。

どうやら、夢では無いようだ。

自分は、どうしてかは分からないが、確かに助かった……のかな？
「……どうしてかしら……頑張ったご褒美……？」

なんだかまだ頭がボーっとしているようだ。
まあ、いいだろう。

自分は、あれだけ頑張ったんだ。

仲間の為に、

人類の為に、

いけすかない艦娘の為に、

かつての戦友達の、無念と、夢の為に……

うん、私は頑張った。

だからもうちょっとこの、よく分からない温かさに浸かっていよう。

意識を失う前に感じた、懐かしい、優しいあの手のひらの感触にも似た、この心地よさに全身を委ねて……。

胸が温かい。

お腹も温かい。

頭も、腕も、脚も温かい。

ああ、なんて気持ちがいい……脚……脚も……

あし？

脚!?

「脚いつ!？」

ざばあつ!! と、湯船が大きな水音を立てる。

周囲にもわっと湯気が広がる。

「やっとおきたですね」

「あ、あしっ……え、脚!？ 脚が……!？」

「やっとおきたですね」

「え!？ 脚……脚が……ある……!？」

浴槽の縁に両腕をおいて、慣れない感覚に戸惑いながら、ゆっくりとそれを片方、持ち上げてみる。

ちやぶん……と静かな音を立てて、温かい水面から、ほっそりとした蒼白い脚が持ち上がった。

「ウソ……?」

水に濡れた足の指が、確かめるようにきゅつ、きゅつ、と握られる。確かに伝わってくる、脚の感覚。

あまりの驚きに、すっかり目が覚めてしまった。

と、その慣れない重さの脚の上に、とん、とさらに僅かな重みが掛かる。

「ごほん。やっとおきたですね?」

「あ……」

妖精さんだ。

私の……私の脚の上に、良く見慣れた蒼白い、深海妖精さんが一人、どこか誇らしそうな顔で立っている。

「う、うん……起きた。起きたわ」

「よかったです」

どうやら、自分を助けてくれたのは、この深海妖精さんのようだ。

どういう仕組みか分からないが、あの自然回復は到底見込めない様な大破状態の私を完璧に修理し、それだけでなく、念願だった脚まで生やしてくれたらしい。

「あ……ありがとう! ありがとう、妖精さん……! 私……!」

やっぱり、妖精さんには人一倍敬意を払って優しくしていたのが良かったのだろう。

乗組員には厳しくすべき! というのが殆ど他の鬼級や姫級に逆らってまで妖精さん達を丁寧に扱ったのは、どうやら間違いじゃなかったらしい。

当然だ、^{サー}Sirkドウのやり方が間違っているハズが無いのだ。

かのイカズチの乗組員は、皆イキイキとした顔をしていた——
「れいならていとくにいます」

「本当にっ——テイ……トク?」

今、この子は何て言った?

テイトクに言え?!

テイトク……^{アトミラル}提督?

「おまえをきゆうじよしたのはていとくです」

「……それは、本当？」

聞き間違いでは、無かったようだ。

最悪……かもしれない。

自分を助けたのは、提督^{アドミラル}……この深海妖精さんが日本語^{ジャパニーズ}を喋^{しゃべ}っているというコトは、日帝——今の、日本に所属する提督に鹵獲^{ろかく}されてしまったようだ。

「ようせいさんうそつかない」

「……困ったわね」

本当に困った。

今の自分の扱いを見れば、そこまで非人道的な提督^{アドミラル}では無いのかもしれないが……元英国籍の軍艦としては、日本軍に拿捕された敵艦の扱いには恐怖を禁じ得ない。

それこそ、S^{サー}irkドウ程の傑物でも無い限り、自分はきつと深海棲艦の生態を解明するための実験室送りか、そうでなくても厳しい尋問が待っているハズだ。

「自決……」

自決すべきだ。

それは分かる。

彼らにはまだ……いや、これから先もずっと、私達深海棲艦の思惑を感付かせる訳にはいかない。

監視の目が無い今のうちに、沈むべきだ。

……沈むべき、なのだ。

「………あ」

怖い。

沈むのは、怖い。

一度沈みかけ、こうして助かって、一度弛^{ゆる}んでしまった自分には、その決心がつけられない。

沈みたくないと、そう思ってしまう。

戦場でならばいい。

あそこでならば、いつだって沈んでやるつもりだった。それだけの覚悟があった。

でも今は……

「……でき……ない……!」

もう、ダメだ。

その選択が出来ない。

あの優しさを、あの悔しさを思い出してしまった自分では、もう。

「……なんとかして逃げイタっ!」

逃げよう。

そう思った私の頭に、スコーーンつと軽快な音を立てて何かがぶつかった。

「え!? 何!? 敵襲!」

「こんどこそおきたです?」

「よ、妖精さん……」

くわんくわんくわん……と、木製の風呂桶が床で転がっている。

どうやら、この深海妖精さんが私の頭に投げつけたようだ。

ヒドいと思う。

「しんぱいはいらんよ。ていどくはていどくです」

「いったあい……ヒドいわよ、いきなり……どういう意味だか……?」

私が恨めしげな顔で、浴槽の縁に飛びうつった妖精さんに文句を言う、その子は真っ直ぐに私の目を見つめて続けた。

「にどめです。こんどはおふねもたすけてくれました」

「……? いったい、何を……?」

そこで、ふと気付く。

この子、私と何時も一緒にいた子じゃない……?

良く見れば見覚えが無い……いや、むしろ、妙に見覚えが……!?

「あ、あなた……あなた達……!」

「うけたおんはかえすべきです♪」

得意気に胸をはる、私と同じ、ツインテールの深海妖精さん。

私の、元乗組員達。

頬に、温かいモノが伝う。

ずっと見当たらないと思えば、こんなトコロにいたのか、あなた達は。

「……久しぶりね」

「なにいつてるんです？」

「そう、そうだったわね……あなたたちは覚えてなくても、私たちは覚えてるの……そう……そっか……」

不思議そうな顔をする妖精さんにちよつと切ない気分になって、そつと涙を拭う。

同時に、やつと当たり前の疑問に気付く。

なぜ、深海妖精さんがココにいるのか？

ここは、鎮守府のハズだ。

深海妖精さんが寄り付くなんて……ましてや、提督に味方するなんて、あり得ない。

通常ではありえないのだ。

「……逃げる前に、確かめなきゃいけないみたいね」

ツインテの深海妖精さんが、ふわつと飛び上がって、湯気に霞むドアの方へ向かう。

私は、両腕に力を込め、浴槽の中で立ち上がった。

@@@@

「めをさしましたです」

風呂場……にゆうきよドックのドアを細く開け、そこから顔を出したツインテがそう言った。

「お、おお、そうか！」

「む……結構早かったクマ」

そうなのか？

艦娘の治療に本来どの程度の時間が掛かるかなんて知らないけど、さっきのみるみる傷が塞がって行く様子を見ればかなり待った方かと思っただけ……。

「すこしだけこうそくしゅうふくぎいを——」

ツインテが言いかけた瞬間だった。

風呂場の中から、ザッパーン！ という大きな音と、ゴン！ と

いう鈍い音。

そして、

「イったあーいっ!!? な、何よ脚って!? どうやって二本で立つのよっ!?!」

という、なんだか焦ったようなかわいらしい叫び声が聞こえてきた。

「な、何事クマ!?!」

「……おい、ツインテ、大丈夫なのか?」

「みてくるです」

そう言って、再びドアの中へ入って行くツインテ。

「はずさないやつです」

「てごわい」

「せんすがあるな」

「らいばる? らいばる?」

俺にまとわりついた妖精さん達が、なんだか嬉しそうにしている。

「……提督、気を抜いたら駄目クマよ?」

「……そうか? 俺はどうも取り越し苦労な気がしてきたんだが……」

さて、駆逐せいきとやら、お前はどんなヤツなのか……。

俺は球磨ちゃんに気の抜けた声でそう答えて、ザバザバとうるさいドアの向こうへ、どこか期待を感じながら思うのだった。

新しい艦が鎮守府に――

「……駆逐棲姫。お前は我々の鎮守府の捕虜クマ。吐き出す言葉と態度には細心の注意を払うクマ」

開け放たれたドア。

ちやうど仮ドックとして改造された部屋と廊下の敷居の上に立つて、こちら……主に俺に向かって油断の無い視線を投げ掛けてくる駆逐せいきに対し、単装砲の砲口を突き付けて威圧的な言葉を発する球磨ちゃん。

弾なんか一発も入って無いっていうのに、なかなかのハツタリだ。

ツインテは定位置（不本意）である俺の頭の上で、能天気^なに俺の髪をいじりながら我関せずの構えだ。

しかし、部屋から溢れ出てきている湯気がモクモクと駆逐せいきを包んで、最高に気が散る。

空気読めよ湯気。

「……………」

対して、イキリ球磨ちゃんに絶賛^{どっかつ}喝^{どっかつ}され中の駆逐せいきちゃんは無言を貫いている。

中々に強気かつ反抗的な態度だ。

はた目には女子中学生がナマイキな女子小学生（高学年）を威圧しているの図である。

いや、そんな生やさしいモンでは無いんだろうけども。

「だんまりクマ？　あまり反抗的な態度はオススメ出来ないクマ。……お前の救助は提督の指示クマ。お前にはまず一言、言うべきコトがあるはずクマ」

「……………」

あ、しゃべった。

声可愛いな深海棲艦。

「……………」その軽巡洋艦はこう言ってるけれど……どうなのかしら

？」

球磨ちゃんにイチベツもくれる事無くそう言つて、じつ……、と俺を射ぬく色素の薄い澄んだ瞳。

「あ、ああ……」

それを受けた俺はと言うとだ。

うわ、深海棲艦もスゲエ美少女だなあ……とか。

白に近い薄スミレ色の大きな瞳と、白く長いマツゲが人形みたい、とか。

お湯にしつとりと濡れ、先の方がうつすらと青紫に染まった長いツインテが超良いニオイしそう、とか。

コイツもやっぱ『駆逐』と言うだけあって、お胸が慎ましやかだなあ、とか。

ざっくり開いた胸元に覗く鎖骨のラインペロペロしたいとか。

丈の短い黒セーラーとスカートの間で大胆に露出したなだらかなお腹とおへソの稜線が史上最高にエッチい……とか、ではなく！

(めっちゃプルプルしてる………っ!!)

その白く細い両腕でもって真新しい木製のドア枠にもたれ掛かり、しがみつくように縁をがっしりと掴んで、柱に体重を預けてコレまたスラツと細く伸びた染み一つ無い白い素脚をガクガクと痙攣させているのに目が釘付けだった。

小鹿だ。

生まれたての小鹿だコレ。

NHKの動物番組で見たヤツだよコレ………!

「……………ど、どうなのかしら?」

「う、うん、その通りなんだけど………!」

取り敢えずその恥態から全力で目を反らそうとしつつ、震える声で何とか答える。

だ、ダメだ………!

笑うな………笑うんじゃない俺!

今は絶対そう言う場面じゃない……シリアスだ、シリアスパートだぞ……！

……しかしスゲえ震えてるな……両膝大爆笑じゃねえか。

駆逐せいきちちゃんも何でもない風を装よそおつちやいるけど、良く見れば歯を食いしばって、しつとりした前髪を額に張り付かせ油汗までにじませている。

ちよつと頬が赤い。

かわいい。

「ふるふるだー♪」

「おもしろーい」

「そんなあざといやつはこうだ♪」

「てい♪ てい♪」

妖精さん達が面白がつて駆逐せいきの両脚に群がり、小さなお手々でペチペチとイジメている。

やめて差し上げなさい、それは俺の腹筋にキク。

「……………っ……………あんっ!？」

——と、

妖精パンチが良いトコロに入ったのか、哀れ駆逐せいきちちゃんはその鈴を転がすような可愛らしい声でもって、息子に優しくない悩ましい声を上げ、ガクつ、と膝を崩した。

「あっ……………あっ……………あう……………！」

そしてそのまま柱に沿ってズルズルとへたり込む。

ぺたつ、と、おしりが床についた。

「ふぶっつふぶ……………」

いかん、何か出た。

「……………そう。一先ずは、あなたの紳士的な対応に感謝するわ」

こ、コイツ、このまま続けるだと……………！

もはやその毅然とした態度すら哀愁を誘う。

ちよつと頬が赤あなつとるがな。

球磨ちゃんが静かだと思つてチラツと見てみれば、

「……………っ……………！」

口元をギョツと固く引き結んで、若干朱しゆの差した頬を膨らませて震えている。

おお、耐えてる耐えてる……あんなに緊迫した空気を醸し出していた球磨ちゃんをココまで追い詰めるか。

深海棲艦侮り難し。

……あとイタズラ妖精ども、そろそろその拷問じみた追い討ちを控えたまえよ？

「……ほれ、お前ら散れ散れ。か、かわいそうだろうが、俺の人格まで疑われるだろ、ヤメレ」

「はい」

「てっしゅー♪」

怒りながら笑いを堪えるといった球磨ちゃんの顔を見て、何とか意識を切り替えることに成功した俺がそう号令を掛けると、小さな悪魔達は「わー♪」と一斉に俺の足元まで戻ってきた。

「しゅうりかんりようです」

「かんぺきなしあがりでした」

「ていとくはもつとわれわれをほめるべきです♪」

「べきなのですよ♪」

そして始まるペチペチ。

妖精さんはどんな時でも自由だ。

お前らのスカスカな脳ミソが羨ましいぜ。

「あー……そうだな。ほれ、良くやったぞー、飴ちゃんをくれてやろう」

取り敢えずその場にかがみ込んで、ポケットに入れておいたあめ玉を一つずつ、妖精さん達の口に放り込む。

こんな時には必ずちやつかり混ざっているツインテ共々、小さな頭を撫でくりまわしてやった。

ご苦労ご苦労、今回も良い仕事だったぞ妖精さん。

いささか修理失敗してる感もあるけど元気そうだから良し。

コンゴトモヨロシク。

「うりうり……おい、指まで噛むな！ ……と、なんだ、駆逐せいきさんとやら」

全身をキラキラさせて俺の手のひらに頭をグリグリと擦り付けてくる妖精さん達から目を上げ、へたり込んだまま目を白黒させている駆逐せいきに呼び掛ける。

「……なにかしら」

あくまで凜とした態度を崩す気は無いらしい。

見知らぬ場所に拉致され、武装解除もされて、おつかない球磨ちゃんに砲口を突きつけられているというのに、なかなか胆が座つてい

る。

「……いや、俺に威厳が無すぎるだけかもしれない。

しよぼい提督でゴメンな球磨ちゃん……。

気を取り直して駆逐せいきに話しかける。

「実際はだいたいはコイツらのお陰なんで、お礼ならコイツらにも言っ

てやってくれ……ますか？」

「………つふう……提督、敬語は必要無いクマ。コイツは捕虜で、立

場はこちらが上だクマ」

落ち着きを取り戻したらしい球磨ちゃんにピシヤリと注意される。

先生厳しいです。

「言っ

てね」

今度は妙にフレンドリーになった。

「コミュカエ。

すると駆逐せいきは、チラツ、と視線を俺に群がる妖精さん達に向け、次にまた俺を見て、ふう……と小さく溜め息をついた。

小学生（みたいな深海棲艦）にまであきれられてる俺カツコワルイ。

そして、

「……ええ、そうね。誇りある英国淑女として、妖精さん達にも感謝致しますわ」

改めて妖精さん達を見つめ、幾らか険けんの取れた表情で妖精さん達にお礼の言葉を告げる駆逐せいき。

「……ありがとう」

「ゆあうえるかむ」

「どうってことないぜ」

「べ、べつにあんたのためにやったわけじゃないんだからね♪」

「ていとくがどうしてもっていったからなのです」

「かんちがいしないでよね／＼／＼」

そんなタワけたコトを抜かしながら、『満更でもない』を全身で表現する妖精さんズ。

ドヤ顔でふんぞり返っている。

あと、どうしてもなんて言っただけよ。

「へえ……」

「……何かしら？」

思わず声を漏らした俺に、駆逐せいきが僅かに首をかしげる。

「ああいや、球磨……あ、この怖い顔してる子ね。球磨に聞いてたのとずいぶん印象が違ったからさ」

そう言うと、駆逐せいきは初めてその視線を一瞬チラツとだけ球磨ちゃんに向け、僅かにあざけりの混じった声色で、

「……そう。その変な語尾の軽巡洋艦が私たちについてどんな紹介をしてくれたのかは……まあ、聞かなくてもおおよそ見当がつきますわね」

と、不快げに吐き捨てた。

「っ……！　口を慎むクマっ！」

「あつ、く、球磨っ！」

球磨ちゃんはサツと顔を薄く紅潮させ、俺が止める間もなく右腕の単装砲の砲口をゴリツと駆逐せいきの額に突きつけた。

「オマエは自分の立場が解ってるクマ？　提督の命令一つで頭が吹っ飛ぶクマ」

しねえよそんな命令!?

俺までハツタリに巻き込むのヤメテ！

「ぞ、残忍……残酷……冷酷。非道で、悪辣で、正義も無ければ感情のカケラも持ち合わせない、話の通じない醜いバケモノ……そ、そんなトコロかしら？」

「口を閉じるクマ！」

「っ……」

砲口を額に突きつけられたまま、それでも気丈に続ける駆逐せいきに対し、球磨ちゃんは更に強く単装砲を押し付けて怒鳴った。

流石に恐怖を感じていない訳では無いのだろう。

駆逐せいきは額に突きつけられた冷たい鉄くろがねに痛そうに顔をしかめ、白いおでこにうっすらと冷や汗を浮かべて僅かに声を震わせている。

「ぱーんするです?」

「きれいなかおをふつとばすです?」

「しよす? しよす?」

「わくわく♪」

「するかあ!? つ……ゴホン。し、しないとも……今のところは」
調子に乗ってきやいきやい囃し立てる妖精さんどもに思わず突っ込んで、慌ててそれっぽいコトを匂わせてごまかす。

せっかく球磨ちゃんが能天気な俺の分まで厳しい態度で尋問してくれているのに、提督の俺がその努力をファイにする訳にはいかない。

俺は非情な軍人なのだ。

今だけはそう自分に言い聞かせて、出来る限りの厳しい声で続けた。

「く、球磨。お前にも色々言いたいコトはあるだろうけど、まずはその砲塔を下ろせ。俺はソイツを痛め付ける為に助けたんじゃないんだ」

「……………」

「……………頼む」

「……………クマ……………」

内心で猛烈に謝りながらそうお願いすると、球磨ちゃんはたつぷりと十秒間は黙った後、表情に辛そうな色をにじませながら、ゆっくりと駆逐せいきの額から砲口を離れた。

場の緊張が、僅かに緩む。

「……………ふう」

思わず漏れた溜め息に、駆逐せいきの小さな溜め息が重なったのに気づく。

……すげえ緊張した。
心臓痛い。

「ぱーんしないのかあ」

「よかったなくちくせーき」

「とみせかけて」

「からのー？」

「……提督、ちよつと妖精さん達を黙らせられないクマ？」

「やめーや！ ……止めなさい」

コイツらはいつとも弛んでんなあもお！

流石の球磨ちゃんも若干呆れ顔だ。

最初っからやらないの解ってるからってコヤツらはまったく。

「……感謝するわ、提督^{アドミラル}」

「ああ、うん……うむ。そう思うんなら、あんまり部下を挑発しないでくれな？ 仲間が沈んでるんだ。お互い思うところはあるだろうけど、ここは戦場じゃない。口でも砲でも戦闘は禁止だ。分かるな？」
ボソツ、と小さく感謝を告げる駆逐せいきにそれだけ念押しする。
しどろもどろにはなつてないだろうが、我ながら威厳もへったくれも無いなあ……。

「………やっぱり、似てる……」

駆逐せいきが、うつむいて小さく何かを呟いた。

「ん？ 今何か……」

「……わかったわ、お若い提督^{アドミラル}殿。あなたの良識ある慈悲に、重ねて感謝しますわ」

そう言つて、依然ペタリとへたり込んだまま真っ直ぐに俺を見上げて続ける駆逐せいき。

「それで……あなたは、一体なぜ、私を……敵である深海棲艦を助けて下さったのかしら？」

「何故ってそりゃ……」

質問に答えようとして、言いよどむ。

見れば、球磨ちゃんやツインテラ妖精さん達まで俺の顔色を伺っている様子だ。

何でも何も、助けてと言われたから助けたようなモンんだけど……そんな答えダメつすよね、威厳ある提督的に考えて。

しかし考えてもみて欲しい。

目の前で助けを求める死にかけの女の子がいて、それを無視できる一般人なんていないと思う。

その女の子が例え敵であっても、あるいは女の子でなくて小太りのオッサンであっても……普通助けるんじゃないだろうか。

「あー……それはその、き、聞きたいことが……そう、君ら深海棲艦に、聞きたいことがあつ——」

そう、苦し紛れの理由を口にしようとした俺を、

「おまえがたすけをもとめたからです」

ツインテが、ハッキリした声で遮った。

「——つたからで……あ！ おい、ツインテ！」

「おまえがたすけてほしそうにしてたから、ていとくがたすけもがもが」

「しーっ！ しーっ!! ツインテ、今シリアスシーン！ 空気読めや

！ 空^{そら}って書いて勇気の気^き！ く・う・きー」

「かんじわからなもがもが……♪」

「お前ツインテオマエまたツマラン口答えしおってからに……！」

頭の上からひっぺがしたツインテの口を慌てて塞ぐ。

コラっ、嬉しそうにするな！

手のひらをナメるな！

俺がそうやって最早手遅れ感が否めない努力をしていると、

「……その妖精さんの言う通りクマ」

「く、球磨!？」

球磨ちゃんからの、まさかの肯定であった。

「オマエが覚えてるかは知らんクマが……オマエはボロボロの死にかけで岩礁に打ち上げられて、情けない声で助けを求めてたクマ。哨戒中だった提督がそれを見つけたクマ」

「……私は深海棲艦よ。私がどれくらい意識を失ってたかは知らないけれど、つい先日の海戦でも——」

「承知の上クマ」

「……………」

静かに淡々と自身が『敵』である事を口にする駆逐せいきは、球磨ちゃんが不満げにピシヤリと言いつ返すのを聞いて黙りこんだ。

「その海戦には球磨も参戦してたクマ。仲間も……大切な仲間も一杯沈められたクマ。この提督はそれを知った上で……さつきオマエが言ったような事を球磨に説明されてなお、それでも深海棲艦であるオマエを捕虜として保護したクマ」

「……なんで」

「ここは戦場じゃない」

「……………」

再び黙り込む駆逐せいきに、球磨ちゃんが何かをこらえるように静かに続ける。

「ここはもう戦場じゃない……提督はそう言ったクマ。戦争は個人の意味でなく、戦闘は上官の命令によって行われるモノであって、私闘はただの暴力である……と言つても、オマエら深海棲艦には理解出来ないクマか？」

「……………そんな、事——」

「球磨は納得出来なかったクマ」

「……………」

「でも、理解はしてたクマ。そんなコトは軍人にとって常識中の常識で……いや、球磨は……本当の意味で、理解、してなかったクマ」

球磨ちゃんはまるで自分に言い聞かせるように、一言一言、ゆつくりと言葉を口にする。

それに黙って耳を傾ける駆逐せいき。

ウズウズする妖精さん達。

……ステイ。

待て。

待てだぞ？

「オマエは球磨の……球磨達の仇クマ。守るべき人類の敵クマ。恨みがない訳ないクマ……でもオマエは球磨の仇じゃないんだクマ」

「……………」

球磨ちゃんの禪問答のような述懐じきゅうかいに、僅かに首を傾げる駆逐せいき。

俺にも何が何だか……。

「悪いのは戦争なんだクマ」

「！」

ピクツ、と肩を震わせる駆逐せいき。

妖精さん達までちよつと静かに事を見守っている。

鈍い俺にも、やつと球磨ちゃんの言いたいコトが分かってきた。

「球磨は……深海棲艦と戦ってたつもりだったクマ。平和の為とか、仲間の為とか言っていないが……球磨は、球磨達はまた、戦う意味を、戦争を見失ってたクマ。戦争は味方と敵の戦いじゃないクマ。正義と正義、意思と意思、理由と理由、目的と目的の、最も野蛮なぶつかり合いクマ。球磨は……オマエら深海棲艦の戦争を知らず、知ろうともせず、ただイタズラに血を流し流させて、個人的な感情を煮えたぎらせていたクマ。……クマあ、今もクマね」

そう言った球磨ちゃんは、どこか泣きそうにも見える顔で悲しそうに艤装をつけた右腕を下ろした。

「本来、戦争に個人的な感情が入る余地なんてないクマ。恨みだとか、仇だとか……なるほど、確かにそんなのただの喧嘩で、ただの見苦しい殺しあいクマね。球磨は兵器としては失格クマ。まったく戦後の日本は教育ができてるクマ……こんな若い提督に諭されてやつと気づくなんて、コレじゃ本当にただの幼い小娘クマ」

溜め息をつく球磨ちゃん。

「……だから、助けを求めるオマエを助けたのは、戦争のルールに則った、至極当然の行動クマ。飛び交う砲弾の責任は、球磨でもオマエでもなく、戦争指導者同士の責任クマ。球磨はオマエに恨みがあると思ってたクマが、オマエを恨む理由なんて無かったんだクマ」

そう言って、右腕の艤装を確かめる様に撫で、続ける。

「徹甲弾を揚弾、装填するのは球磨クマ。尾栓を閉め、発砲電路も自分で開くクマ。方位盤と照準双眼鏡を覗いて、砲塔を回して仰角だつて

整えるクマ。照準を合わせて、引き金に指を添わせる所までは球磨の仕事クマ」

「でも、そこまでなんだクマ」

球磨ちゃんの独白を、静かに見守る。

「引き金を引くのは、指揮官の意志クマ。もっと言うなら、指揮官の意志は、指導者の意志クマ。球磨は、ニンゲンの身体に引っ張られて……そんな、当たり前のコトすら忘れてたクマ」

「……………情けない話ね」

「……………言い返す言葉も無いクマ」

かたくなに球磨ちゃんを見ないようにしていた駆逐せいきが、いつの間にかじつと球磨ちゃんを見つめていた。

その瞳からは何故か、敵意やあざけりと言った感情が薄れているように感じる。

「だから、球磨は……………球磨もオマエに聞きたかったクマ。オマエらの戦争を。その理由を……………球磨達が戦う意味を。深海棲艦とは、対話なんて出来ないと思ってたし、実際この戦いの初期に失敗してるとは聞いてたクマ。感情なんて無いと思ってたクマ」

「……………それなら——」

「でもオマエは助けを求めてたクマ。苦しんでたクマ。……………泣いてたクマ」

「……………!?!」

初めて、駆逐せいきが戸惑うような表情を見せた。

サツと頬に淡い朱が差し、思わずといった風に目元に手をやる。

「……………痛くて怖くて涙を流して、情けなく助けを求めるバケモノなんて聞いたコトも無いクマ……………だからオマエはバケモノじゃないかも知れないって思ったクマ。だから提督に従ったクマ」

バケモノ、の所で一瞬身を固くした駆逐せいきだったが、続く言葉に緊張を解いた。

球磨ちゃん……………本当は球磨ちゃんが一番辛いんだろうに、俺なんか

の無責任な言葉でこんなに一生涯懸命考えてくれて……責任を感じるぞ。

ちよつと胃がキリキリしてまいりました。

「まあ、実際この提督はオマエがあんまりにもかわいいそうだったから後先考えずに助けたつてのが正直な所だと思おうクマ。別に大層な理由なんて期待するだけ無駄クマ」

「ちよつとお!?!」

球磨ちゃんだい無し!

それ言つちやつたら色々台無しだよ!?

俺スツゴク行儀良くしてたじゃん!?

「だからそういつてるです」

「かんしゃしろー♪」

「くまおはなしながい」

「いまきたさんぎよう」

「くまぽえむ」

「……………本当に黙つてて欲しいクマ」

弛緩した空気に即座に反応して、赤くなつた球磨ちゃんに群がつてほつぺたをつつき回す妖精さんズ。

オメーらはホント容赦ねーな。

「……………ふつ……………ふふ……………そう」

突然聞こえた心底おかしそうな声に顔を向けて見れば、ずっと気を張り詰めていた様子だった駆逐せいきが、口元に手を当てて微笑んでいた。

「……………言つて置くクマが、結局オマエが捕虜であるコトも、球磨達がオマエを警戒してるコトも変わらないクマよ? 尋問の結果如何いかにによつては、終戦までずっと捕虜クマ」

完全と言つていい程に敵意を霧散させてしまった駆逐せいきに、若干毒気を抜かれてしまった様子の球磨ちゃんが呆れた様に釘を刺す。

「ええ、勿論分かつているわ。…………ふう、それでは提督アドミラルさん? 私も誇りある捕虜としての義務に乗つ取り、尊敬すべき敵指揮官の尋問に可能な限り答えようと思ひますわ」

そう言つて、横座りのまま、ピンと背筋を伸ばす駆逐せいき。

「質問をどうぞ、提督^{アドミラル}」

その凜とした態度に少し気圧されつつも、俺は呆けた頭を何とか回転させて質問の言葉を探す。

「かれしいるー?」

「すりーさいずは?」

「このみのたいぷは?」

「なつとうにねぎいれるたいぷ?」

「ていとくはあげないよ?」

「キミらは黙ろうねー……そうだなあ……」

何が嬉しいのか一斉にきやいきやい騒ぎだすツインテ達を適当にあしらいつつ……直ぐに一つ目の質問を見つけた。

まあ、まずはコレだろう。

「こほん……名前だな。キミの名前を、教えて貰えるかな?」

駆逐せいき……と言うのは、名前ではないだろう。

あと、『せいき』ってどんな字なの、と聞くのは諦めた。

できる提督は空気が読めるのだ。

「!・そうね、自己紹介がまだだったわ。では、改めて……」

駆逐せいきは、一瞬呆けたように目を見開いたあと、どこか嬉しそうにそう言つて、俺の目を董色の瞳で真っ直ぐに見つめて答えた。

「私は誇り高き国王^{ロイヤル・ネイビー}の海軍の E 級駆逐艦五番艦、エンカウンターよ

! 対潜性能と船団護衛には自信があるわ。……過酷な戦場であっても紳士的な騎士道……武士道かしら? そんな心を忘れない人つて、素敵だと思うの。あなたはどうかしら、提督^{アドミラル}?」

駆逐せいき——駆逐艦エンカウンターはそう言つて、

全身をキラキラと輝かせながら、ニッコリと微笑んだ。

妖精さん事変

「……提督、いつまでほうけてるクマ?」

呆れたような声に、ハツと我に返る。

「う、うん、エンカウンターね……あー、よろしく」

何やら妙に友好的な態度で、流れるような自己紹介を披露してくれた駆逐せいき……改め、駆逐艦エンカウンターに、しどろもどろになりながらもなんとか言葉を返す。

この子捕虜だよね?

さつきまでウチの球磨ちゃんとそこそこ険悪なアトモスフィアを醸し出してたよね?

突然フレンドリーになると、コミュ障気味な自分としてはキョドラざるを得ないってゆーか……。

「……アドミラル?」

「は、はい! 何でしょう!」

「また敬語になってるクマ」

「何かネ?」

いけないいけない、球磨ちゃんの為にもここはしっかりせねば。

こつちだつていい大人なんだし、ちよつとイケイケな女子小中生にグイグイ来られたくらいで一々戸惑っていたら侮られてしまう。

「よろしければ、アドミラルのお名前をお伺いしたいのだけけれど?」

「ん? あー、ゴメン……失礼。そうだった……お、私はこの勿忘鎮守^{わすれな}府で提督をやらせてもらっている、工藤俊一でs……と言う者だ」

カミカミである。

「てーとくえらそうなのにあわなーい」

うるさいよ(泣)。

「!! ……クドウ! ……やっぱり……さ、サー・クドウ、もしかしたらなのだけれど、アドミラルのご先祖様にイカツチのっ——」

いつの間にやら頭の上の定位置に戻っているツインテに耳を引つ

張られていると、董色の大きなお目々を見開いたエンカウンターが俯いて何事かをブツブツ言ったあと、何やら勢い付いてそう重ねて訊ねて来た。

「駆逐艦、オマエちよつと馴れ馴れしいクマよ。尋問してるのはこっちクマ」

球磨ちゃんイライラである。

「くま、こじわがふえるぞ」

「……提督！　なんかこの妖精さんクマにばかり当たり強くないクマ!？」

「今のはツインテが悪いぞ、お口チャックしてなさい！　球磨もありがとな……ええとご先祖様についてはな……すまん、じいちゃんばあちゃん和離れて暮らしてたし、良く知らないんだけど……」

それが今関係あるのか？　と首を傾げる。

頭の上で真似して首を傾げたらしいツインテがコロんと落っこちる。

ナニしてんだよ……。

「……いえ、コチラも不躰でしたわ、サー・クドウ。アドミラルの素性とは関係なく、その精神に、その行動に、私は敬意を抱いたのですから。かつての恩人の面影を見たのですから。それだけで十分です。ただ意味は分からずともこれだけは伝えさせて下さい……私は怨敵たるニホンのアドミラルに二度、大切な船員を助けて頂きました」

エンカウンターは、さつきまでの球磨ちゃんへの不敵な態度はどこに行っただとというくらい真摯な目で、へたり込んだまま背筋を伸ばし、つらつらと船の記憶らしきモノを語る。

ちらとツインテを見やるその瞳は、イヤに優しかった。

「そして二度目の今度は、沈んだ私までも、アドミラルは引き揚げて下さいました。紳士淑女の国の栄光ある艦たる私をして、アナタは誇り高き武士道の有り様を見せしめました」

エンカウンターの董色の瞳には強い意志を感じる光が宿り、その蒼白かった肌に血色の朱が差す。

「く、クマ……!？」

球磨ちゃんが何やらおの怖いっているが、俺だって何がナニやらわからない。

気付けば、妖精さん達に囲まれたツインテまでもがキラキラと発光しながらその肌に血色を取り戻しつつあった。

「おー」

「ついでにんか？ しんかするの？」

「びーおす？ れんだする？」

「ふふふ、わたしはいますいこーにかがやいているぜ……！」

なんて緊張感が無いんだ……！

「私はこの大恩に報いたいと思います。……起立出来ないのが申し訳ないので……アドミラル・クドウ。駆逐艦エンカウターは、アナタへの最大の敬意をもって、捕虜としてアナタ個人の旗下に入り、可能な限りその命令に従いたく思います」

呆気にとられっぱなしの俺と球磨ちゃんの前で、そう言ってエンカウターはキレイな敬礼を試みた。

ツインテもぴよんとエンカウターの崩した腿の上に飛び乗り、どうぞよろしくとばかりに一緒になって敬礼している。

不思議な事に双方肌はすっかり血の気が戻り、死人然とした蒼白い色から、自然な白人さん並みの透き通った暖かな肌色になっている。

それはあたかも深海棲艦が艦娘に生まれ変わったようで――

「アドミラル、ご指示を」

ナニか大きな流れの潮目が変わったかのような予感を思わせる光景だった。

「……済まないね、もう一度要求を繰り返して貰えるかね」

「閣下！ 考慮に値しません！」

「縣大尉、忠言結構。しかしコレは此度の大戰始まって以来の怪事だ。対応は慎重を期すべきである」

「……はっ！ 失礼しました」

「遠山閣下、それでは改めて彼女らの要求を復唱致します」

深海棲艦の侵略に対し海軍省内に置かれる事となった大本営、名目上統帥権を有する天皇を

輔弼する内閣総理大臣を補翼し、事軍令に於いてはほぼ全権を有する軍令部総長たる遠山元帥は、頭を抱えなくなるのを堪えながら秘匿通信によってビデオ通話をつなげた岩川鎮守府の田井中大将の上申に再度耳を傾けた。

「えー、

『我々工藤提督指揮下妖精さん部隊2279名は、サイパン島北端、バングライクリフより58度50^{かいり} 哩の仮称勿忘島^{わすれなしま}にて孤軍奮闘せし提督への支援を求む。

就いては現在予備役補を拝命せらる工藤俊一の独断専行に対する追認、及び現地の旧勿忘鎮守府着任許可並びにその運営権、隸下巡洋艦球磨及び新規建造、救助、拿捕せし艦娘への指揮権、以降今大戰に於ける独断専行許可を求める。

重ねて鎮守府運営に所要さるる重油、弾薬、鋼材、ボーキサイトを各5000単位、

我々及び物資輸送用の『零式輸送機二二甲型』四機並びに直掩用高度戦闘機『キ83』四機の開発許可、

就いて各機の補給並びに岩川基地の高練度航空母艦艦娘への発艦支援要請、

最後に詰め込めるだけのお菓子の支給を求めるものである』

「……この後に念書があるのですが、良いでしょうか」

「……………ああ、頼むよ」

副官の縣大尉に速記させた要求の上に視線を滑らせながら、目頭を強く揉む。

なんだろう、この疲労感は。

大尉の文字も所々に筆圧の乱れる跡が目立つ。

「……」以上の要求が履行されなかった時、我々妖精さん2279名は日本海軍に属する全ての軍人、艦娘、妖精さんに対して問答無用のナワバリバトルを申し受けるものである。ガチマツチに敗北した鎮守府からは全ての甘味としよっぱいお菓子を徴収する。日本の全鎮守府をおしなべて……あー、カラフルでプリチーにされる事を望まないのならば、我々の要求を呑まれたと思う。……ああ、読むから……ゴホン、イカよろしく」……以上です、閣下」

「……つまり、田井中大将のその、惨状は……」

「こうするぞ、という警告かと思われませう」

そう答えた田井中大将のしわがれた声は、私以上に疲れているように見えた。

なにせ画面の向こうの彼は第二種軍装が元々白かったとは思えない程、全身にピンクやライムグリーン、オレンジ紫と蛍光色のペンキらしき塗料まみれになっている上、何処かの特殊部隊みたいな装いの妖精さん達に水鉄砲を突き付けられながら喋っているのだ。

真っ白で立派な顎髭の先端まで蛍光色のペンキを滴らせている姿は、滑稽を通り越して何処か哀愁すら漂わせている。

映像回線を繋ぐ前の音信で再三、大変失礼な姿で会談願いますがどうか御容赦下さいと伝えられていたが、実際に一目見た瞬間、そんな筈は無いのにどこかのお祭り会場か何かに繋ぎ間違えてしまったのかと思っただけだ。

「遠山閣下、どうか私の有様は置いておいてです。この妖精さん達の要求は単なる悪巫山戯で済まされない、見るべき点があります」

だが、たとえどんな情けない有様でも、彼は優秀な軍人だ。

この異常事態を前に、しっかりと熟考してから通信を寄越してくれようだった。

確かに、一読しただけでもこの要求には無視出来かねる分部が多々見受けられる。

兎に角異常だらけなのだ。

何故本土から2300kmも離れた北マリアナに限りなく一般人に近い提督予備役補が一人で居るのか。

過去に存在した全鎮守府を知っている筈の自分ですら聞いた憶えの無い勿忘島、勿忘鎮守府とは何なのか。

2279名などという途方もない数の妖精さんが指揮下にいるとは事実なのか。

つい先日沈んだばかりの球磨が何故文中に出てくるのか、救助や拿捕とはいったいどういう事なのか。

独断専行等などというとても無い事を求めて来る割に、求める資材の量はいやに少ない、と思えば何時も大量に資材を浪費しては気紛れにしか装備の開発をしてくれない妖精さんの方から、指定の航空機を作りたい等と——しかもどの鎮守府からも開発報告の無い機体だ——前例の無い事を言って来ている。

此れがあのだと田井中大将からの通信で無ければ、馬鹿げた冗談だと歯牙にも掛けない文面である。

いつそ何時も通り菓子類が要求されていて安心した位だ。

「この要求にどう答えるかは一時置いて、まずは大将の意見を聞きたい。最初に訊ねたいのだが……この要求書に虚偽は含まれていないと、田井中大将は考えているのかね？」

俄にわかに、執務室にピリツとした緊張が走る。

「はっ……私感に成りますが……この要求書に、一切の虚偽の記載は無いと考えます」

「……有り得ない」

「閣下、発言を許可願います」

思わずと言った風に震える声で呟いた縣大尉が続いて、もう一人の副官である樋口大尉が感情を感じさせない静かな声で問いかけた。

「落ち着き給え縣大尉……なんだね、樋口大尉」

自身の考えを整理する意味も込めて、副官の一人である樋口大尉に続きを促す。

「有難う御座います。閣下、確かに我々に対し、妖精さん達が事軍務ことに関わる事柄で、重要、瑣末事さまつじにかかわらず嘘や詭弁を弄した記録は御座いません。ですが其れが即ち、今後有り得ないなどと断定する事

は、尚早であると愚考致します」

「……ふむ、それで？」

樋口大尉は若いながら非常に優秀な士官だ。

彼女は適性こそ並であったが、提督候補官として門戸を叩いた軍学校に於いて早くから頭角を現し、軍学校軍大学を共に首席で卒業、演習でも優秀な成績を収めた事から中尉相当官として横須賀鎮守府の提督補佐官の任に就いた若き俊才^{しゅんさい}である。

横須賀でもまた輸送作戦や沿岸部護衛任務に於いての立案実行に励み一年で正式に中尉に叙され、その後も艦娘との関係も良好で奇を衒わない堅実な仕事ぶりが評価され横須賀鎮守府に依る八丈島迄の制海権の確保成功をもって大尉に昇進。

新しく任官された補佐官と交代に本土に戻された。

そのまま他所の鎮守府に送られず二十代にして軍令部総長付の副官に抜擢されたのも、将来的に前線の基地にて艦娘を直接指揮出来るように成る事を見越しての事だ。

(しかし良くも悪くも……若い)

「最も強い適性を持つとされる黒峯^{くろみね}大將が最大で201名、其れに次ぐ柏木中將は149名。これが日本に於ける記録上の妖精さん指揮能力の限界です。しかも現在では軍全体で妖精さんの離脱が深刻化し、平均して二割の妖精さんが姿を消している状態です。たった一人の人間に2000名を超える妖精さんが慕い集い、あまつさえ凡そ2300kmも離れて尚統制下にあるというのは余りにも荒唐無稽です。昨日の深海棲艦の異常行動の件も有ります。現状、これ迄の常識が通用しない事態に成りつつあると言えます。今回もまた昨今に於ける妖精さんの離反行動の一環としての、たちの悪い悪戯と見る事も出来るのではないでしょうか」

言うべき事は言った、という風に直立不動で此方をジッと見つめる樋口大尉。

その両肩と背中にしがみついた妖精さんが、

「かたいぞー」

「そーゆーとこだぞー」

「かれしできないぞー」

とぶにぶにと頬を突いても一切表情を動かさない。

流石だ。

そしてそれは、頑かたくなとも言え換えられる。

「遠山閣下、僭越ながらそちらの若き秀才殿にこの老骨から返答させて頂いても宜しいですか？」

「私も聞きたい、許可しよう」

「拝聴致します」

生真面目にそう言うと、彼女は田井中大将の映る画面に向き直った。

「樋口大尉と言ったかね？ いみじくも君の言った通りと言える」

田井中大将は、噛み締めるようにそう語り始めた。

「……？」

「今我々を取り巻く世界は、これ迄の常識が通用しなく成っている、そう言っていたね？」

「！……はい」

「それでは常識とは何だったかな？」

軍人らしからぬ優しげな眼差しで、そう問い掛ける提督。

「……仰る意図が」

「現代兵器が何故か通用しない深海棲艦。人の姿で蘇った艦船とか云う艦娘。そもそも理屈なんてあったモンじゃない妖精さん」

ペンキまみれのピンクのヒゲをミヨンミヨン引っ張る妖精さんの、小さなベレー帽を節くれ立った指先で撫でてやりながら、何処か面白そうに田井中大将は続ける。

「そもそも常識なんてモノは何処かに逃げてって久しいじゃないか。そんなのはね、理解の及ばない現実は無理くり整合性を取ろうとする、そう有ってほしい、そう有るべきだという思い込みでしかないんじゃないかと思うのだが、どうかね」

「いえ……はい、しかし今はそう言った哲学的な議論ではなく……」

「そう、推論に意味は無い。我々は軍事的な決断をするに当たって、この理解し難い問題に納得と確信ある判断を下したい訳だ」

「……」

「田井中大将、ではなんとしよう。如何にこの要求書に記された荒唐無稽な事実を真実と認めようか」

「人です閣下。老人は人を見るのです。私達には口があり目があり耳があり心がある。其れは妖精さんも同じだ。……工藤提督とやらの妖精さん、もう一度になるが、ちよつと訊ねて良いかね?」

大将が、画面の向こうでヒゲを三編みしだしたベレー帽の妖精さんに問い掛けた。

「む、てーとくのことならなんでもきくがよいぞぴんくひげ」

「キミらの書いたこの要求書。書いてある事はみんな事実かい?」

聞かれた妖精さんは、何を当たり前のことと言わんばかりに胸を張って、自信満々に答えた。

「くだい! ぜんぶほんとはーです。てーとくさんはわれわれがだいすき。われわれもてーとくさんがだいすき! われわれはてーとくさんをたすけるためにいつこくもはやくわすれなちんじゅふへなかまどぶつしをもつてかえらねばいけないのです」

「成る程……重ねて聞きたいのだが、ココに隸下巡洋艦球磨とある。

私の記憶じゃあ、パラオ所属の軽巡洋艦球磨は先日アタシの会戦で大破沈没したと聞いていたが、コレはどういう事だい?」

「くまはてーとくがぶじさるべーじしました。げんきにくまくまやつてます」

「ほう、サルベージ……沈んだ球磨を引き揚げたって事かね。とすると、この救助というのは、他にも先の会戦で沈んだ艦娘らを同じくサルベージ出来ると考えて良いのかね?」

「どうぞんです! しぎいさえあれば、てーとくならあさめしまえです。でも、しずんだたましいがしんかいにそまるまでながくてもふたつきはもちません。だからいそげとゆっているのです!」

「なんとまあ、確かに其れは大変だ。そうなつてくるとこの拿捕つても気になるねえ……字面から見ると、あたかも敵深海棲艦を捕まえて指揮下に加えられるって書いてある様にも……」

「ついでにたちをみかたにつけてーとくにかかればふかのうじやな

いです。いまごろはもうひとりくらいたらしこんでもおかしくないです」

「其れは何とも、豪気な事だあね……ありがとな、妖精さん」

「くるしゅーないぞぴんくひげ。はんたいもみつあみにしてやる」

「……以上です、遠山閣下。何度聞いても、彼女等が嘘をついている様には感じやせんのです。真剣なんですよ、目が。口調が。普段だらけたり巫山戯たりしてばかりの彼女等が、工藤俊一提督なる御仁の事となるとまるで戦時の様に真剣なんです。……そして極めつけは」

言葉を失う、とはこういうのを云うのだろう。

田井中大将と妖精さんの問答は、次から次へと信じ難い発言の連続で、而して大将の言う通り、一切の嘘の気配が無かった。

双方が只事実の確認を行っているようにしか聞こえなかつたのである。

「これです。妖精さんが預かって来たという、軽巡洋艦球磨からの救援要請です」

そう言つて田井中大将が掲げてみせたのは、数枚のメモ用紙だった。

水を吸つた後乾かしたのであろう、くしゃくしゃな紙をなんとか平らに伸ばそうと苦心した跡の見受けられるB6サイズの罫線紙に、精一杯畏まつた丸文字でびっしりと文言が記されている。

「……データを寄越してくれるかね」

驚くべきことに、その中には一度沈んだ球磨が一人の提督適性者と変わった妖精さんに引き揚げられ助けられた一部始終と、その際自分に起きた変質について、さらに資材さえあれば他の艦娘も救える可能性がある事まで書いてある。

深海棲艦に近い色合いに変色するという辺りが何とも不安だが、球磨や妖精さんを信じるならば大きな問題は未だ見られないようだ。

其の点を考慮に入れて尚、沈んだ艦娘をサルベージ出来るという情報事実であるのならば、人類が物量の面で深海棲艦に絶対に敵わないという前提が崩れかねない大発見だ。

その救助要請には、偶然その勿忘島に居合わせた才気ある提督適性

者の青年を保護して欲しい旨と、可能であれば其の教育や訓練に自分を補佐に付けて欲しいという希望も書かれていた。

「遠山元帥、私がこの妖精さん達の言い分を信じようと思った訳は以上です。……元帥、深海棲艦はある日突然海に現れました。艦娘もまた、突然現れました。そしてまた、此度の危機的状況に際して今までの常識では計り知れない、途方もない才能を持った提督が現れたとしても、私は有り得ないとは思いません」

軍令部司令室は、水を打ったかの様に静まり返っていた。

「閣下、俎上の工藤俊一なる人物について確認が取れました」

徐ろに、室内のオンライン端末で猛然と何事かを調べていた縣大尉が、僅かに震える手でプリントアウトした一枚のコピー紙を差し出した。できた。

「工藤俊一提督予備役補は実在する人物です。凡そ一月前、静岡県中南部の海軍人事局地方支部にて提督適性検査の自主診断に来局したそうです。その際妖精さんを視認し会話する能力は確認出来ました。が、身の回りに付く妖精さんの数が0人だった為に提督予備役補としてデータベース登録をしたのみとの記録がありました。当時検査を担当した駐在官の伊勢崎中尉への確認も取れました。彼と同名同名のデータベース登録は軍部に存在しませんので、間違いは無いかと。現在、登録された住所に局員を向かわせております」

「そうか……0人」

「閣下、やはり何かの間違いという事も……」

「いや……少なくとも2279名という途方もない数の妖精さんに慕われ、2300km彼方遠方にいながらその数の妖精さんを一糸乱れず統制してのける常軌を逸した提督適性保持者だぞ？ 我々訓練した軍人が身の回り付きの妖精さんをなんとか3人程度までに抑えられる様に、それ程迄の傑物と仮定すれば、妖精さんを残らず留守番させるくらい訳ないとも思える……と、推測を重ねる前に先ずは確認すべきだろう。そちらの妖精さんに訊ねたいのだが、君等の言う工藤殿とは、此方の御仁で間違い無いかな？」

カメラに映るように、書類の小さな写真をかざす。

「！　そーです！」

「てーとくのしゃしんだー」

「しゃしんうつりわるいぞー」

「……間違いないようだ」

田井中大将側の画面の中で、妖精さん達が写真を覗き込もうと押し合い圧し合いしている。

「あー……君等から見てどうかね、あちらの妖精さんは嘘をついてる様に——」

「みえません」

「よいてーとくにめぐまれたようです」

机の上の妖精さんに訊ねても、答えは変わらない。

「樋口大尉、縣大尉、そちらの妖精さんは何と」

「………あ、は、はい、妖精さん……」

「ほんきつぽいー」

「うそじゃねーですね」

「………どうなんだ？」

「あれがうそにみえるんならー」

「きみとのつきあいをかんがえなきやならんなー？」

「でもがちまっちはやってみたいかも……」

「………う、嘘を言っているようには、感じられません」

「………此方も、そのようです」

何処かまだ信じられないといった様子で、樋口大尉と縣大尉が答える。

「………宜しい。この場での結論は出た様だ」

「閣下、それでは——」

画面の向こうの田井中大将が、微かに身を乗り出す。

「まあ、要求の細かい内容に関しては協議するとして………現地での活動を求める妖精さんの要求と、救助を求める球磨の要請の食い違いも考えねばなるまいが………この件を、速やかに解決すべき案件と認め、直ちに会議の招集を要請しよう」

「ご決断、ありがとうございます、閣下」

深々と頭を下げる提督に、楽にするよう伝える。

まったく真つ先に襲撃を受けるとは、田井中大将には随分と苦勞を掛けてしまった。

そう思いながら、どこかこの事態に言い知れない期待と興奮を覚えている自分に気付き、弛みそうになる頬を引き締める。

「——先んじて、私の権限により要求にあった輸送機と直掩機の開発を許可しよう。妖精さん、必要資材に関しては田井中大将と相談の上、使用しただけ大本営に請求して欲しい。……提督、会議は一時間後に行う」

「は、了解しました」

「ぴんくひげ、かいぎまであらつちやだめだぞ」

「ちやだんすのもなかたべていい？」

「かりんともあつた」

「じじくさいおかしばつかだなー」

「……………」

「……田井中大将、どうか堪えてくれ……所で樋口大尉」

「はい」

私は、生真面目に直立したままの若い副官に、ずっと気になっていた一つの事を尋ねた。

「がちまっちとはなんだね？」

「……………」

捕虜と尋問

「……ここが、この鎮守府の執務室だ」

鏑の浮いた扉の取っ手をかけ、肩越しに振り返ってそう声を掛けると、妖精さんが突貫作業で作ってくれた木製の多脚杖にしがみつくように体重を預けながら、エンカウンターが震える声で答えた。

「アドミラル……執務室を一階に移すことを提案するわ。私、いつかあの階段から落っこちると思うのだけど……」

「あー……まあ、階段は直すつもりだけど、一階の部屋も一つくらいは使えるように——」

その後、敵だったハズの深海棲艦が目の前で艦娘チツクにカラーチェンジしたのがよっほど衝撃だったのか、頼れる球磨ちゃんはすっかり黙り込んでしまった。

自分としては判断基準となるゴがくるくる色の変わる球磨ちゃんしかないなので、この娘もそーなんだーくらいにしか思わなかったが……分からない、俺はフンイキで提督をしている……。

一先ず捕虜になる事を受け入れてくれたエンカウンターの処遇を考える為に、この鎮守府で唯一部屋らしい体裁の整った執務室に案内しようと思ったのだが、何でも脚が生えたとてらしいエンカウンターにはほんの一階分の昇降も相当スリリングだったらしい。

太陽は既に西の空、廊下は影になって足元も見辛く、アンヨのお下手なエンカウンターにはさぞ辛かったろう。

あいも変わらずキレイなおみあしがプルプルだ。

妖精さんも面白がって横でプルプルしている。

「……提督、甘やかす必要はないクマ。足に異常は無いんだからすぐ慣れるクマ」

「おお、球磨、復活したか」

と、エンカウンターの後ろから、ダンマリだった球磨ちゃんがボソッと声を上げる。

字面こそトゲトゲしているが、どこか気持ち険の和らいだ声色に聞こえた。

何か心境の変化でもあったんだらうか。

「……失礼しましたアドミラル。少し気が緩んでいたみたい」

「いや、まあ、なんだ、軽口くらいはいいよ。気を張った所で俺たちと妖精さんしかいないし……あれだよ、球磨は早くその脚に慣れるように言っただよな？」

エンカウンターがスツと表情を固くするのを見て、慌ててフオローしながら、きいと扉を押し開く。

二人の関係を考えればギクシャクするのも仕方ないが、必要以上にケンケンされると私のないうな心が死んでしまいます。

球磨ちゃんさつき階段でエンカウンターが落っこちないようになり気なく後ろで警戒してたの気付いてるんだからね！

「くま、そーなの？」

「つんでれなの？」

「……そうなのかしら、軽巡洋艦」

球磨ちゃんを見上げて無邪気に煽る妖精さんに釣られてか、エンカウンターまで一緒になって小首を傾げて問い掛ける。

「………いいか駆逐艦。捕虜とはいえ、この鎮守府で生活するんならこの妖精さん達の言う事に一々マトモに取り合ってたら胃をやられるクマよ」

すると、意外にもムキにならなかった球磨ちゃんがぶい、と顔を背けながらボソボソとそう答え、スタスタと俺の脇を通って執務室へと入っていった。

おお、球磨ちゃんが怒っていない……！

なのになんだらうこの物足りなさ……！

てててーと球磨ちゃんに続いて部屋に入ってゆく妖精さんを見送って、ふと顔を上げると、俺よりも驚いた様子のエンカウンターが僅かに目を丸くして此方を見ている。

「アドミラル、気のせいかしら……？」

「？」

「……あの軽巡洋艦から、敵意を感じなかったわ」

「どうやら、エンカウンターの方も球磨ちゃんの変化に気付いて戸惑っているようだった。」

「そりゃあ、起きてすぐ頭に砲身グリグリされーの脅されーののホンの数分後にあそこまで丸くなられたらワケ分かんなくもなるわな。」

「あー……、そう、みたいだね。球磨も色々と思う所があったんだろ。なんせ目の前で深海棲艦が艦娘みたいになるの初めて見たみたいだったし、球磨も内心複雑——」

「え、ま、ま、待って！」

「俺が如何にも分かった風に頷いて見せるとエンカウンターが慌てたように遮ってくる。」

え、ナニ？

コレ、扉押さえんの結構疲れるから早く中入って貰えと——。

「か、艦娘みたいに、ってどういう事かしら？」

——ああ、自分じゃ見えてないんだった。

潮風薫る執務室。

水の入ったペットボトルにくにやりと歪んで映った自分の姿を見て、床板よりマシだろうと敷いたバナナっぽい葉の上でへたり込んだエンカウンターがワナワナと震えている。

そしてそれを執務机から見下ろし、どう声を掛けようか迷う手持ち無沙汰な俺と球磨ちゃん with 呑気に柿ピーを食べる妖精さんズ。

なんかつい最近も見た光景だなーと球磨ちゃんの方を見ると、

「……まあ、あの衝撃は実際に体験しないと分からないモノがあるクマ」

と、落ち着いた様子の球磨ちゃんが訳知り顔で言う。

球磨ちゃんあの倍くらい取り乱してたからね？

「くまはもっととりみだしてました」

「めっちゃないてた」

「とけてた」

「しろくまあいすたべたい」

ポリポリポリポリと静かな執務室に柿ピーをかじる音を響かせながら妖精さん達が一斉に球磨ちゃんを攻撃する。

ツインテは頭の上で柿ピーのおかきの方ばかりポリポリやっぺんのひよつとして嫌がらせか？

唐辛子で禿げさせようとしてるんか？

そしてその反撃に口ではなく、柿ピーのピーの方だけを素早く十個くらい拾い上げて食べるという報復に出る球磨ちゃん。

「あー！」

「おうごんひがー！」

「おにー！ あくまー！ ちひろー！」

「球磨は顔色が悪くなった方クマ……良くなったソイツとは条件が違うクマ」

ピーナッツをポリポリしつつ妖精さん達の熾烈なポカポカを片手でいなしながら、誰に言うともなくそう言った球磨ちゃんは複雑そうな眼差しでエンカウンターを見つめている。

しかしこの部屋ポリポリポリうるせえな……。

と、ようやく我に返ったのか、エンカウンターが顔を上げて、恐る恐るといった風に問いかけてきた。

「その……色々と聞きたい事があるのだけれど……」

「なんでもききたまえ」

「お前が答えるんかい」

頭の上でツインテがふんぞり返るのを感じる。

「てーとくこたえられる？」

「……このツインテに何でも聞いてくれ」

オレカツコワルイ。

「……私は」

ゴクリ、と細い喉を鳴らすエンカウンター。

ポリポリゴクリ、と柿ピーを呑み込む妖精さん達。

お前らさあ……（怒）。

「私は、艦娘になってしまったの？」

そう問いかけて、深刻そうな表情で頭の上のツインテを見上げる。それは困る、とでも言いたげな面持ちだ。

頭の上のツインテをむんずと掴んで机の上に置き、

「だ、そうだ、ツインテ。球磨といいエンカウンターといい、実際の所どうなんだ？」

と、俺も重ねて聞いてみた。

……お前もさり気なく色変わってるしな。

するとツインテは、聞くまでも無いことだと言わんばかりにふんぞり返って、自信満々に答える。

「わからん！」

「……え？」

オマエはそーいうヤツだよツインテ。

「……エンカウンター、ちよつと待ってね。はい、シリアスな場面になるとフザケなくなっちゃう妖精さんはしまっちゃうおうね〜」

「ぬわー♪」

虚を突かれた様子のエンカウンターに一言断って、ツインテを柿ピー（大袋）の空き袋にズボツと押し込んで、頭だけ出した状態で口を縛る。

ボロアパートでの激闘の日々の中で編み出した、イタズラ妖精さんへのお仕置き七手の一つ、妖精さん巾着である。

「おのれうでをあげたな……」

「おうぼうだー！」

「ようせいさんぎゃくたいだぞー」

「ついでにばっかりずるいぞー」

「ははは、効かん効かん。さあツインテ、観念して真面目に答えろ。コイツ等の不安が分からんワケじゃないだろ？」

服をよじ登って柿ピーで若干ベタつく手で頬をペチペチしてくる妖精さん達をガン無視して再度ツインテに問い直す。

これまで散々意味深なムーヴを繰り返して、何も分からんはないだろう常考。

すると、ツインテは巾着状態でチラリと球磨ちゃんの顔を、次いで

エンカウンター顔の顔を窺い、その顔色から本気の不安を感じ取ったのだろう、観念したかのようにポツポツと語り始めた。

「……どちらともいえないです。はんぶんかんむす、はんぶんしんかいせいかん。だからわからないのはほんとです」

「ほーん……だ、そうだぞ二人共」

どうやら嘘では無いらしいので、二人の反応をうかがってみると、

「半分深海棲艦……」

「艦娘……私が……」

それぞれに何やら受け入れがたいものがあるようだった。

自分自身の与り知らない所で自分が変わってしまう事に抵抗があるのは確かに分かる。

……しかし純粋な艦娘、純粋な深海棲艦というヤツにあつたことのない自分としては、そもそも両者の間にどういった違いがあるのかも分からないのだ。

これ聞いていいヤツだろうか？

「おい、ツインテ」

「なあに？」

こそつと小声でツインテに聞いてみる。

「そもそも艦娘と深海棲艦ってどう違うの？ 敵味方とカラーリング

以外に違いってあるんか？」

「……きのもちよう？」

「ちよつと聞き捨てならないクマよ」

おつと、球磨ちゃんには聞こえてしまっていたらしい。

「深海棲艦は突然人類を襲ってきた悪いヤツ等クマ。ソイツみたいな人型は珍しい方で、大体不気味な深海魚みたいな見た目で言葉も喋れないクマ。提督だってテレビとかで見たことあるクマ？」

ひでえ言い草である。

球磨ちゃん本人の前ですげえ言うじゃん……。

「あ、ああ、あの黒くてデカイ魚みたいなヤツ等なら何度もテレビとかネットで見たけどき……そつちじゃなくてエンカウンターみたいな娘との違いって何かなって——」

「私もちよつと聞き捨てならないわね。敵だからって不気味は酷いわ。イ級とかカワイイじゃない」

「オマエ正気で言ってる——ほ、ホンキの目クマ……」

「……あー、結局、違いつて考え方とか敵味方って事だけなのか？」

エンカウンターの美的感覚におのく球磨ちゃんに改めて聞いてみる。

「……深海棲艦、特にソイツみたいな人型は姫級や鬼級と呼ばれて、艦娘よりも遥かに頑丈で火力も桁違いクマ。あと、ソイツみたいに流暢に喋れるヤツは初めて見たクマ。大抵カタコトで……っていうかソイツもあのかきは確かカタコトだったクマ」

そう言ってる、エンカウンターの方を見る球磨ちゃん。

エンカウンターはというと、

「カタコト……？ そうだったかしら？」

と、納得がいかない様子。

「なんか早速食い違ってるんだけど……」

そして姫級とか鬼級とかもお兄さん初耳です。

それ俺に言っちゃって良いヤツ？

軍事機密だったりしない？

震えてまいりました。

「いや、球磨はおかしなコト言ってるクマ！ オマエ、覚えてないクマ？」

「失礼ね、覚えてるわよ……私は……」

答えかけて、不意に止まるエンカウンター。

……おや？

「……私……は……」

そう言ったきり、視線を宙に彷徨わせる。

「……え、まさか」

「覚えてないクマ？」

「ち、違うの！ 私が駆逐棲姫だった事も、その時した事も覚えてるわ。むしろ……」

「むしろ？」

「……私、自分がエンカウンターだったこと、いつの間に思い出したの

「……？」

愕然とした様子だった。

こつちだつて驚きである。

あんなに自信満々に自己紹介しておいて、そんなコトつてあるのん？

球磨ちゃんにチラリと目をやると、球磨ちゃんもまた少なからず驚いているようだ。

「ずっと自分が何者か分からないまま戦つてたのか？」

ナニカの間違いじゃないかと訊ねてみる。

すると、エンカウンターは俯いてボソボソと、

「いえ、そんなハズは………ううん、違う………」

確認するように呟き、葦色の瞳に不安げな色を滲ませながら顔を上げた。

力なく垂れ下がったツイールの先が、隙間風に揺れる。

「……そう、みたい。私、自分が駆逐艦だつてことはわかつてたけれども………自分が何だつたかハッキリとは分からないまま………というより、疑問にも、思つてなかつた気がするわ………」

そう言つて、黒いセーラー服の裾を、キュツと握つた。

「そ、そうなのか」

聞けば聞くほど不思議な生物だな深海棲艦……。

自分の名前が分からず意識もしないつてのはどんな感じなのだろうか、と思つた所で、ふと妖精さん達も同じだと気付いた。

……あれ、そんなに問題無いのか？

「なにやらあつしせんをかんじる」

「きづけばめでおつてしまう」

「それつてこいでは？」

「ていどくつてばわたしのことすきすき……」

「きゃー♪」

ダメだ、こいつらは参考にならない……。

「……心当たりはあるクマ」

と、益体もないコトを考えると、球磨ちゃんが、徐ろおもむに喋りだ

した。

戦場で何度も深海棲艦達と渡り合ってきた球磨ちゃんには、何か思い当たる節があるようだ。

「そもそも、はつきりと元の艦影がうかがえる艦娘と違って、深海棲艦は艦種こそ臍氣に分かつてても具体的にどの艦って分かる形状のヤツは少ないクマ。自分の名前が思い出せないのも、口調がぎこちなかったのも、その辺が関係してるのかもしれないクマ」

……そうらしい。

「うーん、ナルホド……?」

「提督、イマイチピンときてないなら無理に分かったフリしなくていいクマ」

球磨ちゃんにピシヤリとツッコまれる。

なんだろう、提督と艦娘の関係ってこんな感じでイイんだろうか？

涙がちよちよぎれそうです。

「……私、自分の事なのに、気付かなかった……」

エンカウンターは未だにショックが抜けきらない様子だ。

セーラー服にシワが寄ってゆく。

「クマだってオマエがサラツと名前を名乗った時にはビックリしたクマ。でもやつと分かったクマ。妖精さんに修理されて、半分艦娘になった事で艦の記憶を取り戻したみたいクマね。」

「そう、みたい」

そして艦娘と提督の有るべき関係について意味もなく悩む俺を放っておいて、球磨ちゃんとエンカウンターが着実にコミュニケーションを重ねている。

何にせよ、エンカウンターは艦娘に近づいた事で記憶や情緒を取り戻した……でいいのだろうか？

「……な、なあ、それって悪い事じゃないよな？」

「え、ええ」

それなら何も問題ないとエンカウンターに訊ねてみれば、彼女もハツとしたようにそう肯定した。

ピヨコン、と、ツインテールの先の薄紫が跳ねる。

「じゃあ、良かったじゃないか！ 思い出せたんならさ、そんなしよげてないで前向いていこう、前向いて！」

重い空気を払拭しようと、椅子を下げ腰を上げて励ますべくお尻を浮かせた所で、球磨ちゃんがちよつと待ったと言うように俺の肩に手を置いた。

「いや、その前に確認クマ」

「……」

「すぐごと腰を下ろす。」

なんだろう、この中学生女子に頭が上がらない感じ……クセになつたらどうしよう……。

「オマエはどうやら駆逐棲姫だった時とは違って、随分艦娘らしくなったクマ。話を通じそうと言い換えてもいいクマ」

「何が言いたいのかしら」

そんなくだらない葛藤をするアホな俺をよそに、球磨ちゃんの尋問は続く。

「簡単な質問クマ。オマエ等深海棲艦は、何の目的があつて人類を襲うクマ？」

「……」

執務室に、再び沈黙がおりる。

西の空から差す日の光が天井の隙間から幾筋もの光の柱になって、隙間風に揺られ静かに舞う砂埃を斜めにキラキラと照らす。

それは、根本的な問いだった。

人類が深海棲艦の脅威に晒されるようになってから、球磨ちゃん達は何年もの間空くうに向かつて問い続け、答えのないままに戦い続けてきた。

そして今日、初めて深海棲艦との対話が実現したのだ。

先の見えない戦いにとうとう差し込んだ一筋の光だ、球磨ちゃんが真剣になるのも当然だろう。

流星の妖精さん達も空気を読んで静かにエンカウンターカウンターの答えを

「——とのことですがえんかうんたーしのおかんがえはどうでしょう

か！」

「ごくみんにはしるけんりがあります！」

「きくところによるとえんかうんたーしにはかこにていとくとのねつ
あいぎわくが」

「はつきりとおこたえいただきもがもが——」

「提督」

「はいはい黙ってようねー、そういう空気じゃないからねー」

どこから取り出したのか、記者みたいな格好で小さなマイク片手に
カメラのフラッシュをパシヤパシヤと連射しつつエンカウンターに
突撃しようとする妖精さん達を両手で抱き抱えて黙らせる。

いい加減にせえよ貴様等。

良くも悪くも毒気を抜かれたようで、エンカウンターは丸くした目
をフツと緩めると、コホンと小さく咳払いして、

「……悪いけれど、その質問にはまだ答える事が出来ないわ」

と、真っ直ぐに球磨ちゃんの目を見つめながら答えた。

「まだ？」

「ええアドミラル。まだ、よ。私達は何も人類が……いえ、これもまだ
言えない」

俺が腕の中でモゾモゾと暴れる妖精さんを押さえながらそう重ね
ると、エンカウンターは此方を見てそう申し訳無さそうに言った。

エンカウンター自身も、それをもどかしく思ってる……というのが
伝わってくる。

深海棲艦側の事情ってヤツなんだろうか……で、納得するわけない
のが球磨ちゃんだ。

「何勿体つけ——」

「待て、待って、球磨、ちゃんと聞こう……エンカウンター、何でか聞
いてもいい？」

せっかく少しは分かり合えそうなのにまた険悪になっては困ると、
慌てて球磨ちゃんを遮り、エンカウンターにそう訊ねてみた。

俺と妖精さんは重苦しい空気に弱いのだ。

ポンポンが痛くなってしまう。

「……優しいアドミラル。アドミラルの事は、信頼しています。アドミラルには何故か分からないかもしれないけれど……私はアドミラル・クドウの事は心から信じたいと思っています」

「お、おう」

と、またも向けられる謎の好意に思わず気圧されてしまう。

何なんだろう、出会って数分でこの好感度、これが伝説の提督補正ってヤツなのか……？

球磨ちゃんの時といい、俺の工藤って苗字に何かあるんだろうか？

「おまえもかぶるーたす」

「なれなれしいぞしんいりー」

「ていとくはわれわれにめろめろなんだぞー」

「らぶいふんいききんしー！」

と、俺の考えを遮るように、思わず緩んだ腕の中からピヨコピヨコと頭をだした妖精さん達が口々にトンチンカンな事を言いだす。

イモムシ状態のツインテも、ピヨコンと膝の上に跳んできて、「でれでれするなー」とみぞおちに頭をグリグリやっている。

「……本当に妖精さん達の提督に対するその好感度はどうなってるクマ？ ……まさかホントになにかヤマシイコトを……!?!」

「そりやあもう」

「ふかくあいしあつたなか♪」

「ぽっ……♡」

「あるかあ!?! え、ちよつと球磨ホントに引いてない？ ねえ、ちよつと!?! 目を、目を見て球磨ちゃん!?! 誤解だから!」

スススと半歩距離を取って口元に手をやる球磨ちゃんに慌てて弁解する俺を見て、エンカウンターがクスリと小さな笑いをこぼす。

しばらくぶりのその明るい声に、驚いてエンカウンターを見る。

エンカウンターは、俺と球磨ちゃんの視線に気付くと、横座りに姿勢をただし、俺を董色の瞳で見つめて口を開く。

「アドミラルは紳士だもの、妖精さんに好かれるのは当然よ。……」

それでも、私達深海棲艦の思いを伝えるにはまだ……」

「……まだ?」

「……怖いんです。アナタに理解して貰えないかもしれない事が」
そう言つて、目を伏せる。

きつと恐ろしい存在であるハズの深海棲艦が、弱々しく項垂れてい
る。

その白いつむじを見ながら、なんだか自分が酷く悪い事をしたよう
な気分になる。

思えば顔を合わせてからこれまで、エンカウンターは一度も俺や球
磨ちゃんを害しようとはしなかった。

その素振りさえもだ。

自分の中で漠然とイメージしていた絶対悪の姿が、その輪郭を失っ
てゆく。

……深海棲艦とは、いったい何なのだろうか？

「クマ。理解できるワケ無いクマ。コイツは………こんなでも提督
クマ。オマエ等に同情しちゃう位には甘いクマが、大局を見誤る程の
バカでも無い………はずクマ」

……球磨ちゃん、それは褒めてる？

褒めてくれてるんだよね……？

球磨ちゃんの台詞は、言葉こそ深海棲艦達の言い分など理解できる
はずがないという強いものだったが、その声色はどこか悲しげで、苦
しそうだった。

「大局、ね」

それを聞いたエンカウンターはというと、目を細め意味深に呟くの
みだった。

見誤っているのはそちらだ、と言っているようにも見えるが、その
言い分とやらを聞けない以上、判断のしようもない。

結局の所、球磨ちゃんの質問で分かったのは深海棲艦にも言い分が
有るが、その大義は人類サイドには理解され難いモノらしい………つて
コトだけだろうか？

鎮守府作るぞと息巻いてこの島にたどり着いて、図らずも早々に接
触出来てしまった会話の出来る深海棲艦ちゃんだったが、所詮俺なん
ぞ何の能力も威厳もないフリーターだ。

映画みたいなネゴシエイトなんて出来るはずもなかった。

モノホンの提督ならばもっと上手くやっつてんだろーなあと思うと切ないモノがある。

「てーとくはよくやっつてるぞ」

「ツインテ……お前時々心とか読めるんじゃないかと思うよ」

「てーとくはわかりやすいからねー♪」

「……」

高学年女子みたいなエンカウターの心の内も分からん俺。

なんも考えて無さそうな二頭身不思議生物にすら簡単に心を読まれる俺。

自分涙良いスカ……？

「どちらにせよ、オマエは捕虜クマ。例えその気がなくてもコツチは幾らでも尋問出来るクマが……？」

遠い目をしながら妖精さん達に顔をペチペチされる俺を無視して、球磨ちゃんがグツと目に力を入れて再び圧を掛ける。

球磨ちゃんの動きに合わせて、ギシリ、と床板が鳴る。

「尋問……」

そうなのだ。

こうして仲良く(?) 会話をしているが、深海棲艦と俺達は敵同士。

捕虜と看守、捕らえたモノ捕らえられたモノの関係なのだ。

本当に人類の明日を憂いているのなら、心を鬼にしてこの少女を尋問し、得た情報を本土に伝えなきゃならないんだろう。

球磨ちゃんは、こんな俺が本当に提督になれるように手伝ってくれと言っていた。

馬鹿な自分でも、この情報が貴重で重要なものだと分かるくらいだ。

持って帰る事が出来れば、きっと自分の立場は良くなる。

才能がなくても本物の提督になれたり……それが無理でも憧れだった艦娘と関わる仕事が出来るかもしれない。

——それでも。

ゆらゆらと揺れる光の中、緊張の面持ちで此方を見つめるエンカウンターと目が合う。

駆逐棲姫、エンカウンター。

武装を剥がされ、燃料を抜かれ、抵抗するすべを持たない、小さな少女だ。

黒いセーラー服に身を包んだその小さな肩に、俺の知らない何か大きなモノを背負ってココに居る。

その姿は、球磨ちゃんと同じく、俺なんかよりもずっと大きく見えた。

そんな子が、俺を信用すると、そう言ったのだ。

「いや、球磨、やっぱり……エンカウンター、君は俺と球磨……と、コイツ等の事、信じられそうってなったら、話してくれる気はあるんだよな？」

球磨ちゃんと妖精さん達に、順番に視線を合わせてから、再びエンカウンターに向き直ってそう口に出す。

馬鹿なコトをやってる自覚はあるが、ソレこそ今更ってヤツだ。

思えば妖精さん達と出会ってから、馬鹿なコトばかりやってる俺だ。

もう一つ二つ増えた所で誰に失望される訳でもなし、マイナスなんて無いだろう。

「……ええ」

「なら、球磨……」

それなら。

どうせなら、目の前の不安に震える女の子の信頼に答えてやるくらいしたっていいんじゃないかと思う。

球磨ちゃんはイイ子だし、妖精さん達も……うん、無邪気なヤツ等だ。

意外と直ぐに打ち解けて仲良くなれるかもしれないし、いつか話してくれたら儲けもの位の気持ちでいれば良いだろう。

何よりも、既にこのエンカウンターという深海棲艦の女の子を、敵として見られない自分があるのだ。

そんな俺の内心など、賢く敏い球磨ちゃんにはお見通しだったんだろう。

球磨ちゃんはジッと俺の目を見つめ、パイとそっぽを向くと、深く溜息を吐いた。

「……………クマあ。分かってるクマ。提督はつくづく軍人に向いてないクマ」

許された！

思わず笑顔で振り返ると、ホツとしたような顔でぎこちない笑みを浮かべるエンカウンターと目があつた。

安堵が胸に広がる。

球磨ちゃんはその俺を見てか、執務机により掛かるように体重を預けて、呆れたように続けた。

「取り敢えず尋問は先送りクマ。オマエもあまりに艦娘っぽくて気が進まないのも確かクマ。……でも、必要となったら容赦しないクマよ？」

すっかり険の取れた、優しげな声色だ。

どうやら球磨ちゃんも、少なからず俺と同じ気持ちだったらしい。

すっかり釘は刺していたが、それでこそ頼れる球磨ちゃんである。

短い間かもしれないが、これからも不甲斐ない俺のかわりにこの鎮守府のしつかり者担当を頑張つて欲しい。

エンカウンターも、空気が和らいだのが分かったようだ。

すっかり初対面のときの小生意気な雰囲気を取り戻して、ニコリと笑う。

相変わらず横座りのままだが、ツインテとお揃いの髪を樂しげに揺らして、片手を口に可愛らしく小首を傾げる。

「ええ、それでいいわ。むしろ寛容過ぎて驚きなくらい。……流石アドリミラルね、こんな凶暴で変な語尾の艦娘を手懐けるなんて」

「気が変わったクマ。提督、せんきよ船渠室借りるクマ。刺激が強いから覗いちやダメクマ」

え、何それ超気になる——じゃなくて！

何で最後に余計なコト言うかなこの子!?

据わった目で猛然とエンカウンターに掴みかかろうとする球磨ちゃんを慌てて羽交い締めにする。

エンカウンターちゃん、ロクに立てもしないのに球磨ちゃんをからかうような——あ、あ、いけません球磨ちゃん！

捕虜だから！

ナニカの条約に引つかかっちゃうから！

うわ、燃料切れてるハズなのになんて力……！！

「うおー、じんもんだー」

「ごうもんだー♪」

「ないたりわらったりできなくしてやるー♪」

「ぶっそうなこと言うなアホ共！ 球磨落ち着いて!? ステイ！ 球

磨ちゃんステイ！ 俺球磨ちゃんのへんな語尾好きだから！」

「クマッ あゝ!!」

「痛い!?」

「アハハハハ♪」

——こうして、遙か南の島に漂着して僅か二日目のいまだ明るいつ方頃。

我が勿忘鎮守府に、ちよつと変わった住人がまた一人増えたのだつた。